



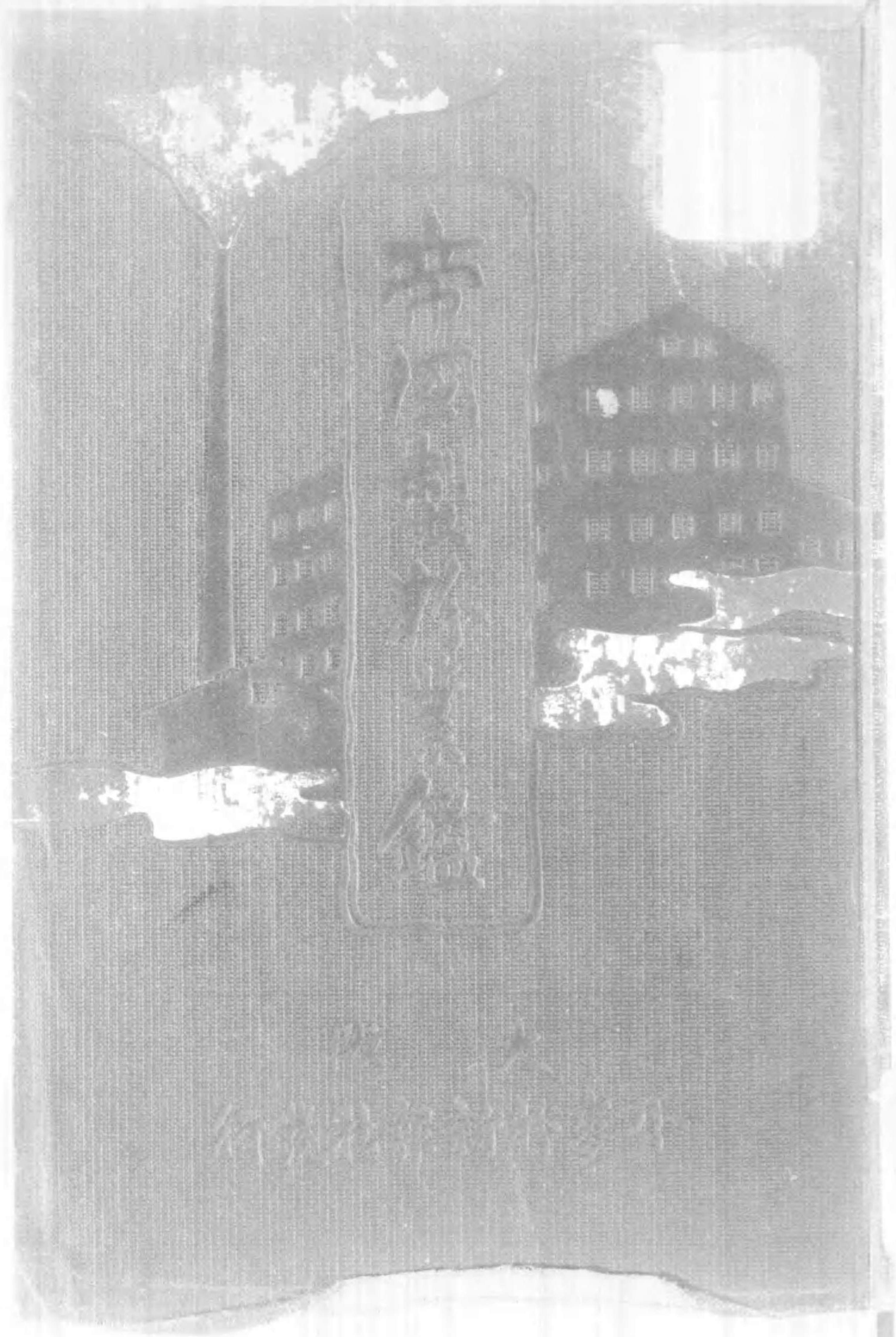
350  
3



始











帝國製粉業鑑

小  
學  
新  
報  
社  
寄  
贈  
本

大正  
2. 3. 17  
寄贈



## 帝國製粉業鑑發行に就て

我社は去る明治四十一年十月、小麥粉新報創刊第壹週年記念として、製粉業一斑と題する一冊子を發刊し、本邦斯業界の情態を具さに江湖に紹介したり、然るに爾來斯業は、歲月の遷移と國連の進張とに隨伴して、倍々隆熾の觀を呈し、中にも斯業各會社の如きは、或は一二の他と併合したるもの無きに非ずと雖も、大體に於ては、孰れも一層堅實の態度を以て發展せるのみならず、一方には新會社の更に勃興したるもありて、要するに一般に製産力の増大並に製品の品



質改善等を実現するに到り、其進歩發達洵に著大なるが、之と同時に各會社の内容其他にして變遷更革せる點亦頗る多し、是に於てか斯業界は、曩年の製粉業一班の後繼者たる意義に於て、帝國製粉業の現況を遺憾無く説明す可き新書冊の出でん事を要望するや頗る切なり、則ち我社は此要求に應ぜんの目的にて、最も正確嶄新の材料を極めて豊富に蒐集し、由つて以て本書を編成したり、若し夫れ多少とも斯界に裨益する有らば幸甚。

大正二年二月

小麥粉新報社

## 帝國製粉業鑑目次

### (一) 我が製粉業

- (イ) 水車製粉の時代……………一
- (ロ) 明治年代の發展……………二

### (二) 製粉技術概要

- (イ) 總 說……………五
- (ロ) 製粉工場……………五
- (ハ) 原料麥の精選……………一
- (ニ) 製粉の順序……………一八
- (ホ) 製粉の仕上……………三〇
- (ヘ) 製粉に要する時間……………三二

目 次

一



(ト) 製粉粘力の検定 ..... 三二  
 (チ) 粉出歩合の計算 ..... 三五

(三) 各製粉所現況

(イ) 日本製粉株式會社 ..... 三八  
 (ロ) 日清製粉株式會社 ..... 五〇  
 (ハ) 東亞製粉株式會社 ..... 五九  
 (ニ) 株式會社増田製粉所 ..... 六六  
 (ホ) 日本精米製粉株式會社 ..... 七三  
 (ヘ) 株式會社大里製粉所 ..... 七八  
 (ト) 滿洲製粉株式會社 ..... 八三  
 (チ) 朝日製粉株式會社 ..... 八八  
 (リ) 株式會社名古屋製粉所 ..... 九一

(又) 札幌製粉株式會社 ..... 九四  
 (ル) 松本製粉所 ..... 九八  
 (ヲ) 益田製粉所 ..... 九九  
 (ワ) 盛田製粉所 ..... 一〇一  
 (カ) 大阪製粉所 ..... 一〇一  
 (ヨ) 白石興産合資會社 ..... 一〇一  
 (タ) 松田製粉合名會社 ..... 一〇四  
 (レ) 小宮製粉所 ..... 一〇四  
 (ソ) 各製粉株式會社收支計算 ..... 一〇六

(四) 小麥及小麥粉に關する統計

(イ) 明治四十四年度内地小麥作付反別 ..... 一  
 (ロ) 明治四十四年度内地小麥生産額 ..... 三



(ハ)	明治四十四年度内地小麦一反歩當平均收穫高	四
(ニ)	内地小麦作付反別累年比較	六
(ホ)	内地小麦收穫高累年比較	八
(ヘ)	内地小麦一反歩當收穫高累年比較	九
(ト)	外國産小麦最近十個年間輸入額	一〇
(チ)	外國産小麦最近五個年間國別輸入額	一〇
(リ)	外國産小麦最近五個年間で港別輸入額	一二
(ヌ)	外國産小麦最近五個年間輸入狀態	一三
(ル)	明治四十三年度内地小麦粉製産額	二一
(ヲ)	内地小麦粉製産額累年比較	二四
(ワ)	外國産小麦粉最近拾個年間輸入額	二五
(カ)	外國産小麦粉最近五個年間國別輸入額	二五
(ヨ)	外國産小麦粉最近五個年間で港別輸入額	二七

(タ)	外國産小麦粉最近五個年間輸入狀態	二八
(レ)	明治四十四年度内地小麦國別輸出額	三五
(リ)	内地小麦輸出額累年比較	三六
(ツ)	明治四十四年度内地小麦粉國別輸出額	三七
(ネ)	内地小麦粉輸出額累年比較	三七
(ナ)	最近三個年間世界各國小麦生産額	三八
(ラ)	内地小麦價格對照	三九
(ム)	内地小麦年及月別平均相場累年比較	四一
(ウ)	外國小麦最近三個年間平均相場累年比較	四二
(井)	外國小麦粉最近五個年間平均相場累年比較	四三
(ノ)	本邦に於ける最近三個年間小麦粉消費額概算	四四
(オ)	内地穀最近五個年間産出額	四五
(ク)	外國産穀最近五個年間輸入額	四五



# 附 録

目 次

六

## 北太平洋沿岸洲に於ける製粉業

(一) 緒 言	一
(二) 製粉工業	二
(三) 巨大なる積出	二
(四) 製粉地としての沿岸洲	三
(五) 製粉業の沿革	四
(六) 對歐洲貿易	九
(七) 對東洋貿易	一五
(八) 東洋の前途	二四
(九) 太平洋沿岸市場	二六

(一〇) 巴運河と米國商船	三一
(一一) 積出港の位置と現状	三五
(一二) 結 論	三七
(一三) 米國小麥及小麥粉に関する統計	

(一) <small>自一九一一年七月 至一九一二年六月</small> コロンビヤ河より小麥積出高	四一
(ロ) ホートランド港より小麥積出高	四三
(ハ) ホートランド港より小麥粉積出高	四四
(ニ) ヒュゼットサウンドより小麥積出高	四四
(ホ) ヒュゼットサウンドより小麥積出高	四五
(ヘ) ヒュゼットサウンドより小麥粉積出高	四五
(ト) オレゴン州より加州への小麥、小麥粉及穀積出高	四六
(チ) ワシントン州より加州への小麥、小麥粉及穀積出高	四七
(リ) <small>自一九一二年七月 至一九一三年六月</small> ヒュゼットサウンドより日本向小麥積出高	四七
(ヌ) コロンビヤ河より小麥及小麥粉積出高累年比較	四八

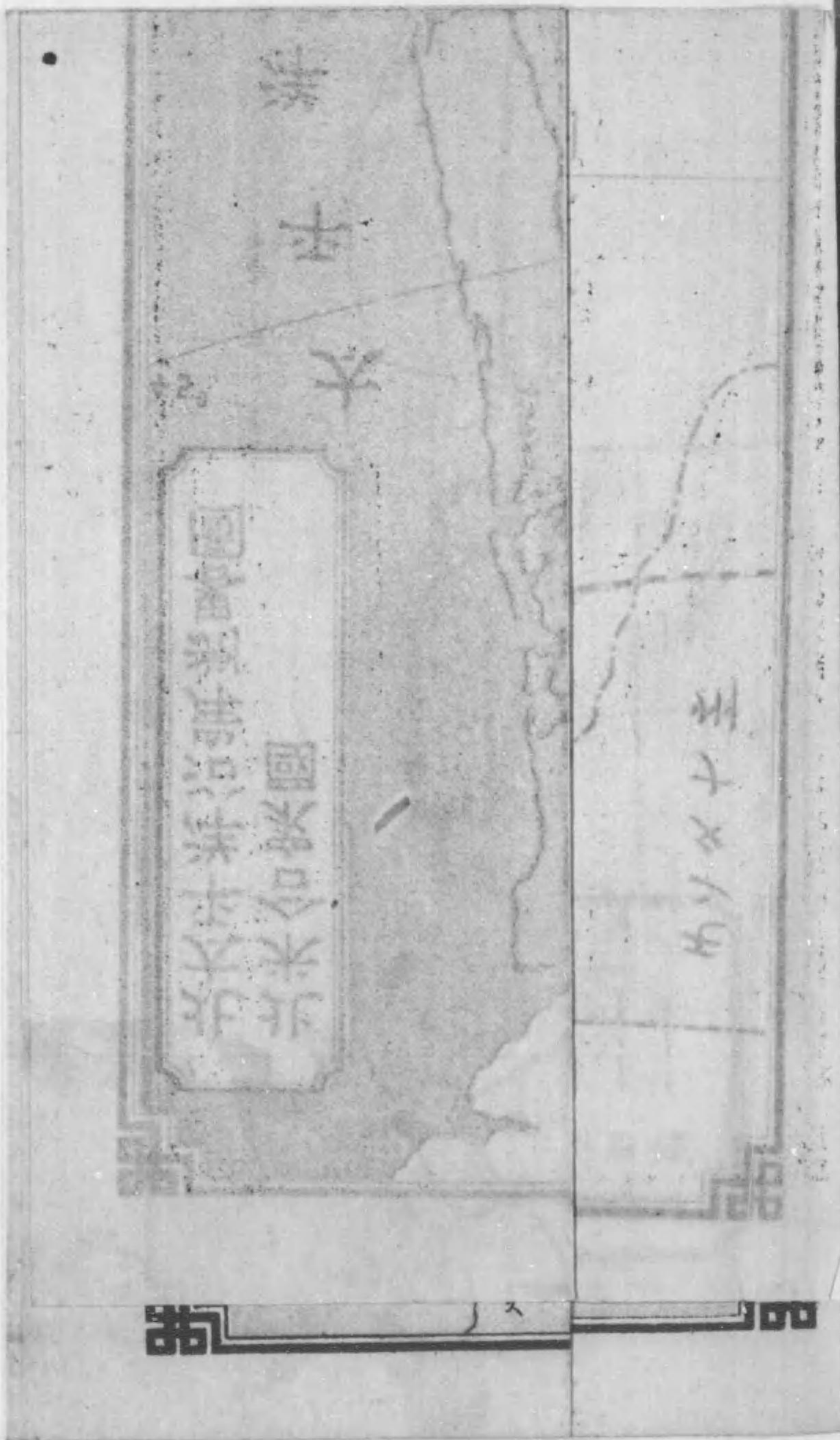
目 次

七

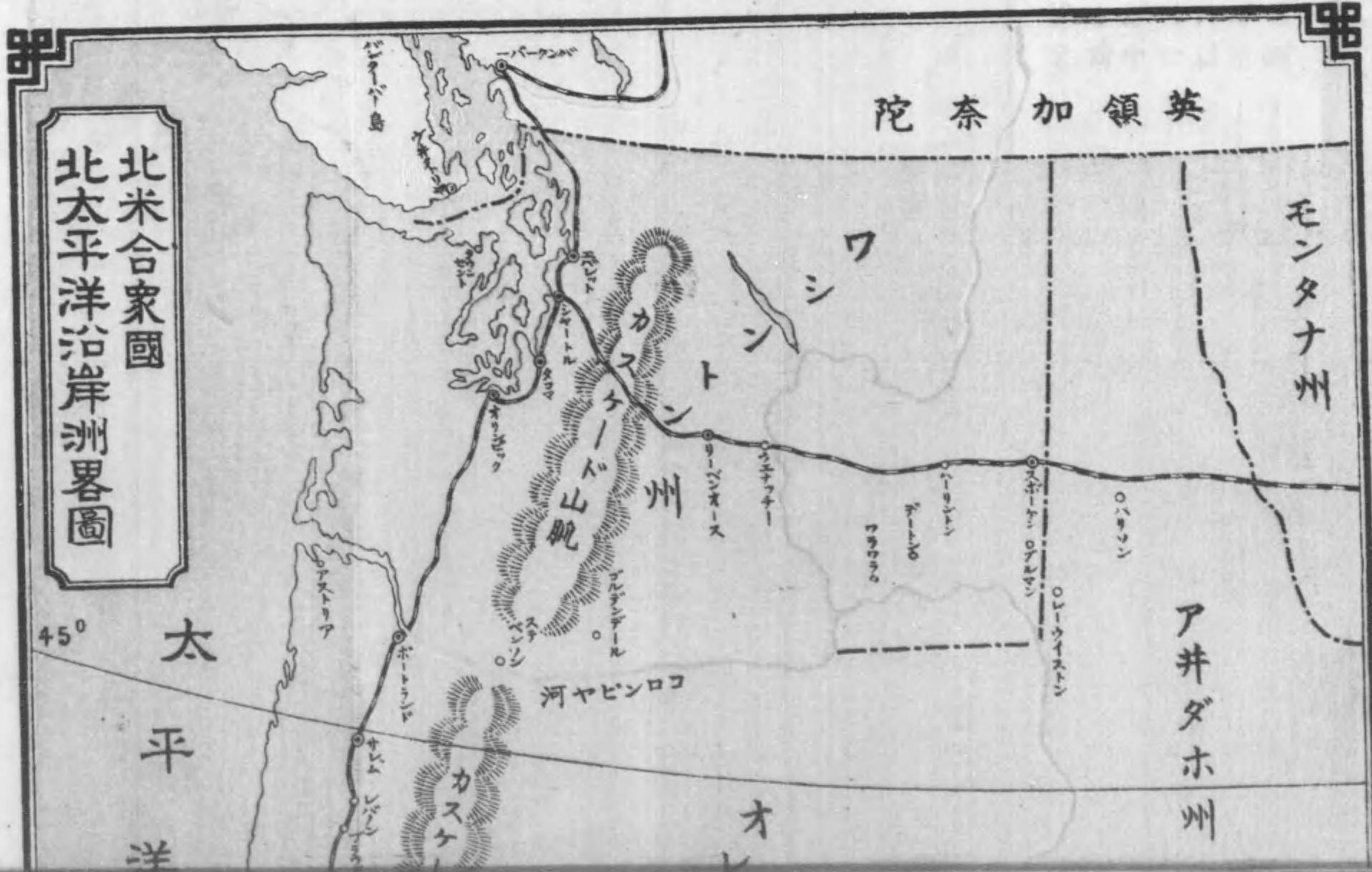


# 帝國製粉業鑑目次

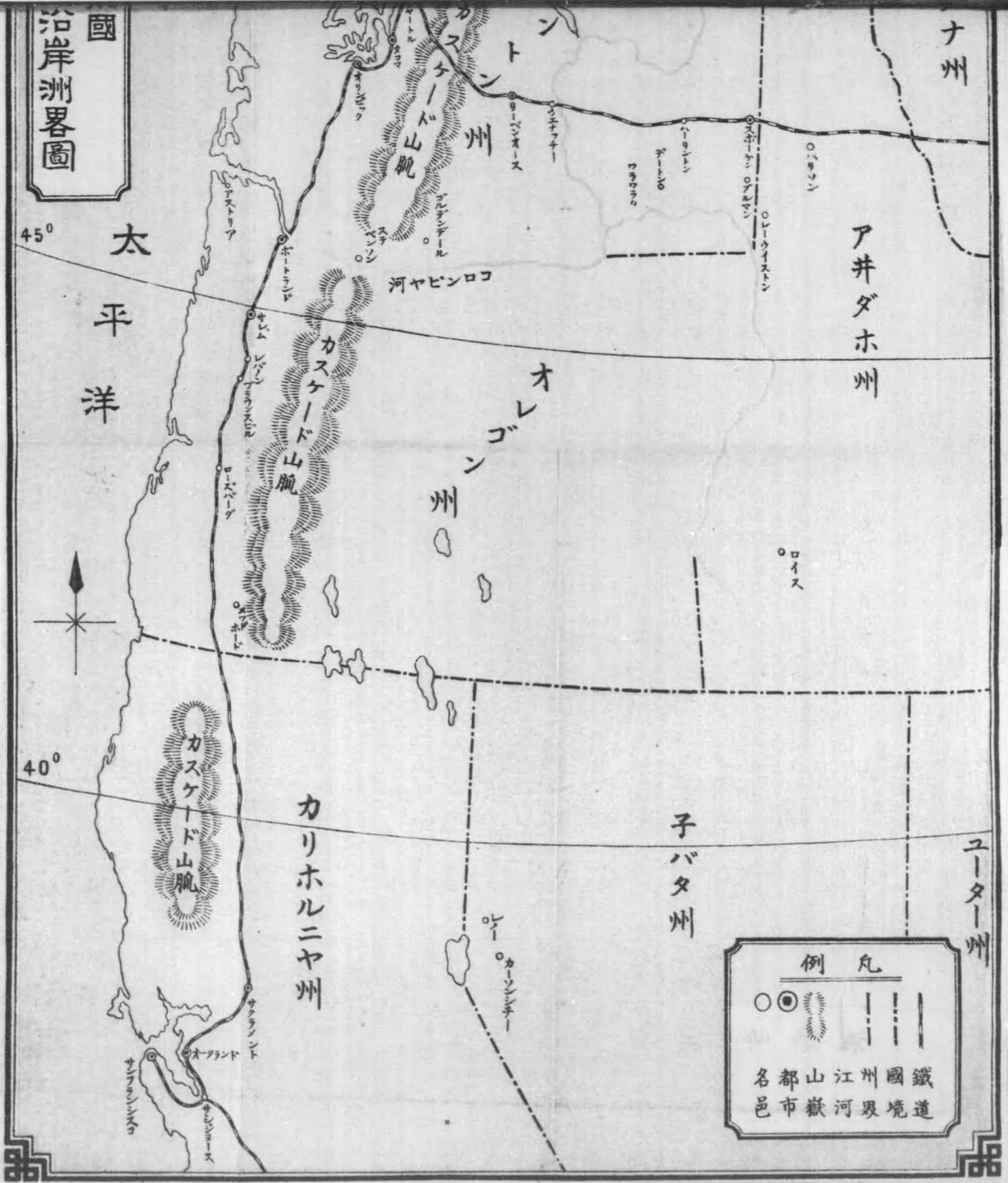
目次	八
(ル) ビユゼットサウンドより小麥及小麥粉積出高累年比較	四八
(ヲ) 自一九一二年九月コロンビヤ河より歐洲向小麥積出高	四九
(ワ) 自一九一二年三月ビユゼットサウンドより歐洲向小麥積出高	五一
(カ) 自一九一二年ビユゼットサウンドより日本向小麥積出高	五二
(ヨ) 自一九一二年コロンビヤ河より日本向小麥積出高	五三
(タ) 自一九一二年ポートランド港より小麥粉輸出額	一
(レ) 自一九一二年ビユゼットサウンドより小麥粉輸出額	一
(ソ) 自一九一二年サンフランシスコより小麥粉輸出額	一
(ツ) 自一九一二年七月コロンビヤ河より東洋各港向小麥粉積出高	二
(子) 自一九一二年七月ビユゼットサウンドより東洋各港向小麥粉積出高	三
(ナ) 自一九一二年ビユゼットサウンドより東洋各港向小麥粉積出高	四
(ラ) 自一九一二年コロンビヤ河より東洋各港向小麥粉積出高	四











帝國製粉業鑑目次畢

目次	頁
(ル) ヒュゼットサウンドより小麥製粉積出高單年比較	四八
(ヲ) 一九一二年以前コロンビヤ河より歐洲向小麥積出高	四九
(ワ) 一九一二年以前ヒュゼットサウンドより歐洲向小麥積出高	五一
(カ) 一九一二年以前ヒュゼットサウンドより日本向小麥積出高	五二
(ヨ) 一九一二年以前コロンビヤ河より日本向小麥積出高	五三
(タ) 一九一二年以前ポートランド港より小麥粉輸出額	五三
(レ) 一九一二年以前ヒュゼットサウンドより小麥粉輸出額	五三
(ソ) 一九一二年以前サンフランシスコより小麥粉輸出額	五三
(ツ) 一九一二年以前コロンビヤ河より東洋各港向小麥粉積出高	五三
(チ) 一九一二年以前ヒュゼットサウンドより東洋各港向小麥粉積出高	五三
(ナ) 一九一二年以前ヒュゼットサウンドより東洋各港向小麥粉積出高	五三
(ラ) 一九一二年以前コロンビヤ河より東洋各港向小麥粉積出高	五三



營業項目

砂糖 米穀 小麥粉 棉花 肥料  
 小麥 金物 硝子 其他輸出入品

神戶市榮町三丁目



湯淺竹之助商店

株式會社 湯淺竹之助  
 朝日製粉株式會社 特約販賣店

支店所在地

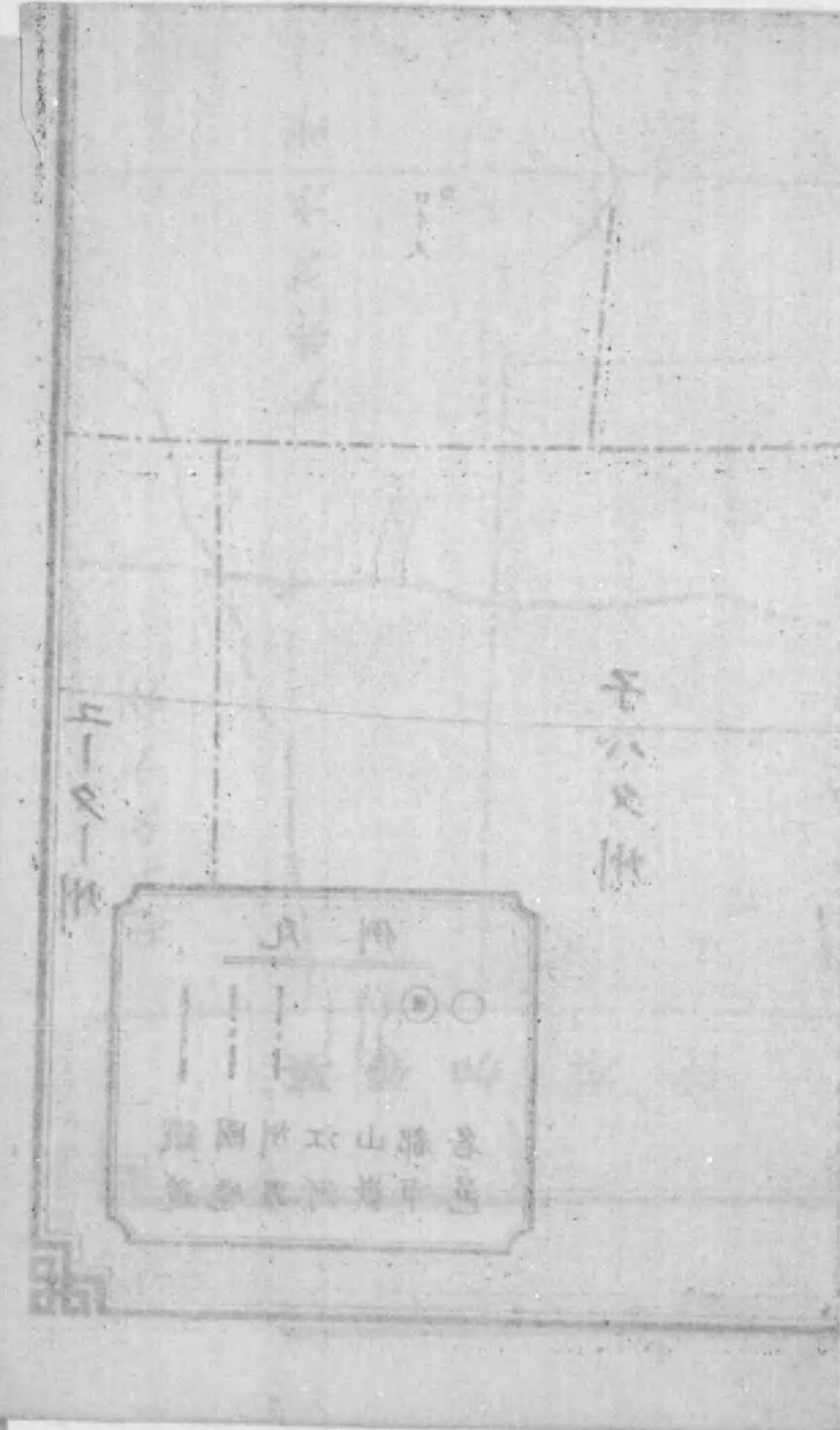
大阪市東區北久寶寺町堺筋  
 同市同區北濱三丁目輸入部  
 東京市日本橋區北島町  
 下關市西南部町

出張店所在地

門司市 傳馬町一丁目  
 名古屋市 小樽町  
 海田市 中色町  
 大連市 打山縣  
 上海 江西路二十四號  
 漢口 法租界河街十號  
 天津 州街北  
 滿洲 州街北  
 青島 膠州路  
 北京 崇文門  
 神戶市 榮町三丁目

輸入部 內地部  
 輸出部 會計部

電話長 四〇番 八三八番  
 七〇三番 三〇四五番





# 帝國製粉業鑑

大阪 小麥粉新報社編纂

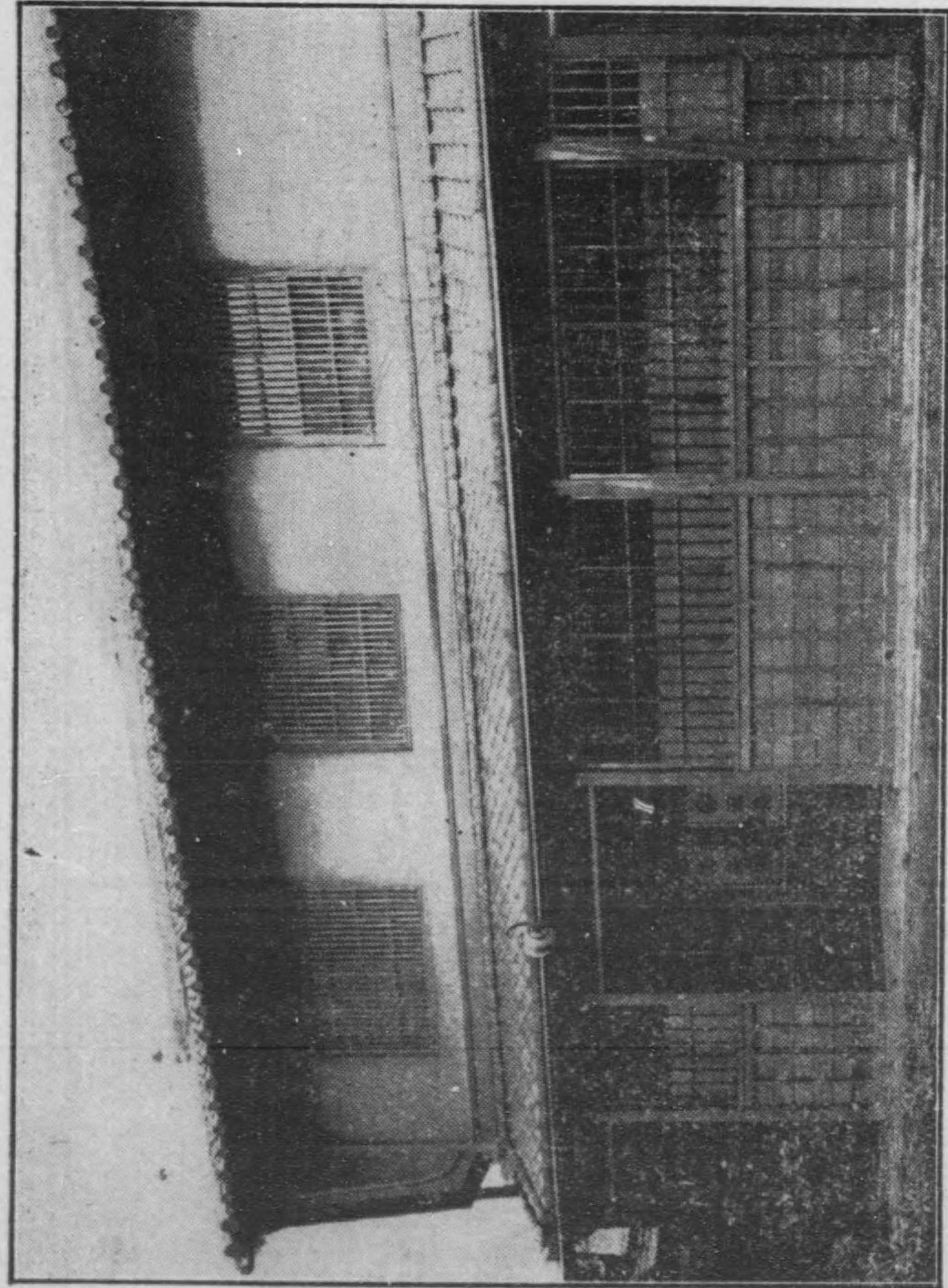
## 一 我が製粉業

### (イ) 水車製粉の時代

世人の我が製粉業を談ずる者の言に聽くに、帝國の製粉業は、明治時代に於て始めて發達し大成したりと、多くは曰ふ、實に然り、然れども明治以前に在つても、我國には斯業の存在して、而も一個の製産業として、相應の

水車製粉の時代

地位を占有したるの事實を没却す可からず、隨つて我が製粉業の記録を作さんと欲せば、先づ明治以前に遡つて、其沿革を叙するを至當とせん。抑も我國に於ける製粉事業は、遠く往昔より之れ在りしならんと想はるれども、如何せん史籍の其起源を明かにせるもの無きを以て、何時の年代に始まりたるかは、遺憾ながら遡乎として稽ふるに由なし、然れども彼の我國



湯淺南助商店支店



水力利用者の始祖と稱せらる、良岸安世が、水車の發明を爲したる時代を境として、其以後に於て漸く水車製粉業の興起したるは、蓋し疑ひを容れざる事實なる可し、而して時世の推移と共に水車の利用は益々進み、之と同時に主として家用に過ぎざりし製粉業は、漸次に其範圍を超出して、遂に營業的狀態に發達し、其經營者は假令小規模ながらも、製品を市場に供給するに至り、加ふるに一般生活程度の昂進は、麵類に、菓子に、愈々製粉の需要を喚起し、果ては近く徳川時代より明治の盛世に迫るまで、水車製粉は實に我國製粉業界の權威たりしなり、而も遠き古は暫く別として、足利時代より降つて明治の近

代に到るまで、此水車製粉の首位を占めたるものは小麥粉にして、米其他を原料とする他の製粉は、極めて微々たる數額に止まりたる可きは、當時の國民生活狀態に徴して、正しく推知するに足れり。故に換言すれば、我が水車製粉業の歴史及び其發達は、即ち小麥粉業の歴史及び其發達と見做すを得可く、随つて帝國製粉業に對して、水車の寄與したる効果、甚大なりと謂ふ可し。

(口) 明治年代の發展

彼の幕末の衰世より維新の變革に遭ひ、更に明治の新時代を迎へたる製粉業の狀態如何と觀るに、明治天皇の御宇四十五年間を通じて、

他の商工業が概して漸進的能度々以て進み、遂に偉大の發達を爲したるに似ず、單り斯業に到つては、特殊の徑路を経て、恰も始めは處女の如く、終りは脱兎の如く、實に奇蹟的大發展を遂げたり。

今其發展の跡を尋ねるに、明治の初年より二十餘年間は、全く舊來の水車製粉に依りたる時代にして、全国各地に散在せる幾多の水車場は、實に製粉供給の主力として、頗る全盛を極めたり、尤も此間にも政府に於ては、夙に機械製粉業の有利なるに着眼し、官人を海外に派して製粉機械を購入せしめ、帝都に於ける米廩内に模範的製粉所を官營し、又民間に在つては、泰西日新の智識を収集せる先覺

の士、等しく率先して機械製粉業を經營せるもの二三ありしと雖も、或は經驗無き新事業なるを以て好結果を得ず、或は時勢の可ならざるものありしに原因して蹉跌し、不幸未だ機械製粉業の威力を發揮するに至らず、空しく水車製粉の盛大を觀望するの止むを得ざる境遇に彷徨したるが、時常に利非ざるにあらざ、果然二十七八年戰役の勃發して、其大捷を獲ると共に、國勢民情二つながら異常に伸張し、一般商工業亦急速度の膨脹を實現したり、此時二十餘年間舊套を脱せざりし我が製粉業も、煥然として革新の曙光を閃めかし、三十年九月を以て、日本製粉株式會社は、一日二百パーセントの製造力あるを標榜して、機



械製粉て製出し、以て在來の水車製粉に拮抗せんとしたり、此風潮に刺激せられたるの結果として、爾來各所に機械製粉業は興起したるも、概ね規模弱小にして、其製産額の總てを合算するも、猶ほ水車製粉の壘を摩するに足らざりしが、斯る情況を持續しつゝ推移する間に、三十七八年戰役は來れり、國運を賭し、國力を盡くしての奮闘努力は、幸ひに良好の戰果を贏得し、戰後國運の進轉と俱に、製粉業も亦急激なる變革を來たし、東西到る處に大規模、大資本の機械製粉業勃興し、其製産額の如きも莫大の數量を算し、市場に於ける優勝の勢力は、單に國內の水車製粉を壓倒するのみならず、能く輸入洋粉を驅逐する

に足り、全然舊觀を一變したり、即ち前に言へる「處女の如く」とは、此戰役以前の狀態にして、又「脱兎の如く」とは、是れ以後未曾有の發展を爲せる活況を指せらるに外ならざるなり、蓋し明治時代が、島國的舊態を脱して、開明文化の域に進み、我が國史に類例を見ざる黄金時代たりしが如く、製粉業も此時代に於て一大革命を遂げ、水車製粉は僅かに殘壘を守持するに止まり、機械製粉代つて實權を掌握し、雖て今の大正の昭代に暨べりと謂ふべし、若夫れ明治三十七八年以後に興起したる機械製粉業の盛大なる實況に到つては、別に「各製粉所現況」の條下に詳録する事とし、此處には省略す。

## (二) 製粉技術概要

### (イ) 總説

明治三十七八年以來數年間に、各地に新設された大規模の製粉所は、何れも會社組織に成る事業で、而も皆新式の機械を應用して、優等品を續々製出し、其盛大な有様は、單り從來の水車製粉と同一の論で無いのみならず、米國あたりの大製粉所に比べて見ても、左程遜色は無いのである、併しながら機械製粉業は、如何に長足の發展を爲したとは謂へ、何分にも新事業の事であるから、邦人の多くは之に關する智識が乏しい様で、一體新式製粉

製粉技術概要の總説

### (ロ) 製粉工場

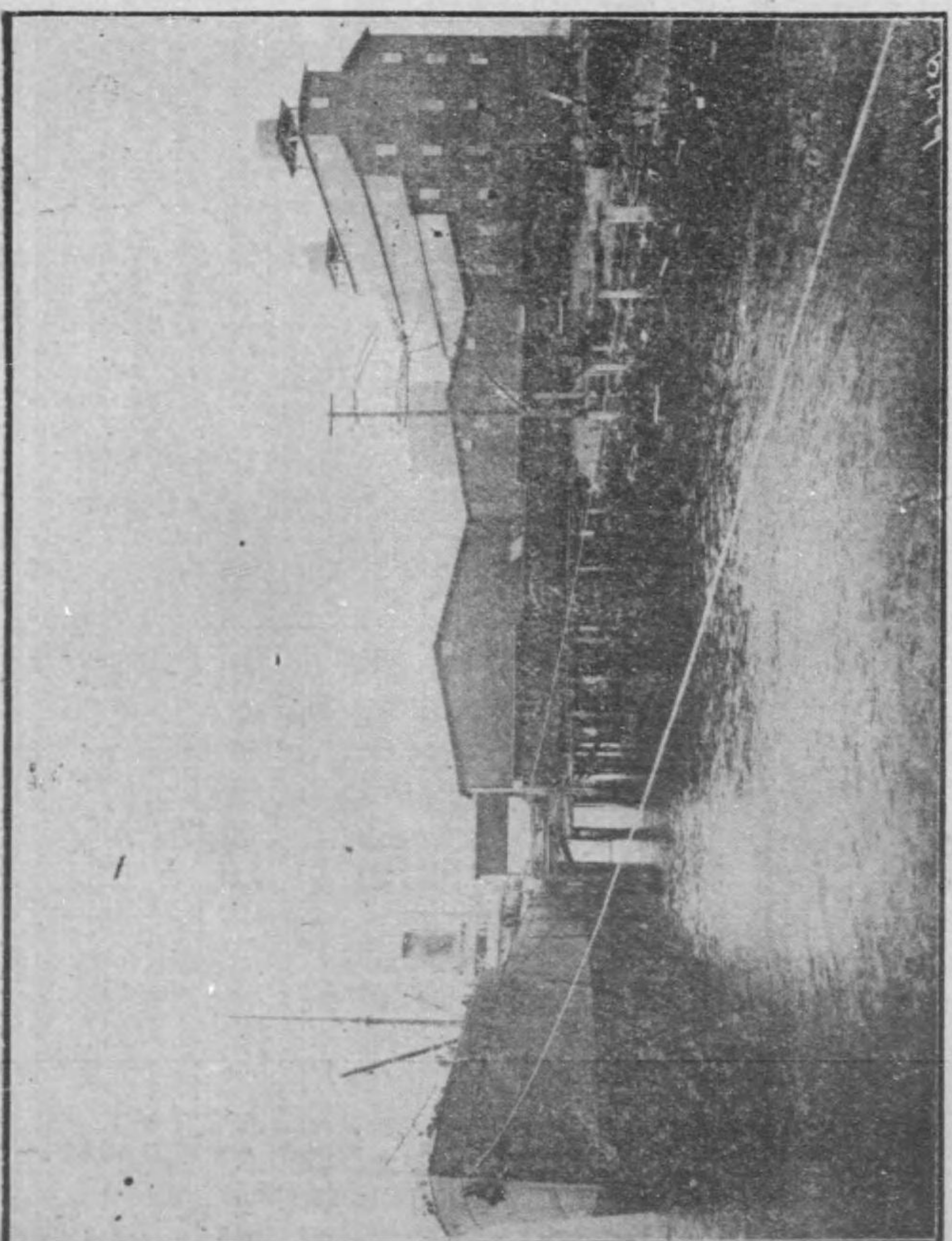
業とは何んなものであらうか、又人力を殆ど用ひ無いで、機械ばかりで小麦は何うして粉末になるであらうか杯と云ふ疑問は、往々聞く所であるから、爰に所謂機械製粉の技術に關する概要を、能く素人解りのする様に、述べる事にした、尤も専門家の眼から見たならば、餘りに簡短に失したとの批評もあらうが、之は力めて通俗を旨としたのである、尙ほ斷つて置くが、話の解り易からん事を主として、能と言文一致の文體を用ひた。



製粉工場

米國ハノン製粉會社

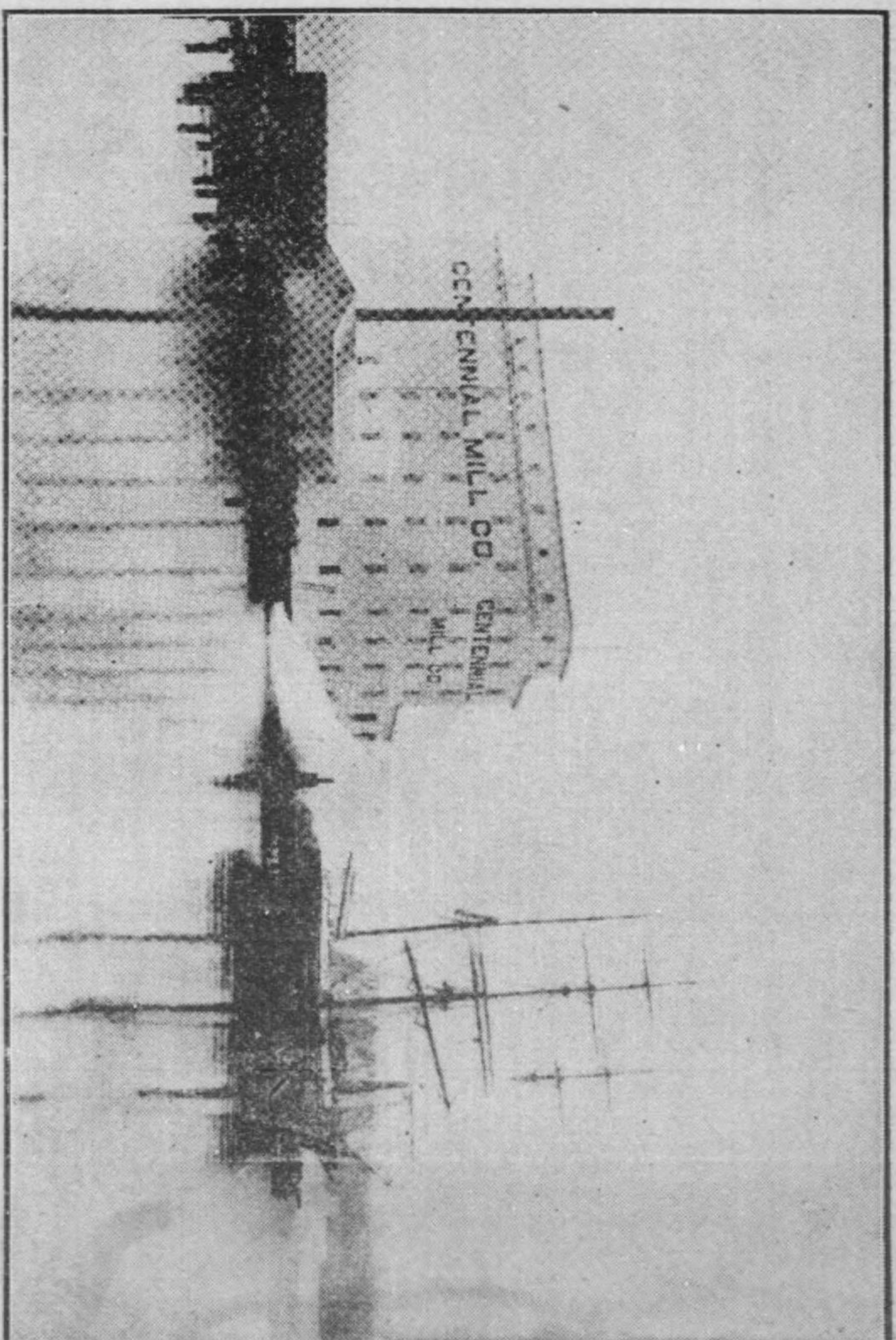
六



製粉工場

米國セツニテアル製粉會社

七





必要がある、新たに設立された各製粉所の構造は、何れも其模範を米國に於ける著名の大製粉所に取つたもので、則ち我が機械製粉業は、全く米國式製粉業と言つて可なりである、併しながら米國の製粉所も各一様では無く、夫々特色を有して居て、或は工場の構造を異にし、或は据附けてある機械が不同である、杯、多少の相違を免れ無い、然れば同じ米國式に依つた我が製粉工場も、亦總て同一型式と云ふ譯には行かぬが、大體に於ては大同小異である、故に此處に述べた話も、特色あるものを標準とするを避けて、最も普通のものに依つた、而も其材料は博く各製粉所に求めたから、機械運用上の成績の如きは、力

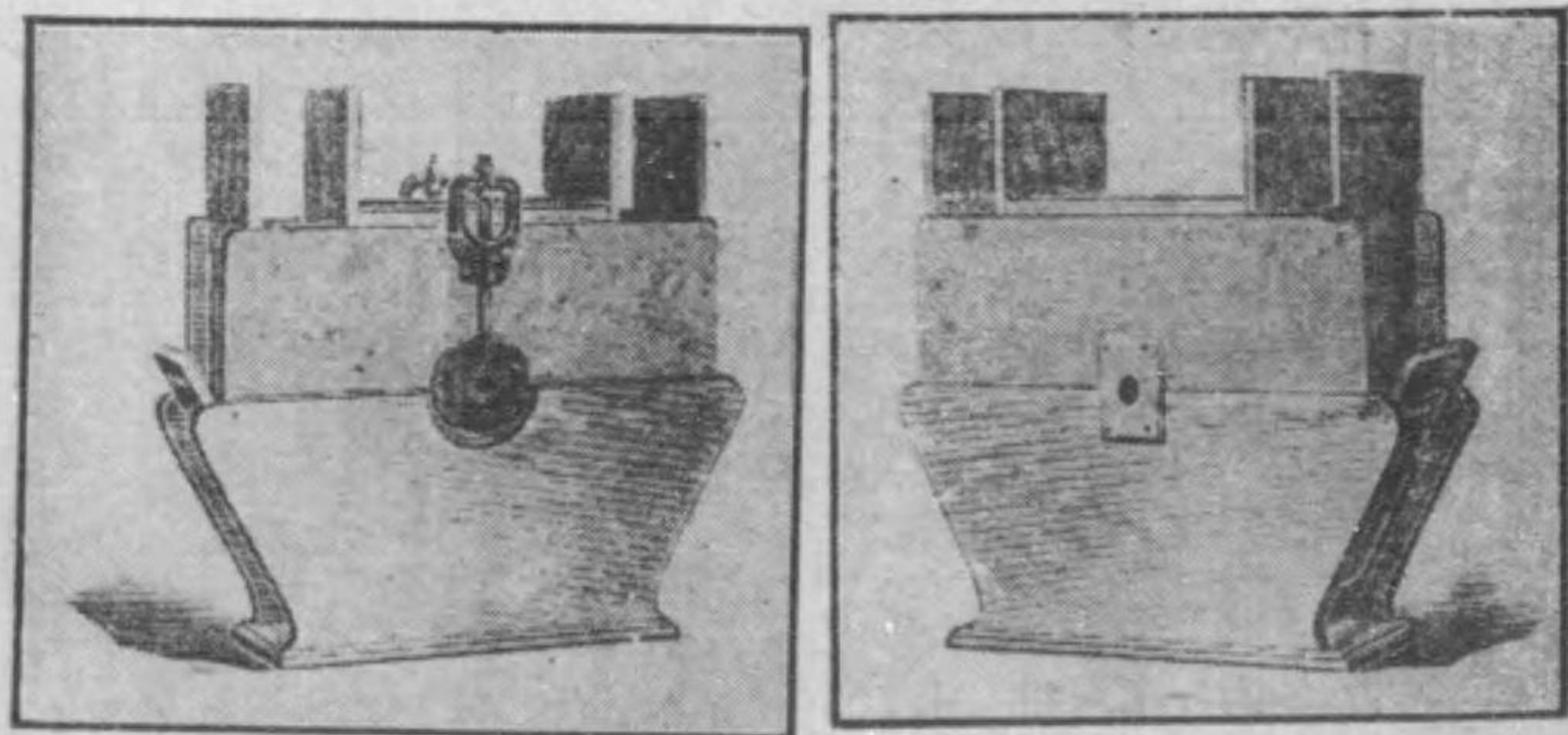
めて公平の觀察を下したのである。今工場に就て概説すると、製粉工場の構造は、極めて建ちの高い建築物であつて、四階建もあり、又五階建もあり、決して一様には言へぬが、我が製粉所の新式工場は、多くは五階建である、而して此建ちの高くて大なる建築物は、主として木造であつて、二階乃至五階には、原料小麥を精選する機械、麥粒を挽碎する機械、粉末と穀とを仕譯ける篩、出來上つた粉を袋に詰める仕掛け環が、所狭い程に据附けられてある、是等の機械が、原動力室から蒸氣力に依る動力を送られ、間斷無く絶えずに運轉する事は、他の精米若くは紡績工場と同様である、中には電動力を使用して居る所

が無いでもないが、一般には勿論蒸氣力を使用して居るのである。

所で製粉工場が、四階又は五階と云ふ様な高い建物を、何故に要するかと言ふと、夫れは製粉業の性質上餘儀無くされた譯であつて、若し建ちを高くせなければ、工場内に於ける小麥又は粉末の搬送に就て、到底敏活なる働きが出来ないからである、其理由は如何かと云ふと、原料小麥が精選せられ、挽碎せられ、篩はれて、各種の粉末及び穀に別たれ、後袋に詰めらるゝまでには、幾十回と無く機械を通過せねばならぬ、殊に其最も遅く粉末となるもの、如きは、初め精選機に懸けられてから、袋に詰めらるゝまでには、無慮三千呎

と云ふ驚くべき長距離を走らねばならぬのである、此搬送を容易ならしめんが爲に、エレベーター(昇降機)及びスポート(樋管)と稱するものを利用して、其爲めに自然段階の建築物が必要となるのである、而して昇

部一の機降昇





降機及び樋管の構造や動作は、何んな具合であるかと云ふと、昇降機は方形の二本の縦樋があつて、普通一階から五階に達し、上下は箱形になつて居て、此二本の樋が兩側に嵌め込まれてある、而して其箱の中には、上下とも調車が入れてあつて、之に長い木綿の調帯が懸かつて居る、又此調帯には、バケツトと唱ふる椀形の容器が、一尺乃至一尺五寸位の間隔を置いて取附けてあつて、調車の廻轉に伴ひ、底箱に落ち込んで来る材料を擲り上げ、上箱の所で之に取附けてある樋管の中に移してやる様に出來て居る、又樋管と稱するものは、主に方形の單純なる斜樋で、重力作用に依つて、高い所から低い所に品物を滑り落さ

しむるものである、而して其勾配は通過するもの、品質に依つて、各異なるものである、即ち小麦が粒状である間は、比較的緩勾配で差支へないが、段々粉状となるに従つて、急ならしむる必要がある、其勾配の度は、何う云ふ品質のものは何度、又は何寸勾配と云ふ様に、略ぼ一定して居るのである、所で搬送は何んな風にやるものかと云ふと、假りに二階に於ける機から四階にある機に、又は三階にある機から二階にある機に、小麦其他のものを移送せんとするには、第一の場合に於ては、二階の機の下から出た原料其他のものを、樋管にて一階の昇降機の底箱に滑り込ませると、其物は昇降機のバケツトにて五

階まで擲り上げられ、此處から上箱に取附けてある樋管の中に投げ出し、四階の機の中へ滑り込ませられるのである、又第二の場合に在つては、直に樋管にて滑り込ましむれば良いのである、尚ほ關係機械の位置に依つて、樋管を利用する事の出來ぬ場合には、コンベヤーと云ふ水平に移送する機械を、特に使用するのである。

斯んな具合に、小麦は高い建物の内を、昇降機と樋管とに依つて、上下に自由に昇降しつゝ、機械の精妙なる作用で、何時の間にか製粉に變つて仕舞ふ、併しながら機械の据へ方に到つては、各製粉所とも同一では無く、例へば原料精選機の如きも、三階にある所もあ

原料麥の精選

れば、四階又は五階にある所もある、次に話す小麦の精選を始めとして、段々話頭が進むと共に、何の機械は何階に据附けてあるかと云ふ事は省略するが、要するに小麦や粉末が、甲機械から乙機械に移つて行くには、昇降機若しくは樋管の働きに依る事と、豫め了知して欲しい、人若し製粉工場に行かば、無數の柱の様なものか、或は眞直に、或は斜めに立つて居るのを、必ず目撃するであらうが、夫れは則ち昇降機並に樋管であつて、實に工場内唯一の交通運輸機關である。

### (八) 原料麥の精選

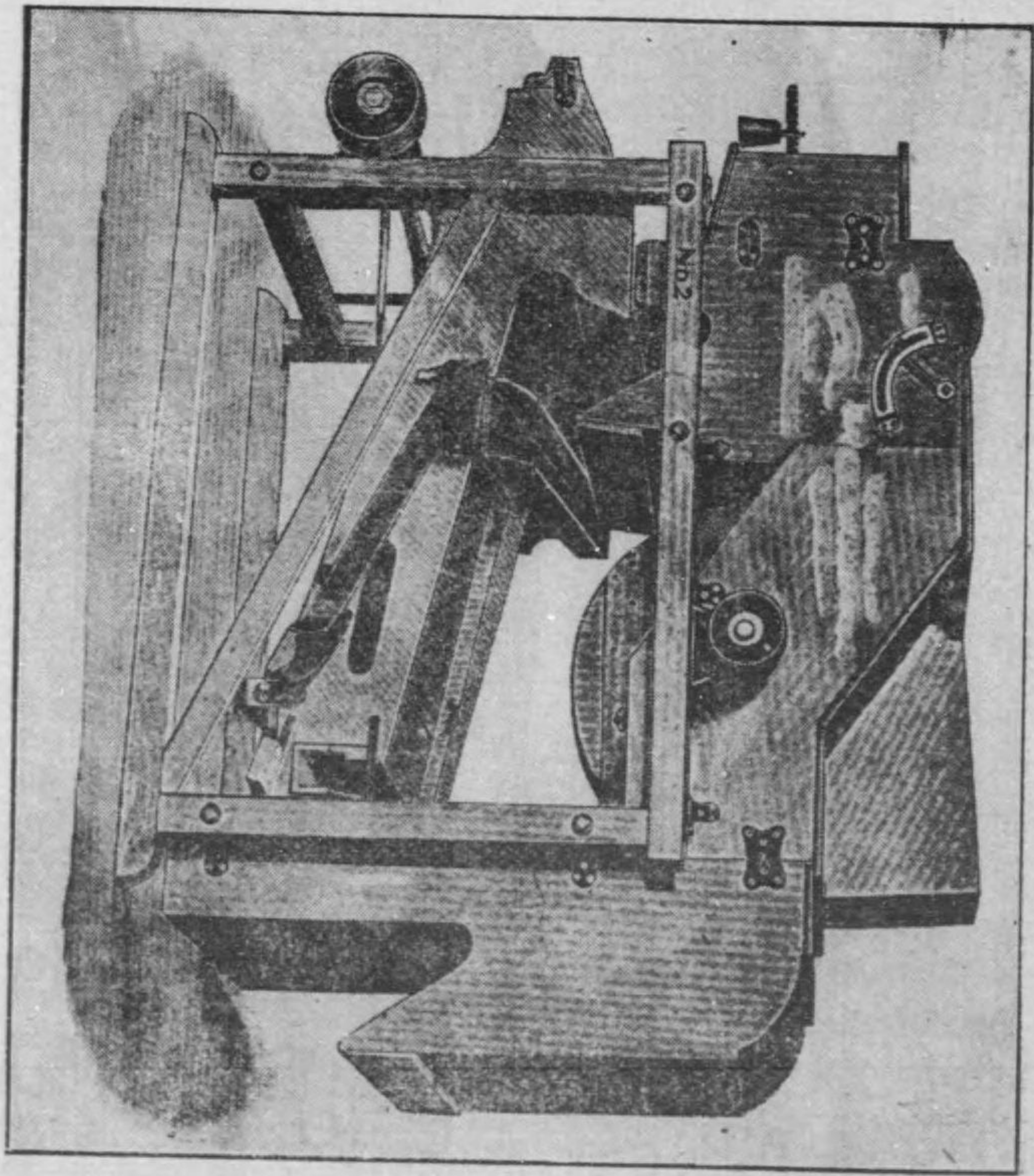
製粉の原料にする小麦には、何處で穫れたも



原料麥の精選

のでも、色々な物が混つて居る、一例を挙げると、支那産の小麥には大豆の類が澤山に混つて居り、又印度麥には裸麥が餘計に這入つて居るの類で、此外、藎、石、砂坏が混入して居るから、小麥を粉末にする機械に懸ける前に、是等の混入物及び蟲喰麥、碎け麥、粃等の不純物を除去する爲めに、是非とも夫れを精選せなければならぬ、然らば何んな方法で精選するかと云ふと、先づ原料貯蔵倉庫から、小麥がトロックに積まれて、工場内の一部に持ち運ばれると、其處で包装袋を解いて床の上に出し、床の一隅には、其小麥を精選機の方に送り出す爲めに、豫て穴が設けられてあつて、其穴に入れられるのである、斯く穴

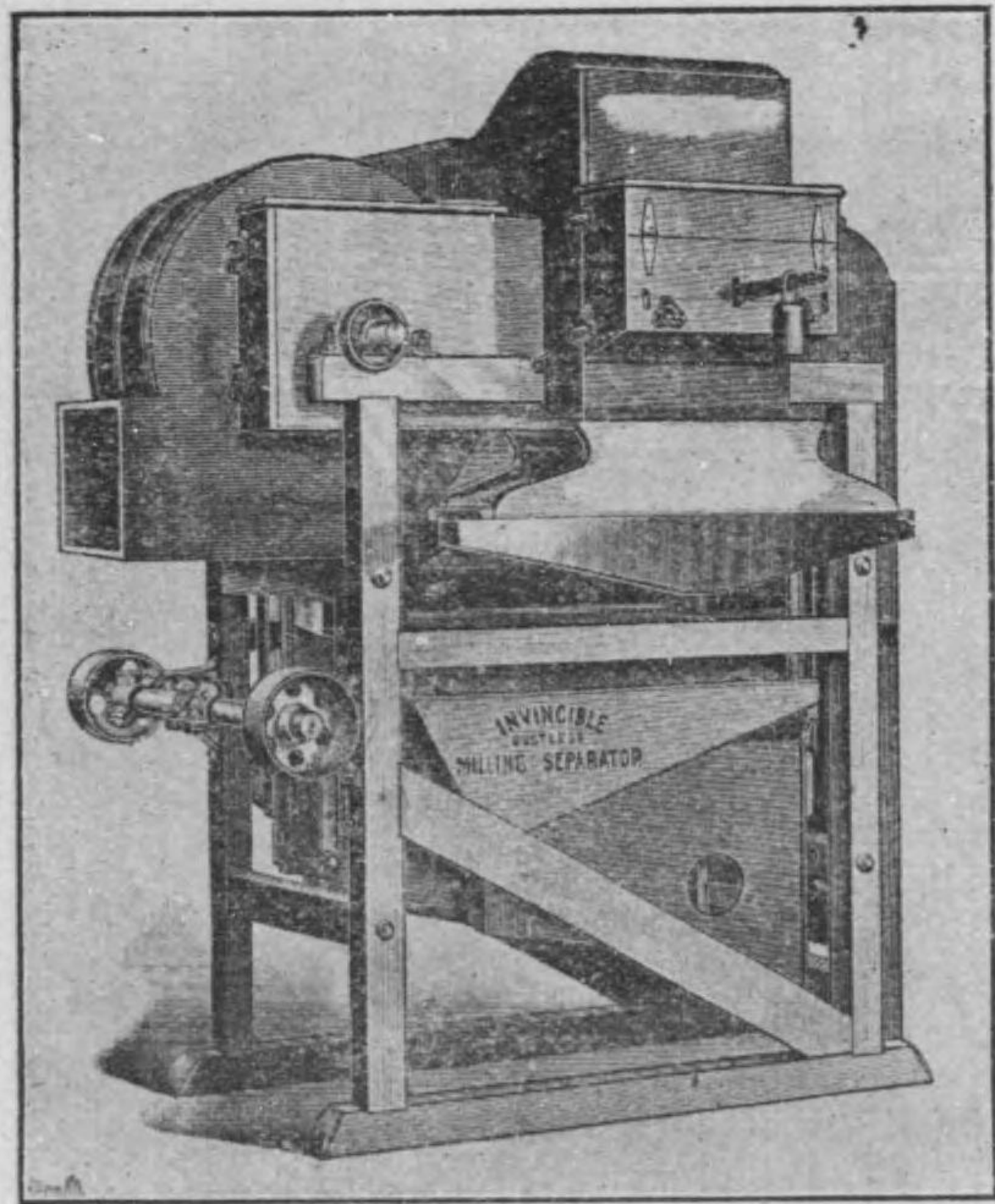
に入つた小麥は、第一番にレシーピング・セバローターと云ふ精選機に行く、此機械は普通三段位に斜板に穴、打ち抜いた金網が張つてあつて、此上を原料小麥が篩ひ落されて行く間に、石、土礫、藎、砂等を除き去ると同時に、風車の作用に依つて、粉殻、細塵等の輕量なるものは、ダスト・コレクターなる機械に集收せられる様になつて居る、此機械にて粗ぼ仕上をされた小麥は、第二の精選機なるミリング・セバローターと云ふ機械に行く、此機械の構造は、レシーピング・セバローターと殆ど同様であるが、違つて居る點は、只金網の穴が、幾分づゝ細かいのと金網の数が多一事である、此處にて篩及び風車等の働きて、



原料麥の精選

レシーピング・セバローター





ミーリングセパレーター

一四

穀殻、稈、蟲喰麥、小砂其他の細塵を精選分離するのである。

次に小麥は、マグネチックセパレーター（磁力分離機）なる機械に送られる、此處にて小麥の中に混つて居る鐵、釘、鐵鋌其他總ての鐵類は分離せられ、他の機械を毀損せしめざる様且つ製品の中に鐵分の混入を防止するのである、次に小麥は、ローリング・スクリー（回転篩）と云ふ精選機に送られる、之は普通六角形の長い筒に金網の張つてあるもので其内部に小麥を送り、網及び風車の作用に依

つて細塵を除去するものである、更に小麥は、コックル・マシンなる機械に送られる、此機械はグロウディング・ロールと稱する鐵板に、穴を打ち抜いた圓筒形の篩と、コックル・シリンドラと唱へて居る疣々の打出しのある圓筒を有して居て、小麥の中に混入せる砂、碎け麥、コックル（麥撫子）等を精選するのである。

是迄で、小麥の中に混つて居た不純物は、殆ど除去せられたのであるが、未だ充分精選せられたとは言へぬ計りで無く、尙ほ蟲喰麥、穀殻等の殘留せるものもあり、殊に外皮に固著せる泥土等は、全く分離清掃せられて居らぬのである、故に是等のものを精選する爲めに、尙ほ原料麥を、スカラー（研磨機）に移

一五

送する、此機械の型は色々あるが、要するに内外の金網中に落ち込んで来る小麥を、ピスター又はブレード杯と稱して居る攪拌器で攪拌研磨し、風車の動きと相俟つて、蟲喰麥等を除き、又泥土は泥と共に磨き取るのである、次に小麥は、ブラッシュ・マシーン（刷毛精磨機）なる機械に送られる、此機械も型は色々あつて、縦型のもあれば、横型のもあるが、其働きは孰れも、内部の枠と外部の金網との間に落ち込んで来る小麥を、其間に取附けてある刷毛にて磨き上げ、風車の助けを得て、殘餘の不純物を全く除去するのである。

原料麥の精選方法は、大略斯んな具合であつて、是れからが愈々小麥がロールに懸かつて、







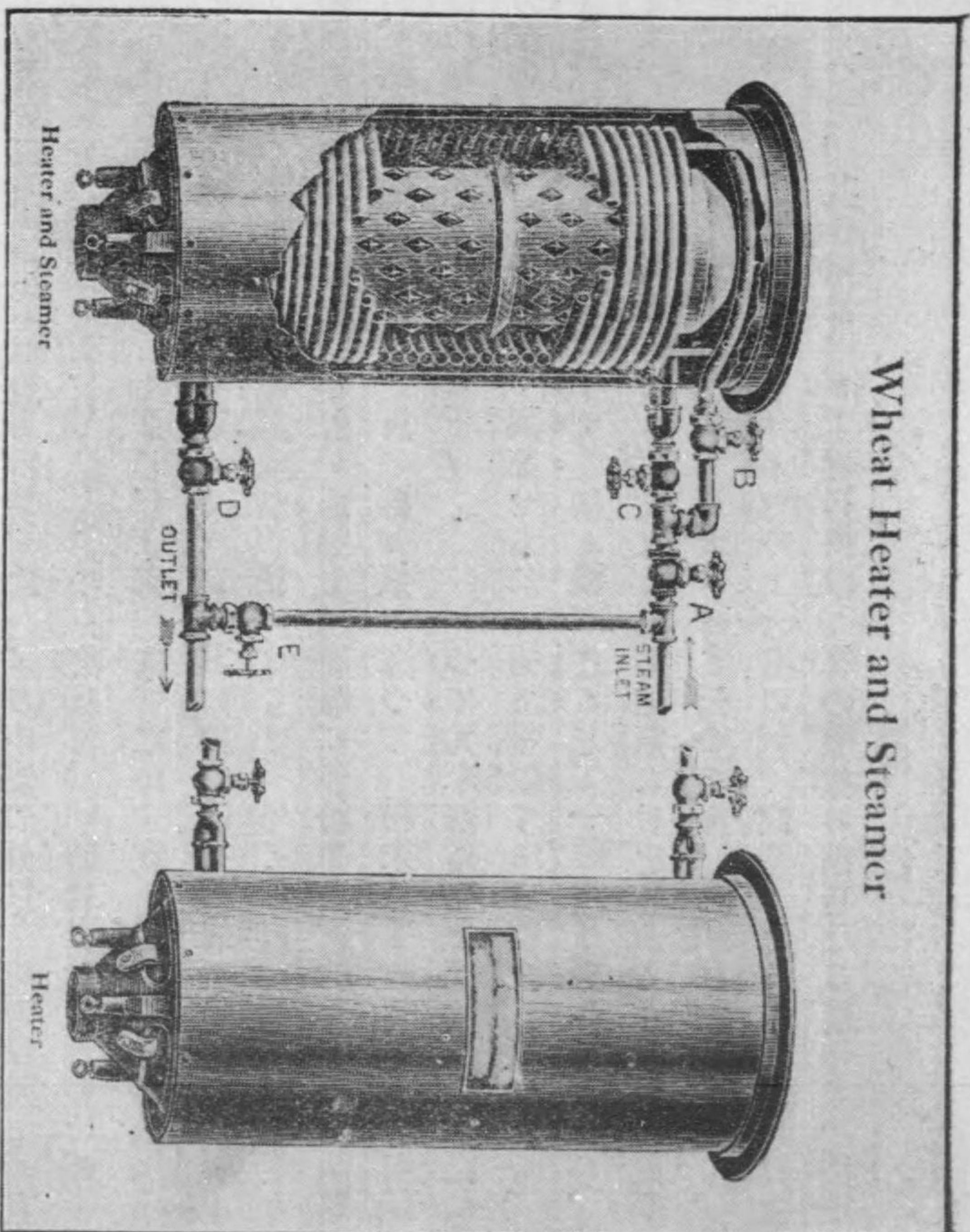
製粉の順序

挽碎せらるゝ事になるのである、但し小麦に依つては、其汚れが甚しく、以上の精選機のみでは、充分清浄ならしむる事の出来ぬものもある、其場合には、ウォッシュヤー（洗滌機）を使用し、且つ次に述ぶる乾燥機に懸けて、使用するのである。

(三) 製粉の順序

前述の如くにして、完全に精選せられた小麦は、直ぐ挽碎せらるべき筈であるが、尙ほ其前に當つて、或る作業を必要とする場合がある、夫れは餘事でも無いが、小麦の乾燥の都合に従つて、其湿度を加減するのである、若し冬季に能く乾き上つて居る小麦を、其儘口

●ルに懸くれば、濕り氣（水分）の足らぬ爲めに、碎け過ぎる憂ひがある、小麦が適度を超へて碎けると、穀の細末が、粉末の品質の良い部分に混交するを免れぬから、製粉の品質を害し、之に反して、夏季に於て乾燥不充分なるものを、其儘使用する時は、粉末の良い部分か、穀に附着して粉出歩合の減少を來たし、作業經濟上尠少なからざる影響を蒙る譯である、故に普通濕り氣の多い夏季には、之を乾燥し、乾き過ぎて居る冬季には、之に適度の濕り氣を與ふる事になつて居る、即ち之を乾燥するには、ドライヤー（乾燥機）なるものを使用し、濕り氣を與ふるには、スチーマー（蒸蒸機）なるものを利用するのである、乾



Wheat Heater and Steamer

製粉の順序

X  
4  
1  
4  
1

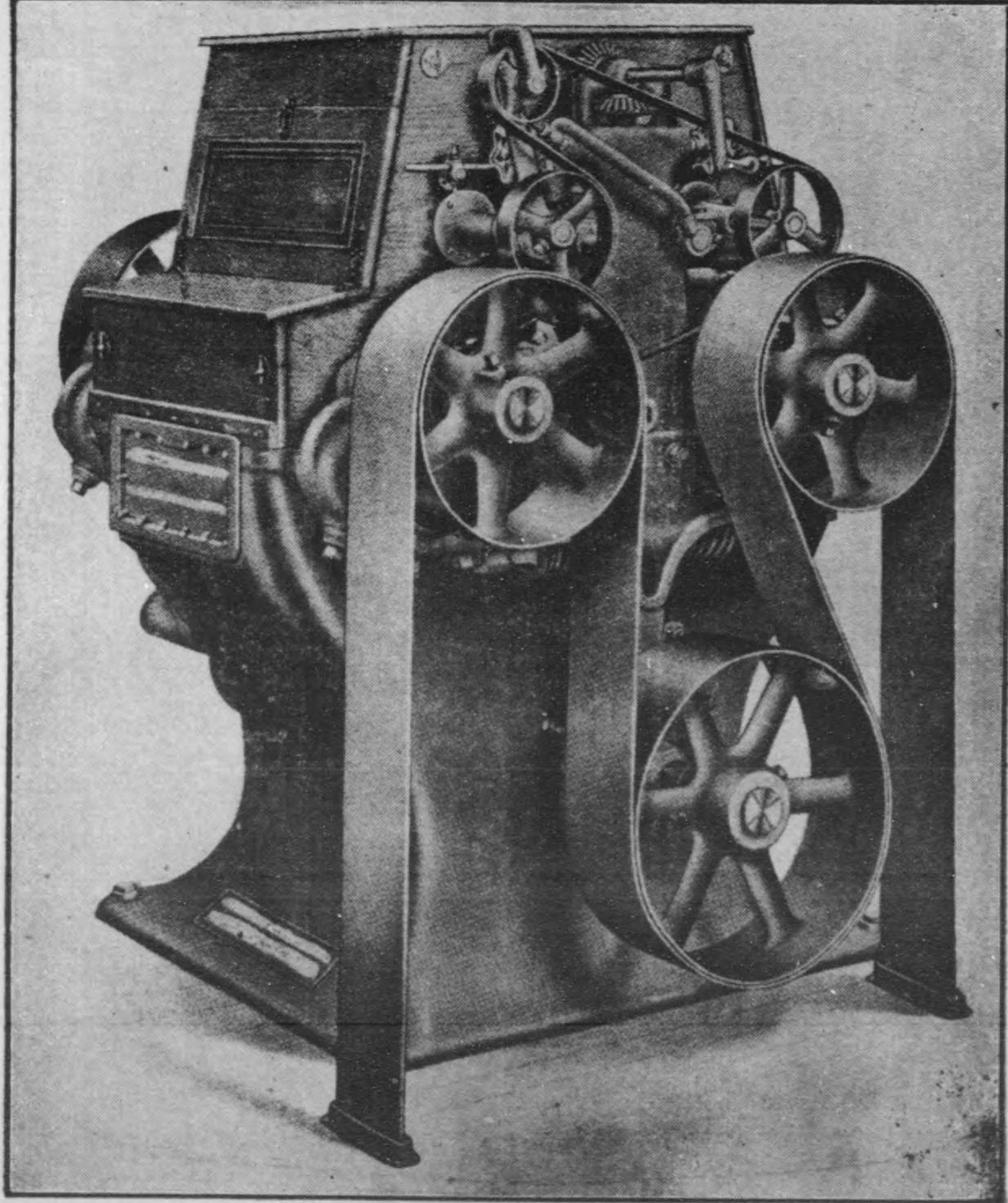


乾燥機は板金の長い二重の煙突状のもので、此  
 板金には細長い穴が、無数に穿たれてある、小  
 麥は此内外の板の間を落ちて行く間に、上部  
 から熱氣を送り、下部から冷氣を送つて、乾  
 燥せらるゝ様になつて居る、又蒸氣機は、獨  
 樂形又は圓筒形等の器の中を、小麥が通過し  
 て行く間に、蒸氣を配送して、適度の濕り氣  
 を與ふる様になつて居るのである。  
 斯の如き方法の下に、湿度の全く調節せられ  
 た小麥は、普通にファイト・ガバーナーなる機  
 械を通過して、初めて挽碎せらるゝ事になる  
 のである、所で此ファイト・ガバーナーと云ふ  
 機械は、次に述ぶる一番ブレイキ・ロールの上  
 に取附けてあつて、其作用は、ロールに供給

する小麥の分量を加減調整し、且つ其量を目  
 盛にて、明確に表示するのである。  
 偕て之から愈々製粉作業と云ふ事になるが、  
 其道筋は随分複雑であつて、精しく説明した  
 ならば、殆ど際限は無い、併しながら極めて  
 簡単に製粉作業を約言すれば「單に挽いて、  
 篩つて、粉末にする」と云ふに過ぎない、隨  
 つて元來通俗的を主とする此話に在つては、  
 強て精説するの必要は無いから、此處には、  
 主として一般の了解し易い様に、唯一ト通り  
 の道筋だけを述ぶるに止めて置く、又其機械  
 と云つても、種類は割合に少く、單に同種  
 のものが、幾臺もあると云ふだけであるが、是  
 等の機械の精巧なる働作と、技術の熟練と相



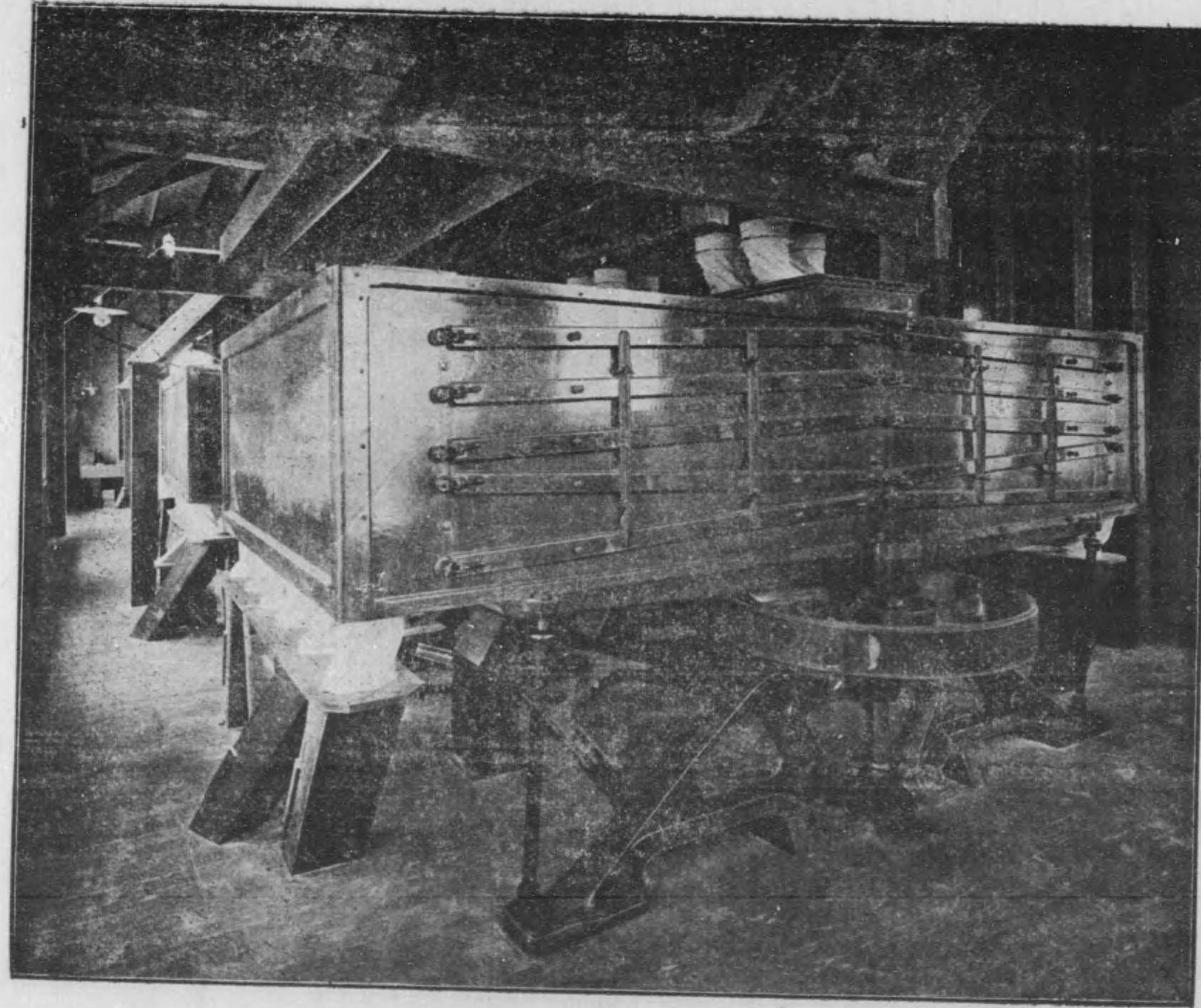
を行く間に、蒸氣を配送して、適度の濕り氣  
 を與ふる様になつて居るのである。  
 斯の如き方法の下に、濕度の全く調節せられ  
 た小麦は、普通にフイット・ガバーナーなる機  
 械を通過して、初めて挽碎せらるゝ事になる  
 のである、所で此フイット・ガバーナーと云ふ  
 機械は、次に述ぶる一番プレーキ・ロールの上  
 に取附けてあつて、其作用は、ロールに供給



ル 一 口

篩つて、粉末にする」と云ふに過ぎない、隨  
 つて元來通俗的を主とする此話に在つては、  
 強て精説するの必要は無いから、此處には、  
 主として一般の了解し易い様に、唯一ト通り  
 の道筋だけを述ぶるに止めて置く、又其機械  
 と云つても、種類は割合に少く、單に同種  
 のものが、幾臺もあると云ふだけであるが、是  
 等の機械の精巧なる働作と、技術の熟練と相





ジヤレター



俟つて、其目的を達するのである、今製粉用の機械を擧ぐれば、左の數種となる。

▲ ロール

▲ ジャーレマー (篩、之にはボルター、シフター等の別名もある)

▲ リール (丸篩)

▲ ブラシ・ダスター (穀篩)

▲ ショート・ダスター (小穀篩)

▲ ビューリフアイヤー (精選機)

先づ是等機械の構造を略述して、順次作業の話に移る事とする。

▲ ロール は鋼鐵又は表面を堅くしたる種類の鑄鐵にて製作せられたる圓柱形のもので、其大さは色々あるが、我國で使つて居るもの

製粉の順序

は、大低直径が九吋、長さ二呎乃至三呎のもので、之を二本宛水平に取附け、一ツの枠に二對宛兩側に置いてある二重式ローラーミルである、而して其表面の状態に依つて、二種類に別れて居る、其一是表面に溝が刻んである、即ち齒が立てゝあつて、他の一は平滑なる面を有して居る、前者をコーンゲージ・ミル・ロール (溝付ロール) と云ひ、後者をスミス・ロール (滑面ロール) と稱する、又其働きの具合及び挽碎せらるゝものゝ品質等に從つて、ブレイキ・ロール、ミッドリング・ロール、サイジング・ロール其他の名稱がある、要するにブレイキ・ロールと云ふのは、溝付ロールの別名であつて、一番ブレイキ・ロール、二

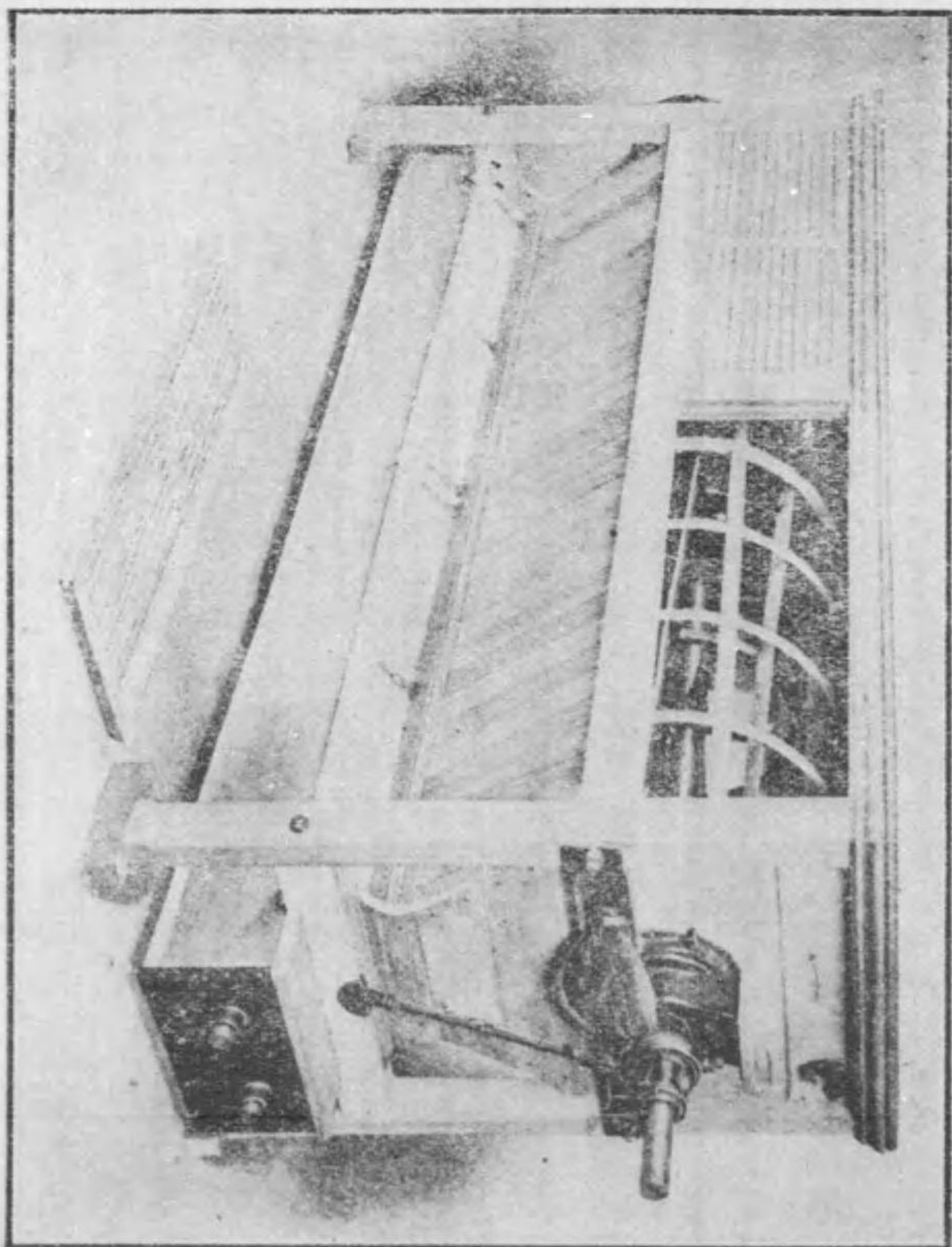


製粉の順序

番ブレーキ・ロール杯と稱して居る、而して普通一日六百石乃至一千石位を挽碎する工場では、一番から五番まで位あるもので、即ち溝の数が五つ通りある譯で、其臺数は凡そ五臺乃至七臺である、夫れからスムーズ・ロールの數は十臺乃至十五臺位のものである。

▲シャローター(篩) は其製造會社に依つて、各其名稱を異にし、又構造も幾分宛相違して居る、現今我國で使用して居るものは主にシャローター(米國ウルフ會社製)ポルター(米國アリス・チャーマン會社製)及びシフター(米國ノーダーク・マーン會社製)等である、シャローターとシフターとは、共に其枠が方形であるが、ポルターは八角形

である、而して何れも其内部に、金網、紗、絹等を張つた篩が入れてあつて、此枠を棒にて吊り、下から支へ、揺り動して、之に入込んで來る粗製品を、篩ひ分けるのである(以下單に篩と稱する場合は、此篩を指した事である)所で、現に我が製粉界を通じて、何處の製粉所にも、最も多數に使用せられて居るのは、ウルフ會社のシャローターである、而して此シャローターは、種々の特長を有する篩として、從來斯業者間に好評を博し來つた、併しながら現今最新の技術眼から觀察を下せば、此篩は寧ろ失當なり、と言ふを憚ら無い、即ちシャローターは餘りに大型にして取扱に不便なると、廻轉軸が單一で篩



製粉の順序

シャローター



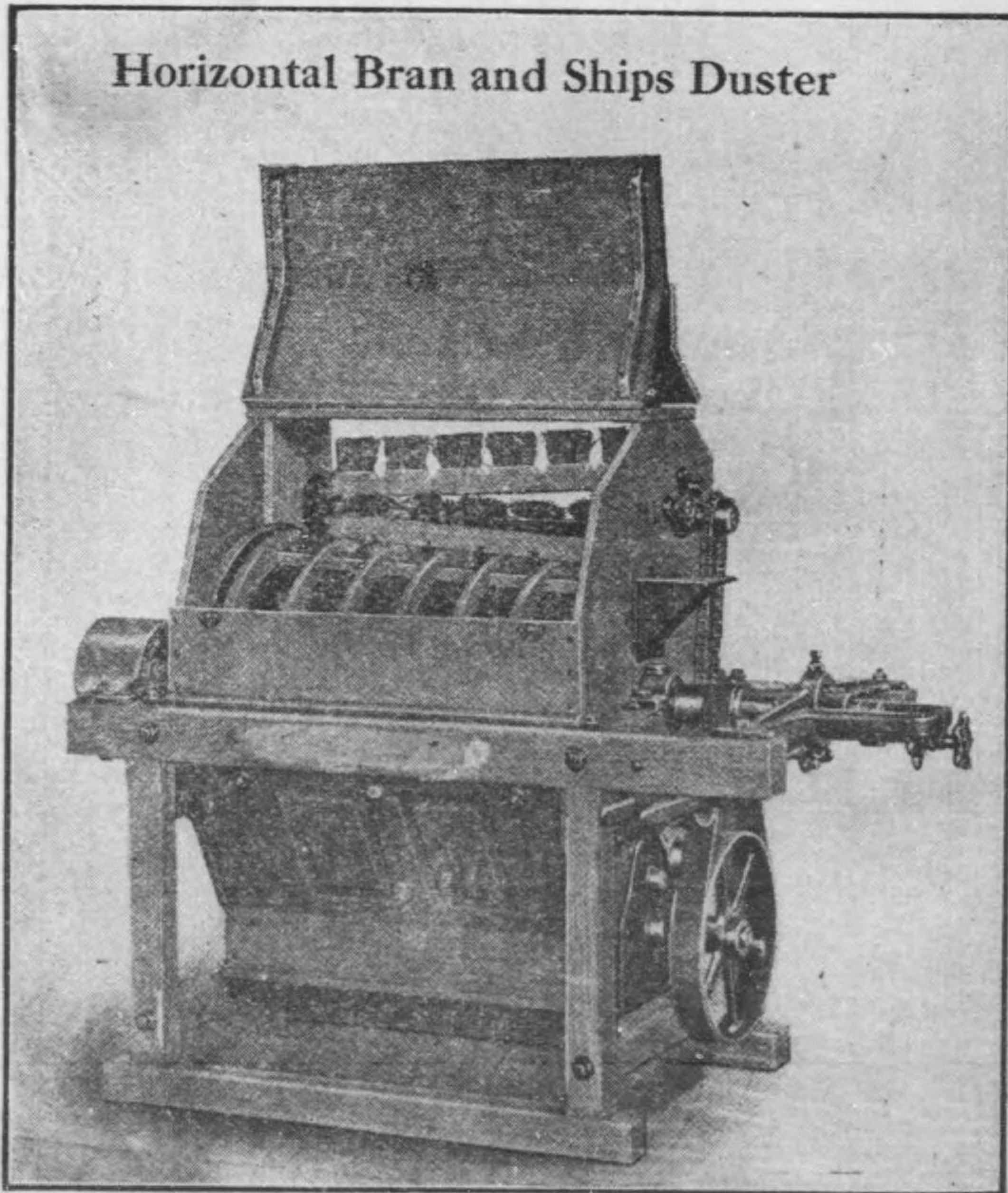
はれる度数の不平均なるとの爲めに、理想通りの効果を擧げ難いのである、然らば理想的の篩は何んであるかと言へば、米國バーナー・ド・リース會社製のブラン・シスターが、最も恰適のものであるが、我國では未だ何處にも使用せられて居らぬ、先づ我國にて使用せる實用的の篩としては、アリス・チャーマン會社のポルターを推さねばならぬ。

んで来る材料を、圓形枠の篩面に掃き付ける様にして、充分有効に篩ひ分ける働きをするものである。

▲ブラン・ダスター（穀篩）は方形又は圓形の外箱があつて、其中に丸い骨組の枠に、金網が張つてあるものが入れてある、尙ほ其金網の内側に接して、數本の刷毛が他の枠に取付けられ、内外枠の廻轉關係及び刷毛の作用に依つて、落ち込んで来るものと、穀と粉末とに篩ひ分けるのである。

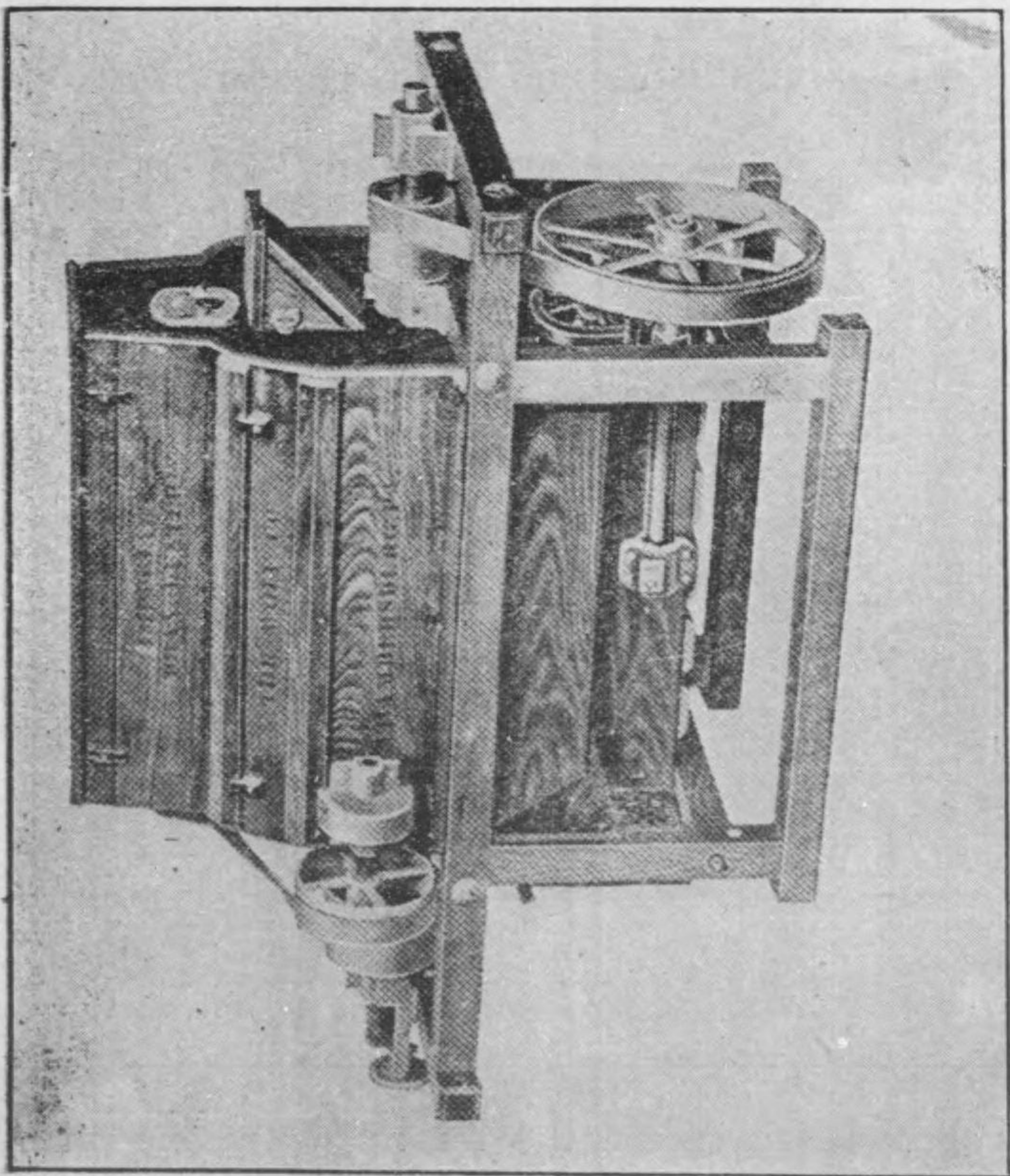
▲シヨート・ダスター（小穀篩）は構造及び作用とも、ブラン・ダスターと同様で、唯張つてある金網の目が、幾分か細くなつて居るのみである、之は小穀と粉末の部分とを、分離

Horizontal Bran and Ships Duster



ブラン・ダスター





する働きを爲すのである。

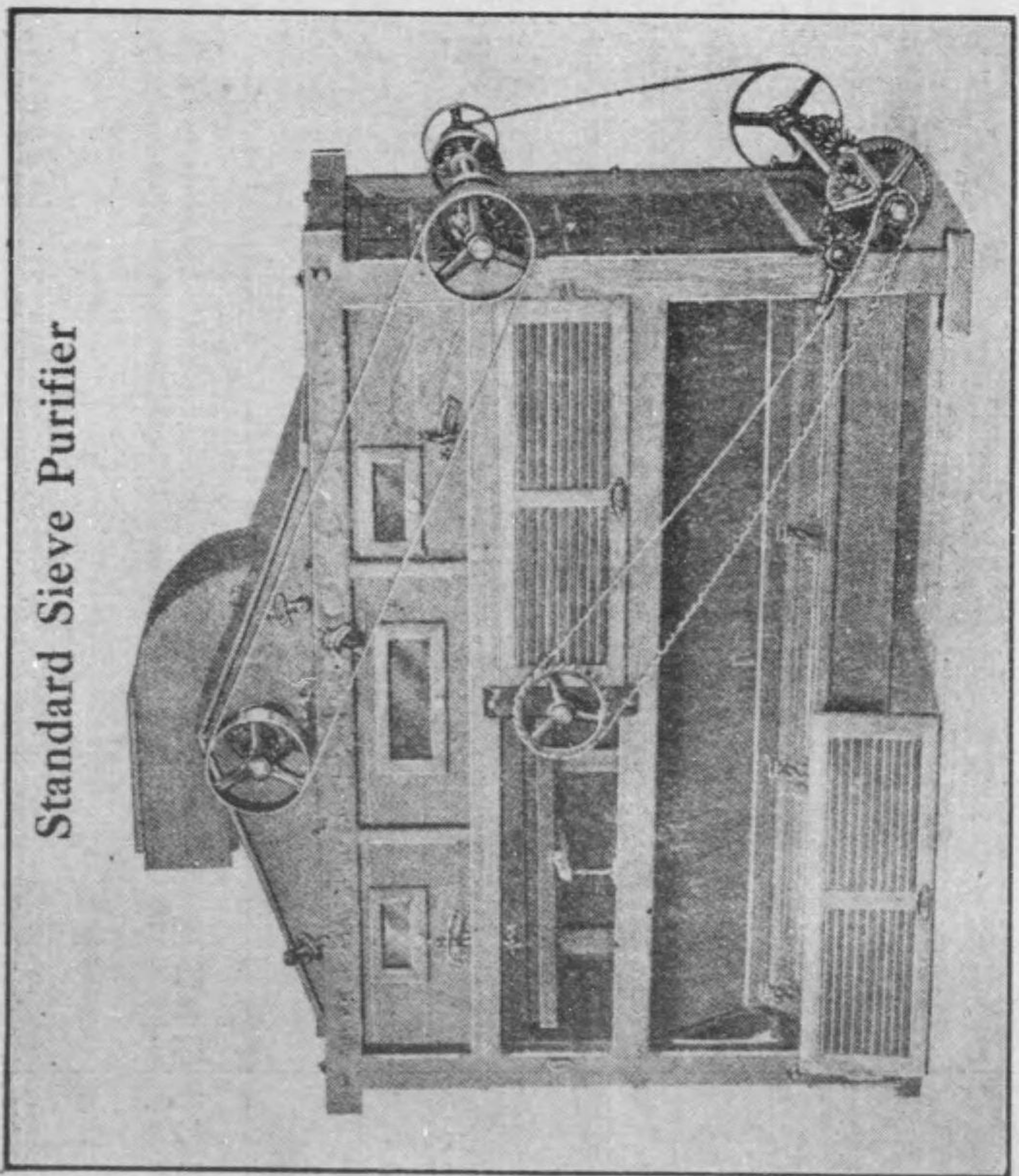
▲ビュリフアイヤー（精選機）は一ツの  
 枠の中に、各種の紗を張つた平たい篩がまつ  
 て、上部に風車が装置してあるものである、  
 此機械の作用は、ジャーレーター又はリール  
 等にて、一度篩ひ分けられたる粗粉中にある  
 軽量なる物質（毛バの如きもの）を除去し、  
 残餘のものを数段の品質に更に篩ひ分けて、  
 所定のロールに送るのである、即ち此機械の  
 効用は、ロールに送らるべき粗粉を精選して  
 粒を揃へ、ロールの働きをして、充分有効な  
 らしめんが爲めである。

以上述べた各種の篩には、何れも其篩面を常  
 に清掃せんが爲めに、色々の巧妙なる装置が

施されてある、尚ほ各種の篩及びビュリフ  
 アイヤーの臺数は、其機械の容量如何に依る  
 もので、素より一定せぬが、前に述べた挽碎  
 石敷に對しては、ジャーレーター及びリール  
 は六臺乃至八臺、ブラン・ダスターは一臺乃至  
 二臺、シヨート・ダスターは一臺、ビュリフ  
 アイヤーは六臺乃至八臺位のものである、之  
 で機械の事は概要話し畢つたから、進んで製  
 粉作業の道筋を述べやう。

却説話は廻るが、豫ねて精選せられたる小  
 麦は、フィード・ガバーナーを通過して、此處  
 に初めて、第一番のブレイキ・ロールに懸かつ  
 て挽碎せらるゝ事になる、挽碎せられたもり  
 は直に篩に送られ、此處で篩の目の粗密に従





Standard Sieve Purifier

つて、四種乃至五種位に篩ひ分けられる、其の内一番粗大なる粒は、第二番のブレイキ・ロールに送られ、細末はビュリフアイヤーで選粒せられて、各所定のスムース・ロールに送られ、又は直接にリールに送られて篩はるゝのである、而して所定の絹の目を通過した粉末は、直に製品として製品槽に送らるゝ仕組になつて居る、次に第二番ブレイキ・ロールに送られたものは、此處にて更に挽碎せられ、第一番ブレイキ・ロールの場合と同様に、篩ひ分けられて、其内の粗粒は第三番のブレイキ・ロールに送られ、残りの分はビュリフアイヤーを経て、スムース・ロールに行くのもあれば、リールに送らるゝものもあり、又製品と

製粉の順序

なつて製品槽に行くのもある、斯の如き作用を連続しつゝ所謂「五段挽」のものであれば、第五番までのブレイキ・ロールに懸かつて、其篩はれたものは、最早皮ばかりの様なもので、此上ロールに送る必要は無いから、之はブライン・ダスターに送られ、此處にて穀と粉末の部分とに分離せられて、穀は製品として穀槽に送られ、細粉はリールに行つて更に篩ひ分けられ、各等級の製品となるのである、尚ほ此間にスムース・ロールに懸かつたものは、何うなるかと云ふと、等しく篩、ビュリフアイヤー、リール及びシユート・ダスターの作用に依つて、ブレイキ・ロールの場合と同様の徑路にて、遞次に各種の製品に篩ひ分けられ、発

二九



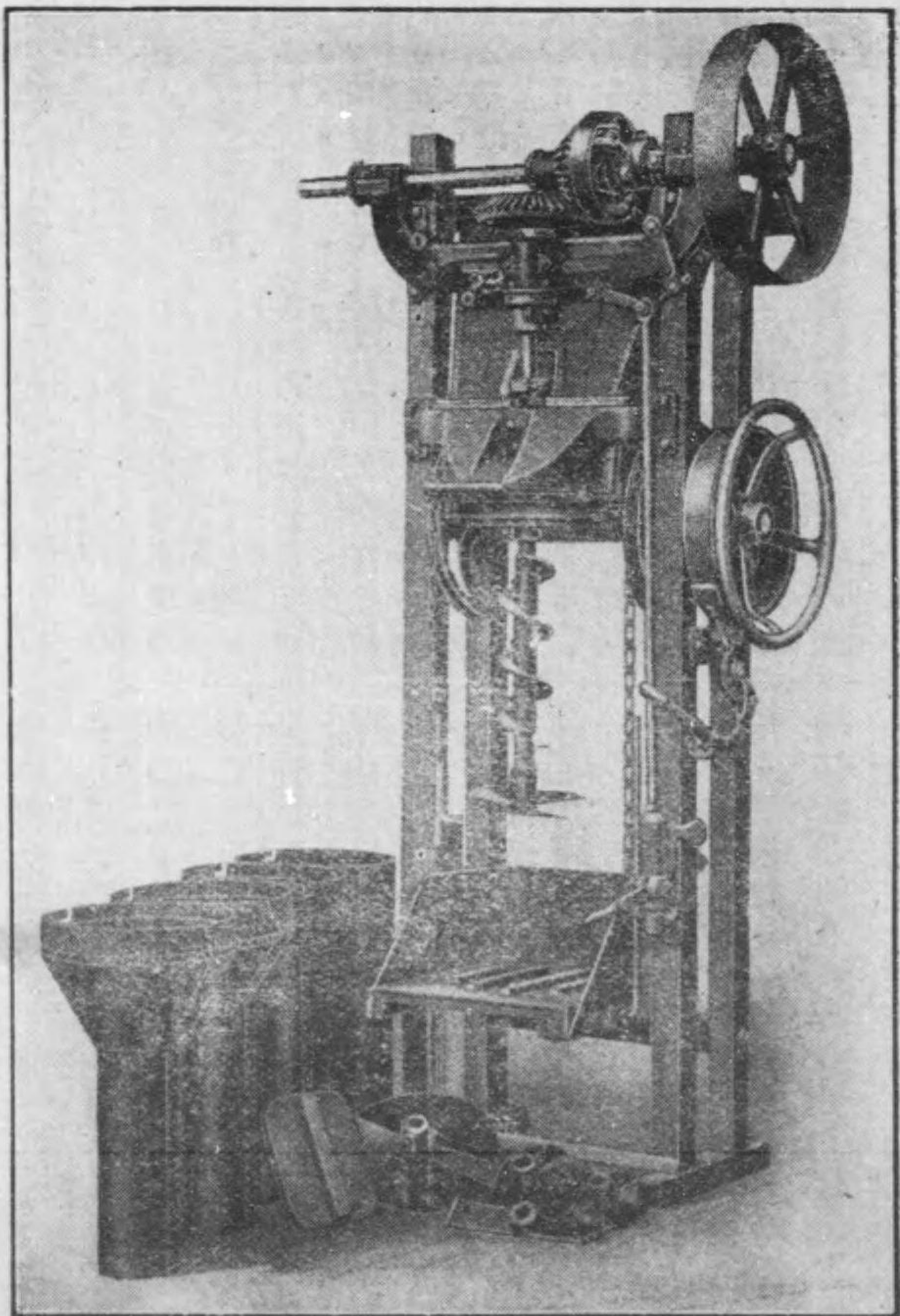
製粉の仕上

に全く製粉作業を終るのである。

(ホ) 製粉の仕上

以上の順序を以て製出せられたる製粉は、普通は直に製品を入れる、タンク即ち製品槽に送られるのであるが、彼の電気漂白機と稱する最新な機械の設備ある製粉所に在つては、製粉が製品槽に送られる以前に、電氣力を應用して製品を漂白するのである、此機械は電氣に依つて或る一種の瓦斯を起し、其瓦斯を空洞な所に製粉を入れて置き、夫れに瓦斯を通じ、漂白する仕組になつて居る、其處で漂白の済んだ製粉は、順次に製品槽に送られ、續いてパツカーの方に送り出されて、遂に袋に詰

められるのであり、パツカーと云ふものは、丁度漏斗の様な形状で、又漏斗と殆ど同様の作用をなし、尚ほ夫れよりも數等巧妙に造られてある、製品槽から出て来る製粉は、漸次に漏斗状のパツカーに入り、夫れが下方の口から落つる所に袋の口を宛て、製粉が袋一杯に詰まると、クラツチ(爪)の裝置に依つて自動的に、パツカーから製粉の落ちて來るが一時停り、鑪て袋を取替へて漏斗の口を緊め、パツカーを動かすと、製粉は再び落ち始めて、袋を充たす仕懸になつて居る、此パツカーは單に製粉ばかりで無く、穀を袋に詰めるにも使用せらるゝものである。



パツカー



(へ) 製粉に要する時間

小麦から製粉が製出せられ、穀が残るまでの作業、即ち原料麦が最初レンジーピング・セパレーターに送られ、続いて各種の精選を了り、次に第一番ブレイキ・ロールに懸かつて挽碎せられ、篩を通過して製粉となり、バックカーに出るまでには、何の位の時間を要するかと云ふに、凡そ十分乃至十五分である、此時間の長短遅速は、取りも直さず其製粉工場の設備の良否、機械の精粗、技術の優劣等に基づくので、之を一回の製出時間から一日の作業時間に推及ぼし、更に半年、一年の作業日数に算勘して見たならば、事業成績上非

常の得失を来す譯であるから、實に輕々に附し難い重要な事項である、故に一回の製出時間を、例令十秒時間たりとも速かにする様に注意する事が、最も肝要である、斯様の次第であるから、比較的設備の整つて居ない工場、又は機械の運用に慣熟せぬ新設工場の場合、何うしても餘計に時間を要し、一回の製粉に十六分乃至十八分を費すを免れぬとの事である。

(ト) 製粉粘力の検定

凡そ製粉には一番粉、二番粉、三番粉又は糶物杯と、種々區別があるが、其優劣に就ては一概に斷定を下す事は出来無い、例へば色相

に於て優つて居るものもあれば、粘力の強いものもある、元來製粉の用途は、一定して居ないから、少し位粘力が弱くとも、色の純白を要する向もあり、又色は少々濁へて居ても、粘力の強いのを必要とする所もある、併しながら大體に於ては、色が純白で且粘力の強いものは、先づ以て優等品と稱せらるゝのである、所で小麦が粉末となる部分の全體を通じて、一番粘力量に富んで居るのは、其表皮に接着して居る部分である、而して製粉粘力の強弱如何を検定する方法として、現に一般に行はれて居る所に依れば、大要左の如くである。

製粉粘力の検定

を適當なる大きさの鉢の中に入れ、宜き程に水を注入して、乳棒若くは箸の類で良く練り、練れた所で一時間乃至二時間位、其儘に放置した後、水を以て充分に洗へば、一種の殘留物を生ずる、夫れが即ち(グルー・チン) 狀である、但し水で洗ふ時に注意すべき事は、小さく凝聚して居る 麩の流れ去る虞れがあるから、之を防止爲めに、細かな目の金網を下敷にして、其上にて洗ふ事が必要である、而して殘留物の重量を秤量して見て、其得數を四を乗ずるのが定法である、若し殘留物の重量が八瓦あるとすれば、其四倍の數は三十二で、即ち一百に對する三十二パーセントの粘力を有する事が、確められたのである、



此検定法に據つて試験した結果、日本小麦粉は何うかと云ふに、大略二十乃至四十パーセントの澱素を含有して居る、尤も小麦の種類若くは産地等に依り、其含澱量は大いに異つて居るが、大體に於て關西、中國、九州等に産した小麦を原料とせる製粉は、其量少く二十乃至三十パーセントに止まり、關東地方のものは二十五乃至三十五パーセント位で、又北海道産のものには、三十五パーセント以上の多量を含んで居るものもある、而して此澱素含有量の多少に依つて、粘力の強弱を定むる事に普通なつては居るが、併しながら澱素の多量なるもの必ずしも強力のものとは云ひ得無いし、少量なるもの必ずしも粘力弱し

と云ふ事は出来無いので、要するに其強弱は澱の質と大いに關係を有するのであるが、現今我國では其處まで研究する人士も少い様である、又外國の小麦粉でも、其含澱量は我が製粉の夫れと大差は無いが、中には五十パーセント以上も有する多澱質のものもある、此處に云ふパーセントの數は、勿論澱の量であつて、充分に乾燥すれば、約二分の一位に減するのである、近時亞米利加では、多澱質の製粉を衛生上から珍重する傾向がある、然れども粘力の強弱は、製粉の優劣を直に決定する標準では無いから粘力の強弱即ち澱素の多少に就ては、我國に於ては未だ餘りに頭を悩ますの必要は有るまい。

(チ) 粉出歩合の計算

如何なる製造工業に在つても、其操業の成績に對して、常に多大の注意を拂ふ事は、事業經營上最も切要であつて、成績は良いが上にも、一層良い成績を得度いと、總ての點に就し、或は工夫を凝らし、或は苦心を費して、結局成るべく多くの利益を收むべき事は、今更暇を要せぬ所であるが、就中製粉事業の如きは、操業の成績を吟味する事が、最も緊要であつて、製粉製出の割合が少くは無からうか、澱の出かたが多くは有るまいかと、平素注意をせなければならぬ、如何に純良の小麦を原料に使用しても、若し機械に損所が

あつたり、技術が巧妙で無かつたならば、原料の善い割合に製粉が採れず、却つて粉末の多分に附着して居る澱の方が澤山に出る様な始末になつて、遂に事業上利益を見る事が出来無い結果を招く事になる、夫故に毎日の操業に對して、製粉製出高を澱産出高とを比較して、精選した小麦からは、凡そ何れだけの製粉が採れるかを検定する方法がある、之をイールド(粉出歩合)計算法と稱せられて居る、今此計算法を示す前に、パールと石との關係を少しく説明して見やう、普通に何パール製の製粉工場と云ふ事は、亞米利加あたりでは勿論能く判るが、我が國人の頭には一寸解し難い、元來パールと云ふ言葉は、



粉出歩合の計算

一樽に充つるだけの分量の稱呼であつて、物品に依つて其量に差異はあるが、製粉に用ふるパールは、一袋四十九封度入の粉四袋分即ち一百九十六封度の名稱で、我國の約二十三貫五百二十匁に相當し、亞米利加では一バレルの製粉を製出するに、約四ブツセルの原料を要するのである、一ブツセルの小麥の重量は、凡そ六十封度で、我が七貫二百匁に當り、又一ブツセルの容量は、我が約二斗一合餘に相當する、故に一バレルの製粉を製出するには、我が約八斗五合即ち二十八貫八百匁の原料を要する事になり、此原料の八割二分は製粉で、一割八歩は穀になる割合になるのである、所で我國では小麥一石は三十

七貫五百匁が普通の相場になつて居るが、正味三十七貫五百匁あるのは甚だ稀れで、平均三十五貫匁位のものである、其内約六分即ち二貫匁程は、精選其他の目減りの爲めに減じて、正味製粉となるのは約三十三貫匁であるが、又其二割乃至三割は穀となり、平均して二割八分位の穀は出るから、残りの約七割二分(二十三貫七百匁強)が製粉になる勘定であるから、丁度一バレル程の粉が採れる事になる、即ち日本小麥一石は、一バレルの製粉を製出する事が出来るから、一バレルの工場と云へば、一日(二十四時間)に一百石の原料小麥を挽碎し、製粉四百袋を製出し得る工場を指すのである。

日本小麥の相場と一石の重さ  
三石六斗

次に粉出歩合計算法は、百分率法を用ふるを便とする、之を左に表示する。

一日製粉量一〇〇バレルの豫定

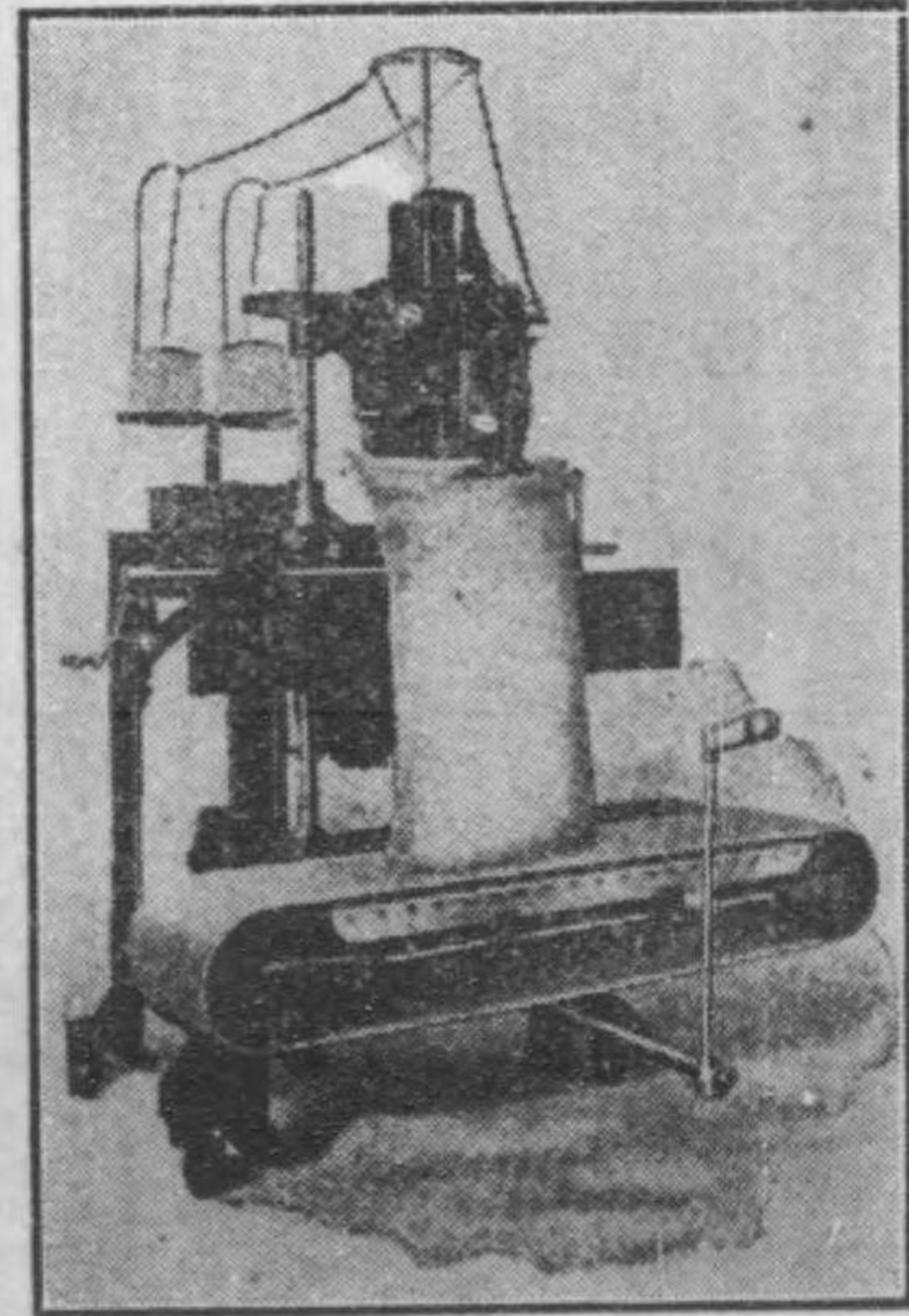
製品等級	製粉袋數	壹袋の目方	質量	粉出歩合百分率
▲壹等粉	三五	六貫匁	二一〇	六、二三
▲貳等粉	三〇〇	同	一、八〇〇	五三、四二
▲參等粉	四〇	同	二四〇	七、一二
▲四等粉	一五	同	九〇	二、六七
▲五等粉	一〇	五貫匁	五〇	一、四八
計	四〇〇		二、三九〇	七〇、九二
▲穀	一二〇	八貫匁	九六〇	二九、〇八
合計一百石(一石は卅三貫五百匁の割合)			三、三五〇	一〇〇、〇〇

右に掲げた計算は、實際製出した製品のみを算法であるが、尙ほ此表に精選又は他の目減り等を添加して、計算する向が無いでもない

粉出歩合の計算

が、一日に幾度となく繰返して算勘するには、右表の遺方で充分である。

サツク、シユーイング、マシン





### (三) 各製粉所現況

#### (1) 日本製粉株式會社

現時我國に於ける機械製粉所として、會社組織を以て巨資を擁し、盛んに斯業を經營する者の數は、決して五六に止まらずと雖も、就中其事業の最も大規模なるのみならず、我が斯業史を通じて、頗る誇りとす可き歴史を特有し、而も歲月の推移と共に、社運益々隆熾の盛觀を呈するもの、實に之を日本製粉株式會社と爲さざるを得ず、今同社の現況を叙せんとするに當つては、先づ其沿革に筆を著くるを至當とせん。何んとならば、同社は他の同業會社の多くが、明治三十七八年戰役後に

於て、一時に簇生的に起りたるものと異り、其起源の甚だ古くして、爾後幾多の迂餘曲折を経過し、加ふるに其奮闘的成績は、我が製粉業の發達に關し、鮮からざる貢獻を爲せるの印象を殘しつゝ、漸次社業の大を加へ、以て今日の盛況を睹るに到りたればなり。抑も同社の沿革は、其由來する所頗る遠くして復古く、過ぐる明治十七八年の交、鹿児島縣人野村忍助外數氏は相謀りて、曩に政府の經營して、遂に好成績を擧ぐるを得ざりし官營製粉所（東京淺草藏前の米廩内）の拂下を請ひ、其事成るや、地を東京市京橋區築地南小田原町に卜して工場を施設し、此處に該製粉所の機械を移附し、工場に名附くるに日本製粉會社の社名を以てし、新たに小麥粉の製

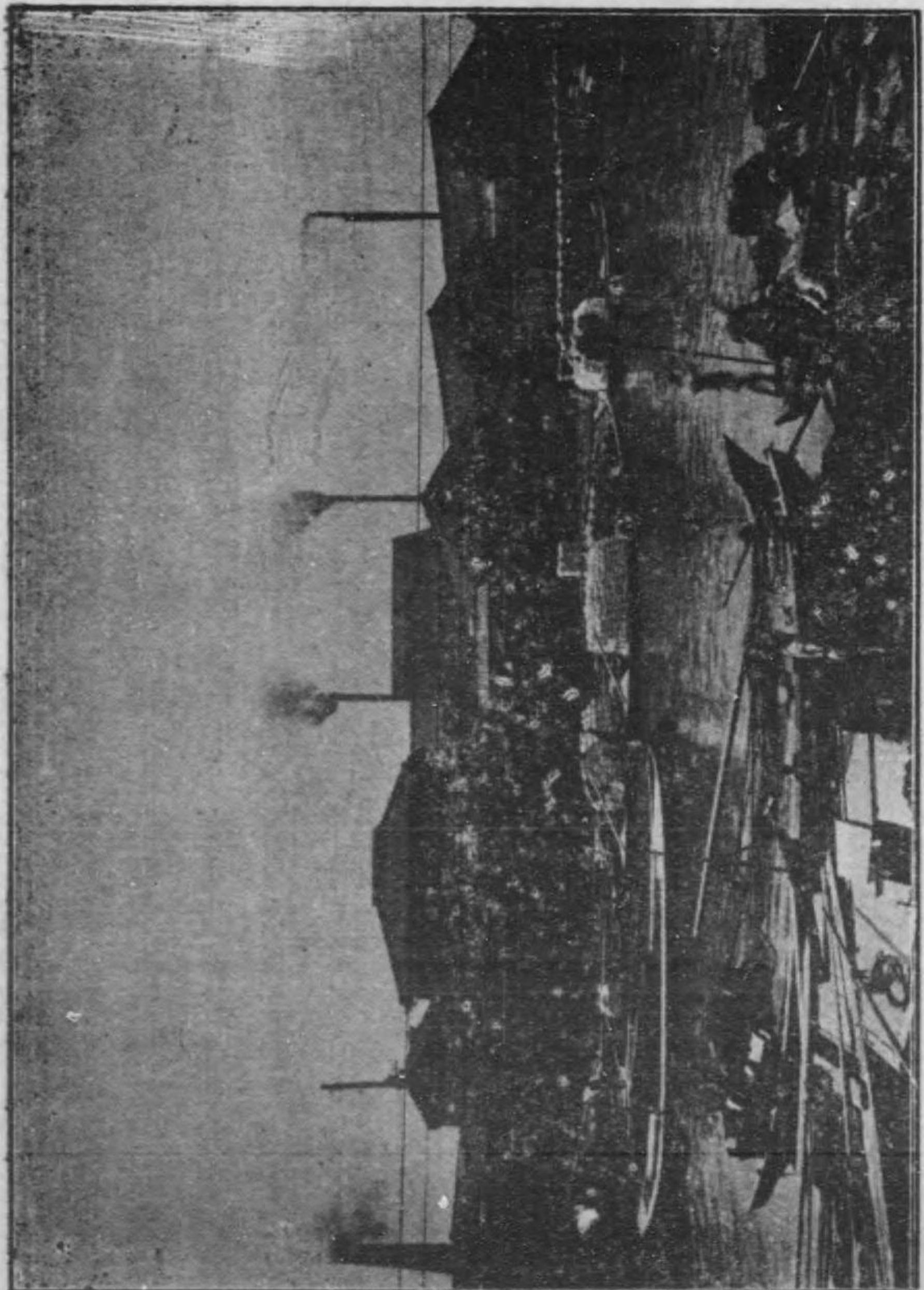
造を開始したり、當時使用の原料は、主として内國産小麥を充當し、一箇年の製粉數量約二萬四千袋（二袋英斤五十斤入）を算し、販路は専ら軍隊糧食用として、陸海軍各部隊に供給するに努めたり、斯くて明治二十一年に及び、更に同工場を深川區東扇橋町八番地に移轉し、盛んに其製造に従事したるが、後ち間もなく陸海軍隊の購買方法變改の爲め、殆んど全く販路の杜絶を來たし、明治二十四年遂に業務廢絶の止むを得ざるに到り、該社は解散の悲運に遭逢したり、如上慘澹たる末路を止めたる該會社は、即ち今の日本製粉株式會社の前身にして同社起業の基礎は、實に此間に胚胎したりと謂ふ可し。

日本製粉株式會社

郎、等原圃藏の諸氏は、當年我國に於ける小麥粉の供給が、専ら米利堅粉の輸入に待ち、而も在來の水車製粉は、依然として舊觀を墨守し、毫も改善發展の方策を講ずる無きに慨し、當面の急務として、外は外國粉の輸入を防遏し、内は從來の製粉業に新生面を開拓す可く、凝議を重ね、結局上叙廢絶に屬せる日本製粉會社の工場を復興して、製粉業を再開せん事に決定し、明治二十六年同工場買收の手續を了し、之を東京製粉合資會社と命名し直ちに製造に着手し、新製粉を市場に出すに至りたり、然れども、當時需要者側に在つては、所謂機械製粉に對する知識の未だ乏しかりしを以て、販路猶ほ伸びず、商況振はざるの形勢を招致し、社業一時困頓たるを免れざ

三九





りしが、漸くにして需要者が機械製粉を使用するの利益を覺りたると同時に、其品質も逐日改良せられたるを以て、爾來日に月に一般の聲價を博し、明治二十八年に到ては、一箇年優に七萬五千袋内外を製賣するの好況を呈し、社業の前程に成功の曙光閃きたるに依り、當事者は奮然事業の擴張を斷行する事に決意し、愈々明治二十九年の末、會社の



日本製粉株式會社專務取締役

前山久吉氏

組織を一變して、資本金三十萬圓の株式會社と爲し、社名を日本製粉株式會社と改稱したり、時恰も明治二十七八年戰役の後に當り、我が産業界の氣運旭昇の勢ひを以て勃興したるが故に、同社に於ても、亦一層實力を充實して、斯業場に



新式ローレル製粉機（一晝夜の製造力二百バレル）を購入し、明治三十年九月、工場の新築工事に併し操業を開始し、以て製出品の増加と品質の改善とに努力したるに、販路は益々益々大し、當時一箇年二十五萬袋前後を製出するも、尙ほ世上の需要を充たす能はざるの盛況に達し、同社の基礎は牢乎として最早揺かす可からざる底の鞏固を致し、其製



日本製粉株式會社取締役  
安部幸兵衛氏

品の信用は、中外臻る所好評噴々、洵に我が製粉中の白眉を以て目せられたり、而も同社の供給力は、殆く一般の需要に應じ難きを憾みとし、明治三十年に及び、更に一晝夜二百五十バレルの製造力を有する工場を増設し、同年十月より製造を開始したるに、其成績亦良好にして、既設工場を併せて、一日の製造力約五百石に達した。

斯る間に日露國交破裂し、彼我砲火の裡に相見ゆるや、軍需の麵麩製造に對し、小麦粉を供給せる事尠少なからざるを以て、戦時と雖も、業務上打撃を蒙らざるは勿論、却つて陸軍省の特命に依り、露國俘虜用麵麩粉を製造納入して、意外の利益と好評とを贏ち得たり而して三十七八年戦役後は、國運の振張と共に、國民の生活状態亦一新したるの結果、外國粉の輸入頼に激増し、在來の内地製粉の規模を以てしては、到底之と對抗し難き情況を呈したるに由り、則ち同社は輸入粉防遏を主なる目的とし、併せて一層業務を擴張するの方針を執る事となり、明治二十九年六月、從來の資本金三十萬圓に對し、更に金七十萬圓を増額して、資本金總額を壹百萬圓と爲すに

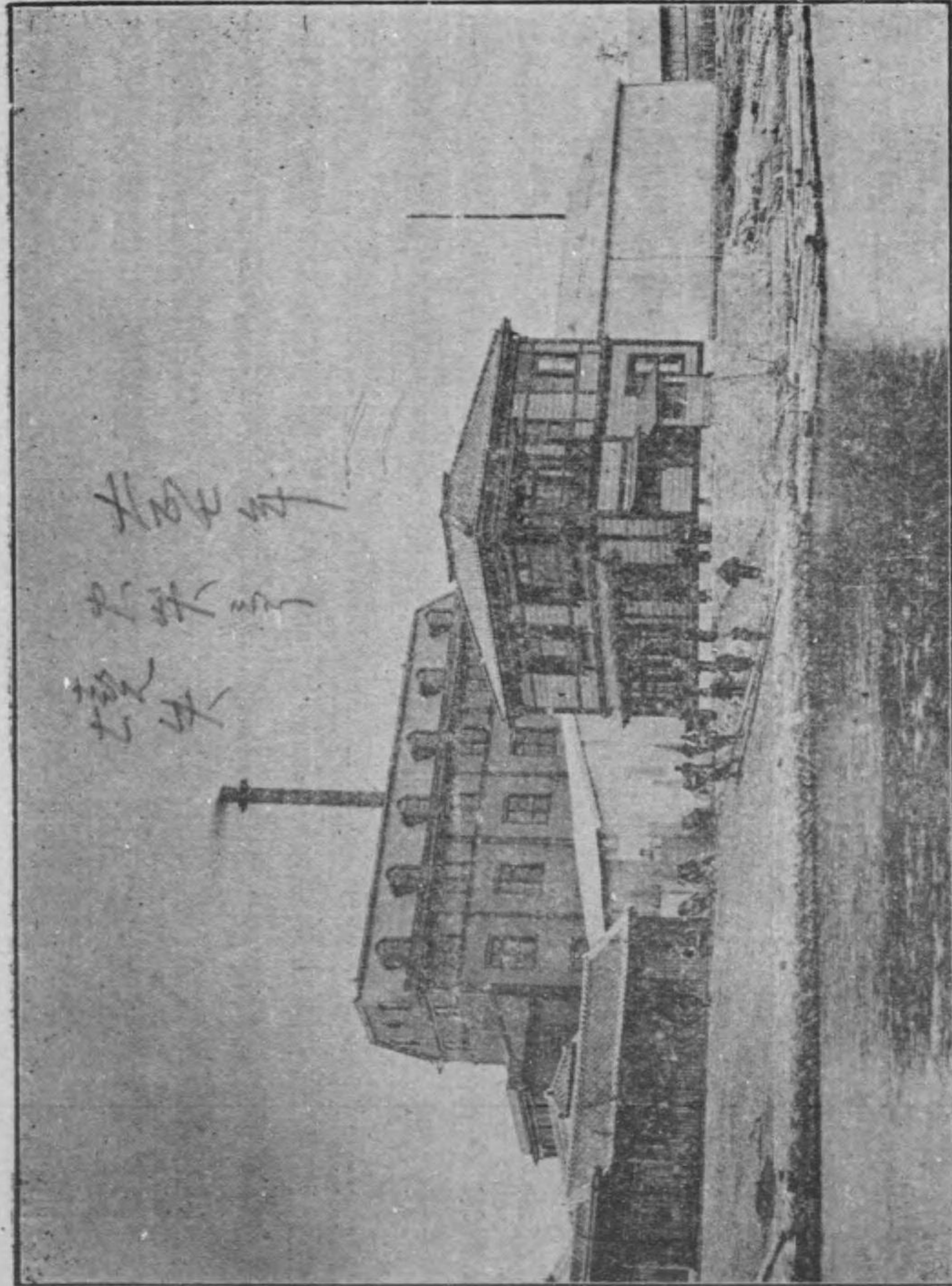
決し、越へて四十年の春、神戸市兵庫今出通三丁目一番地に兵庫支店を新設し、同時に一晝夜七百石の製造力を有する分工場を併設して、同年末期其製造を開始し、關西中國四國九州方面の需要に應じたるが、同社は之れを以て猶ほ足れりとせず、更に大々的發展を企劃せる結果、明治四十一年一月には、明治製粉株式會社（所在地東京府南葛飾郡大島町大字下大島、製造力一晝夜七百石）を、同四十年六月には、帝國製粉株式會社（所在地同府同郡砂村大字龜高、製造力一晝夜六百石）を各買収併合したり、爲めに資本金總額は實に壹百五十五萬圓に達し、東西に於ける本社支店工場及び兩分工場の製造力を通算すれば一晝夜二千五百石に及び、其製造力の豊富な



日本製粉株式会社

日本製粉株式会社兵庫支店工場

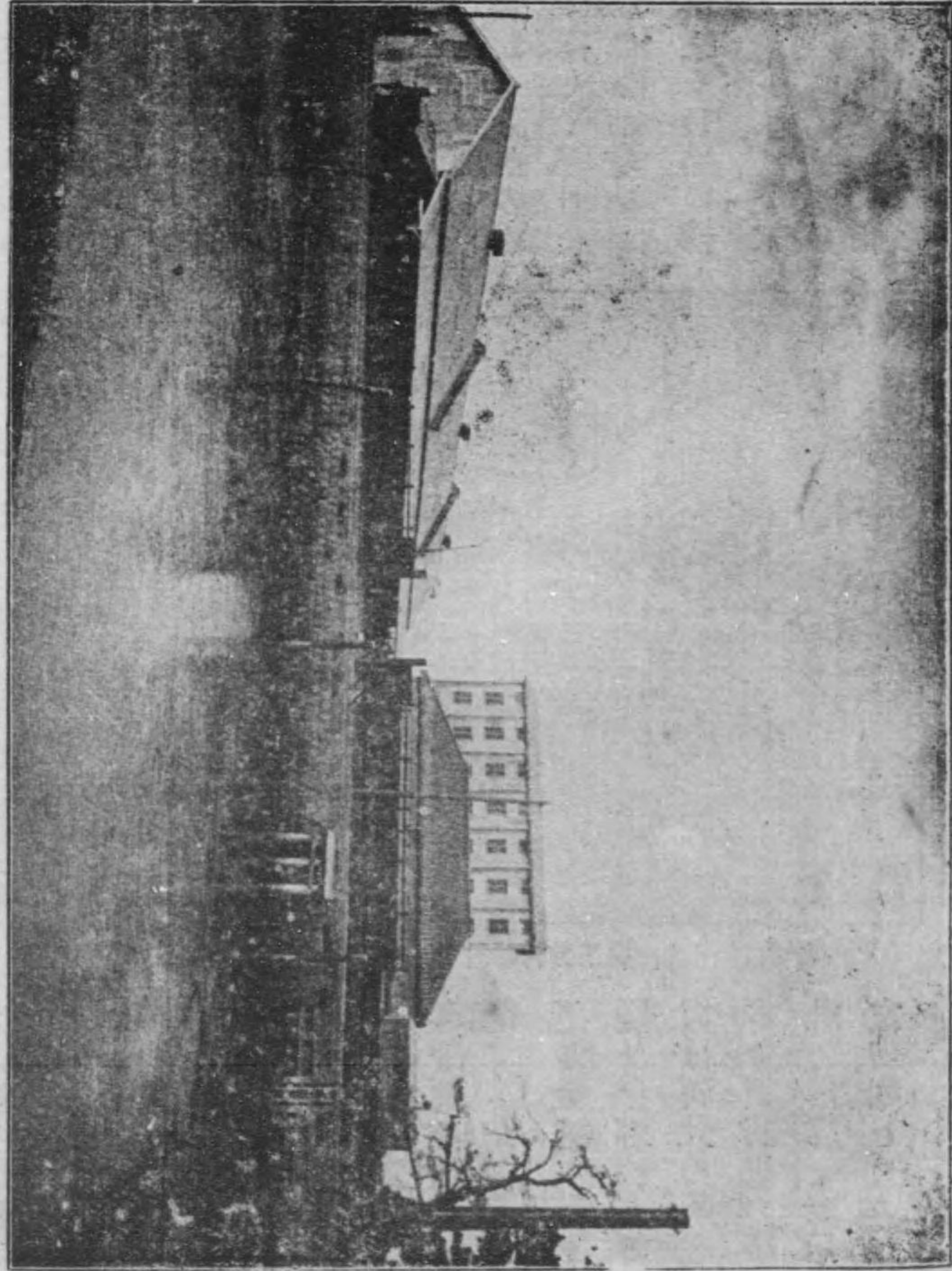
四四



日本製粉株式会社

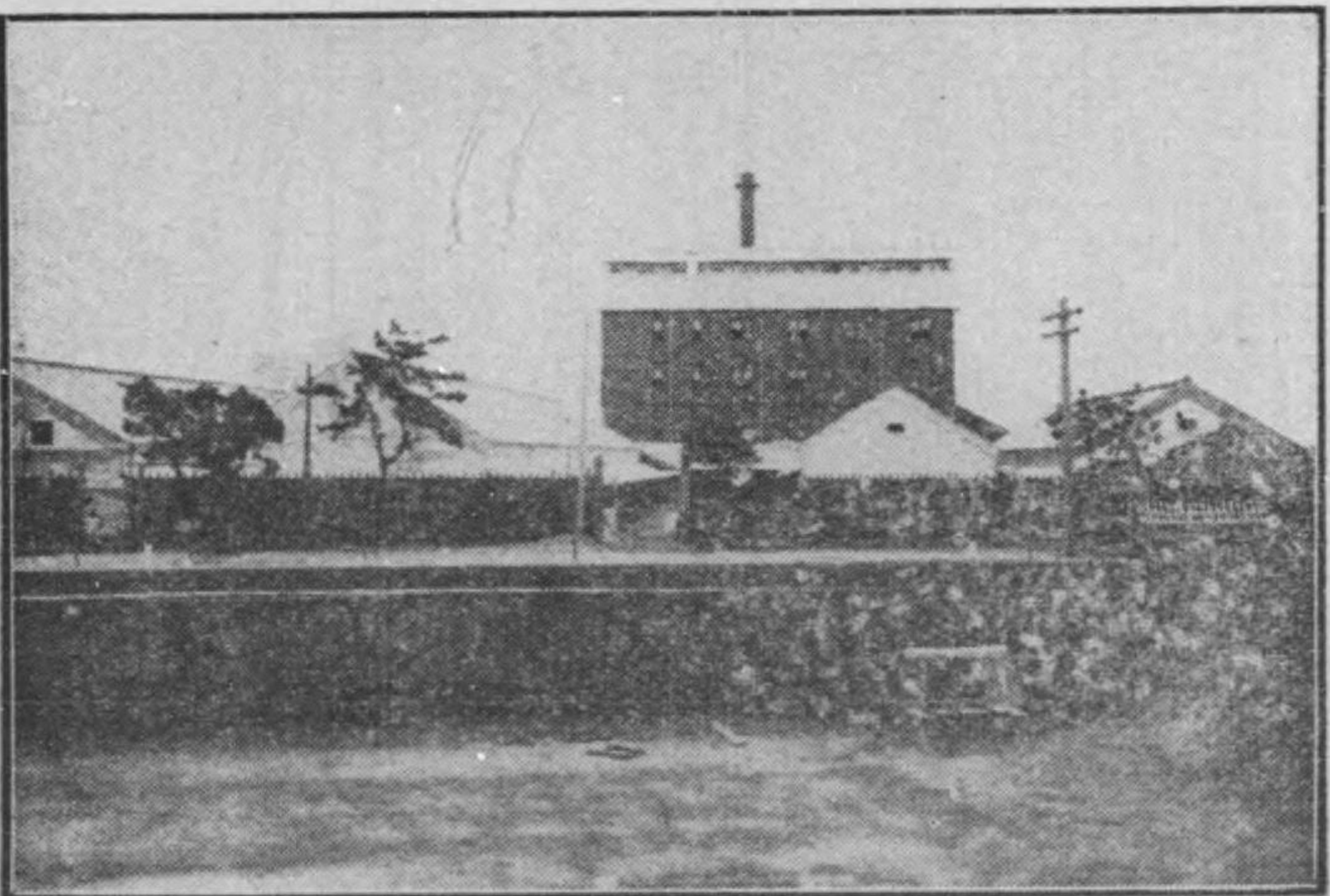
日本製粉株式会社名水川(大島町)分工場

四五





る洵に同業者中に冠たり  
而も同社は單に製造力に  
於て最優者たるに止まら  
ず、製品の實質亦極めて  
佳良にして、外國粉に比  
するも殆ど優劣無きが故  
に、一段需要者の愛好を  
吸聚し、其販路は駸々乎  
として増大し、東西の四  
大工場相呼應して、日夜  
汲々製造に忙殺せらるれ  
ども、猶ほ往々製品の拂  
底を告ぐるを以て、更に  
製造力増加の必要を認め  
最近大正元年十二月開會



日本製粉株式會社砂村分工場

せる株主總會に於て、栃  
木縣下の某所を卜して、  
新に分工場を設置するの  
議を決したる底の盛況に  
在り、思ふに我が機械製  
粉業者の最古參たる同社  
は、將來其古き歴史の光  
譽を愈々發揮するに同時  
に、時運に適應して、益々  
進歩發達す可きは、蓋し  
疑ひを容れざるなり。  
尙ほ同社の所在地及ひ資  
本金額其他の事項即ち同  
社の内容を表示すれば、  
左の如し。

▲所在地

本社 社(工場を併有す) 東京市深川区東扇橋町八番地  
支店(同) 上) 神戸市兵庫今出通參丁目壹番地  
分工場 東京府南葛飾郡大島町(小名木川通)  
同 同府同郡砂村大字 龜高

▲資本金 額 金壹百五十萬圓

▲拂込済資本金額 金壹百貳拾六萬五千圓

▲株式數 及 株數參萬壹千株(内舊株六千株、第一新株壹萬四千株、第二新株五千株)  
▲各種積立金 金四拾壹萬六千圓

▲社債 金五拾萬圓

▲製造力

本社工場(深川) 一日五百石  
支店工場(兵庫) 一日七百石  
分工場(大島) 一日七百石  
同(砂村) 一日六百石  
合計一日貳千五百石

▲敷地及建物坪數

日本製粉株式會社

本社 社(工場を包含す) 敷地坪數千四百拾六坪 建物坪數九百四拾六坪  
支店(同) 上) 同 壹千參百坪 同 八百五拾八坪



分工場(大島町)同 參千壹百八拾四坪同 壹千壹百八坪  
同(砂村)同 四千貳百貳拾坪同 壹千四百七拾坪

▲機械の種類

本社工場(深川)米國ノードーク・マーモン會社製  
支店工場(兵庫)同  
分工場(大島町)同 アリス・チャーマン會社製  
同(砂村)同 ウルフ會社製

▲製品の種類

本社工場(深川)松印、竹印、櫻印  
支店工場(兵庫)松印、竹印、梅印  
分工場(大島町)松印、竹印、櫻印、赤牡丹印、軍艦印  
同(砂村)松印、竹印、櫻印、富士印、敷島印

▲大株主氏名及所有株數

神奈川縣安部幸兵衛二、一〇〇株、東京府佐久間心一郎一、五五〇株、群馬縣南條新六郎一、二一〇株、新瀉縣山口達太郎九五五株、東京府小島精一六五〇株、同神谷傳兵衛六〇〇株、神奈川縣安部幸之助五八四株、東京府村上太三郎五七一株、同太田利兵衛五五六株、同前山久吉五〇〇株、同有馬頼寧四九六株、千葉縣茂木七郎右衛門四五〇株、東京府境豊吉四〇〇株、同館野榮吉四〇〇株、同前山敏三八〇株、栃木縣岩崎清衛三六〇株、茨城縣岩崎龜次郎三六〇株、東京府岩崎清七三一八株、栃木

▲社長以下役員技師長及技師

縣株式會社佐野津久居彦七三〇〇株、東京府栗原余吉三〇〇株、同越賀長之助三〇〇株、同尾崎作藏三〇〇株、神奈川縣田中善助三〇〇株  
専務取締役前山久吉、取締役安部幸兵衛、同小島精一、同村上太三郎、同岩崎清七、同神谷傳兵衛、同内田直三  
監查役根岸盛太郎、同久米良作、同藤野房次郎  
技師長竹村弟二、技師及職員四十一名

▲特約販賣店

本社(分工場を含む)平野商店東京支店(東京市日本橋區小網町二丁目)安部幸兵衛東  
京出張店(同區同町一丁目)伊藤芳次郎(同區小網町一丁目)島出新助(同區同町二丁目)  
川口惣藏(同區小網町仲町)小林彌兵衛(同區小舟町三丁目)鈴木米藏(同區本材木町二丁目)  
目)木下四郎兵衛(同區米澤町三丁目)藤井常吉(同區伊勢町)田村商會東京支店(同區西河岸竹生忠造(同區橋邊町)小松忠五郎(同區北紺屋町)北田仁兵衛(同神田區裏神保町)長田平藏(同區豐島町)立山商店(同區鍋町)大關藤吉(同本郷區春木町一丁目)八木牧三郎(同芝區通新町)下田惣吉(同四谷區鹽町二丁目)瀧半兵衛(同小石川區餅屋町)西山庄治郎(同淺草區材木町)福島惣松(同區聖天町)栗原余吉(同本所區綠町二丁目)鈴木三次郎(同横濱市石川町)清水四郎右衛門(同市柳町)太田利兵衛(同區)東京市日本橋區龜島町一丁目)吉原元治郎(同、同本郷區森川町)川島茂平(同、同深川區常盤町一丁目)岩崎清七(同、同區佐賀町二丁目)  
支店の部、平野商店(大阪市西區尼ヶ橋四詰)安部幸兵衛大阪支店(同南區末吉橋通



〔二丁目〕酒井商會(神戸市鍛冶屋町)小泉友助(鞍商、神戸市兵庫宮前町)川西善右衛門  
(同、同市兵庫東出町二丁目)武貞龜造(同、同市兵庫南仲町)

### (ロ) 日清製粉株式會社

明治三十七八年戰役以後、有らゆる産業の鬱勃として興起せる機運に乗じ、各地に新營せられたる製粉會社の中に在りて、最も適當の地點を相して創業し、次で事業の進行に伴ひ適當の時機を看取して、更に有望なる他會社を併せ、一層規模を擴張し、現今社運の愈々隆昌なるものに到つては、先づ指を日清製粉株式會社に屈せざるを得ず、蓋し同社の如きは、戰後ノ施設に係る各般の會社を通じて、異數の成功者と讚稱するも、決して溢美の言にあらざる可し。

抑も同社は、明治三十九年の交、京濱兩地に

於ける有力なる實業家が、横濱市の斯業經營上地の利を得たるもの有るに着眼し、同地に於て之が開業を爲さん事を目的として、發企したるものに屬す、即ち同社工場地に選定せられたる横濱市は、海運の利、鐵路の便を兼有し、殊に臨港設備の完全せるを以て、原料の輸入若くは製品の輸出に關して、幾多の便益を享くるに足り、況んや同社が工場其地の敷地用として、横濱倉庫株式會社より譲受けたる同市神奈川町地先海面埋立地第二區(現今の同町字浦島貳丁目壹番地に相當す)の如きは、官鐵東海道線に聯絡する鐵道引込線の敷設に由り、社用物貨の積卸に就ては、無用

Faint table with multiple columns and rows, likely a ledger or financial statement, mostly illegible due to fading.







(ツ) 自一九一二年七月 至一九一二年六月 コロンビヤ河より東洋各港向麥粉積出高

月日	船名	香港	馬尼刺	横濱	神戸	門司	其他	合計
廿七日	リグジャ	三、七五〇	一、三三〇	—	二、五〇〇	—	—	七、五八〇
廿五日	クメリツク	九、九九八	五、〇〇〇	—	—	—	—	一四、九九八
廿八日	ルイセリツク	二、三六九	二、八五五	—	一、〇〇〇	—	—	六、二二四
廿九日	ストラスリオン	三、九五〇	一、三〇〇	—	—	—	—	五、二五〇
三十日	オーテリツク	三、三〇〇	一、八七五	—	二、五〇〇	—	—	七、六七五
三十一日	リグジャ	五、七〇二	—	—	—	—	—	五、七〇二
七月一日	スペリツク	三、九二五	二、一三五	—	—	—	—	六、〇六〇
二日	ロバートドラ	—	—	—	—	—	—	—
三日	クメリツク	五、五八八	一、三七五	—	二、五〇〇	—	—	九、四六三
四日	ルーセリツク	三、〇〇〇	四、〇〇〇	—	—	—	—	七、〇〇〇
五日	ストラスリオン	—	—	—	—	—	—	—
六日	オーテリツク	三、七七一	二、七〇〇	—	—	—	—	六、四七七
七日	リグジャ	五、〇〇〇	五、五〇〇	—	—	—	—	一〇、五〇〇
八日	ハゼルドラ	—	—	—	—	—	—	—
九日	シユーベリツク	二、五〇〇	一、三三五	—	—	—	—	三、八三五
十日	ウンカイ丸	—	—	—	—	—	—	—
十一日	リユーセリツク	二、六〇〇	一、〇〇〇	—	—	—	—	三、六〇〇
十二日	クランマシバ	三、一八四	—	—	—	—	—	三、一八四
十三日	ハイキユルス	四、六六三	一、七五五	—	—	—	—	六、四一八
十四日	リグジャ	四、八五八	—	—	—	—	—	四、八五八
十五日	ロードベル	二、五〇〇	三、〇〇〇	—	—	—	—	五、五〇〇
十六日	マンダサン丸	—	—	—	—	—	—	—
合計		四七、三三一	二九、六七二	一〇、七五五	一〇、〇九四	七、四九三	七、三六五	一〇九、六二〇

コロンビヤ河より東洋各港向麥粉積出高



(ネ) 自一九二二年七月 至一九二二年六月 ビュゼットサウンドより東洋各港向麥粉積出高

月日	船名	香港	馬尼刺	横濱	神戸	門司	其他合計
七月	阿波丸	11,000	1,000	1,000	1,000	1,000	15,000
八月	巴奈馬丸	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	14,000
九月	シユーベリツク號	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	14,000
十月	チタン號	7,400	1,000	1,000	1,000	1,000	11,400
十一月	佐渡丸	2,500	1,000	1,000	1,000	1,000	6,500
十二月	沙市丸	6,600	1,000	1,000	1,000	1,000	10,600
一月	因幡丸	6,600	1,000	1,000	1,000	1,000	10,600
二月	墨西哥丸	6,500	1,000	1,000	1,000	1,000	10,500
三月	クマリツク丸	3,500	1,000	1,000	1,000	1,000	6,500
四月	プロチンラス號	8,400	1,000	1,000	1,000	1,000	12,400
五月	鎌倉丸	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
六月	シカゴ丸	3,500	1,000	1,000	1,000	1,000	6,500
七月	ルセリツク丸	2,900	1,000	1,000	1,000	1,000	5,900
八月	加奈陀丸	3,900	1,000	1,000	1,000	1,000	6,900
九月	キーマン丸	5,500	1,000	1,000	1,000	1,000	8,500
十月	ハイキュール丸	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
十一月	佐渡丸	7,900	1,000	1,000	1,000	1,000	11,900
十二月	タコマ丸	3,900	1,000	1,000	1,000	1,000	6,900
一月	ミンチソダ號	7,900	1,000	1,000	1,000	1,000	11,900
二月	阿波丸	3,700	1,000	1,000	1,000	1,000	6,700
三月	巴奈馬丸	4,600	1,000	1,000	1,000	1,000	7,600
四月	オアソハ丸	3,200	1,000	1,000	1,000	1,000	6,200
五月	ストラスリオン丸	1,500	1,000	1,000	1,000	1,000	5,500
六月	鎌倉丸	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
七月	オーテリツク丸	8,400	1,000	1,000	1,000	1,000	12,400
八月	沙市丸	3,300	1,000	1,000	1,000	1,000	6,300
九月	因幡丸	3,300	1,000	1,000	1,000	1,000	6,300
十月	墨西哥丸	2,300	1,000	1,000	1,000	1,000	5,300
十一月	ペンロホン號	5,300	1,000	1,000	1,000	1,000	8,300
十二月	佐渡丸	8,400	1,000	1,000	1,000	1,000	12,400
一月	シユーベリツク號	8,400	1,000	1,000	1,000	1,000	12,400
二月	ロバートドラー號	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
三月	シカゴ丸	2,300	1,000	1,000	1,000	1,000	5,300
四月	ハイレステン號	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
五月	丹波丸	2,400	1,000	1,000	1,000	1,000	5,400
六月	加奈陀丸	9,800	1,000	1,000	1,000	1,000	13,800
七月	サイクロプス號	6,900	1,000	1,000	1,000	1,000	10,900
八月	鎌倉丸	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
九月	タマリツク號	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	5,000
十月	シカゴ丸	5,500	1,000	1,000	1,000	1,000	8,500
十一月	ミチソダ號	11,500	1,000	1,000	1,000	1,000	15,500
十二月	阿波丸	2,600	1,000	1,000	1,000	1,000	5,600
一月	ルセリツク號	8,500	1,000	1,000	1,000	1,000	12,500
二月	スケリーツ號	9,500	1,000	1,000	1,000	1,000	13,500
三月	巴奈馬丸	9,500	1,000	1,000	1,000	1,000	13,500
四月	アンチロチャス號	16,400	1,000	1,000	1,000	1,000	20,400











(ラ) 一九一二年 下半年 コロンビヤ河より東洋各港向麥粉積出高

積出月日	船名	香港	馬尼刺	横濱	神戸	門司	其他	合計
三十一日	因幡丸	一七、八六六	六、七、五〇〇	九、五、〇〇〇	三、八、六六	三、八、六六	一、〇、〇〇〇	一七、八六六
三十日	合 計	一七、八六六	六、七、五〇〇	九、五、〇〇〇	三、八、六六	三、八、六六	一、〇、〇〇〇	一七、八六六
二十九日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
二十八日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
二十七日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
二十日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十九日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十八日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十七日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十六日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十五日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十四日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十三日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十二日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十一日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
十日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
九日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
八日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
七日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
六日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
五日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
四日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
三日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
二日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
一日	オーテリツク丸	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	六、〇〇〇
合計	合 計	一七、八六六	六、七、五〇〇	九、五、〇〇〇	三、八、六六	三、八、六六	一、〇、〇〇〇	一七、八六六



可 半 年	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十 一 月	十 二 月
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

の  
手  
数  
と  
費  
用  
と  
を  
節  
略  
し  
得  
る  
の  
利  
益  
至  
大  
な  
る  
に  
於  
て  
を  
や  
、  
故  
に  
製  
粉  
原  
料  
た  
る  
米  
國  
小  
麥  
を  
輸  
入  
し  
、  
此  
處  
に  
揚  
陸  
す  
る  
等  
の  
場  
合  
に  
當  
つ  
て  
は  
、  
他  
會  
社  
の  
容  
易  
に  
企  
及  
し  
難  
き  
迅  
速  
且  
つ  
簡  
易  
な  
る  
を  
得  
可  
く  
、  
同  
社  
發  
企  
の  
諸  
士  
が  
、  
此  
地  
に  
工  
場  
を  
設  
く  
る  
の  
計  
を  
定  
め  
た  
る  
は  
、  
洵  
に  
先  
見  
の  
明  
あり  
と  
稱  
し  
て  
可  
なり  
、  
當  
時  
同  
社  
の  
資  
本  
金  
は  
壹  
百  
萬  
圓  
に  
し  
て  
、  
明  
治  
四  
十  
年  
三  
月  
一  
日  
創  
立  
總



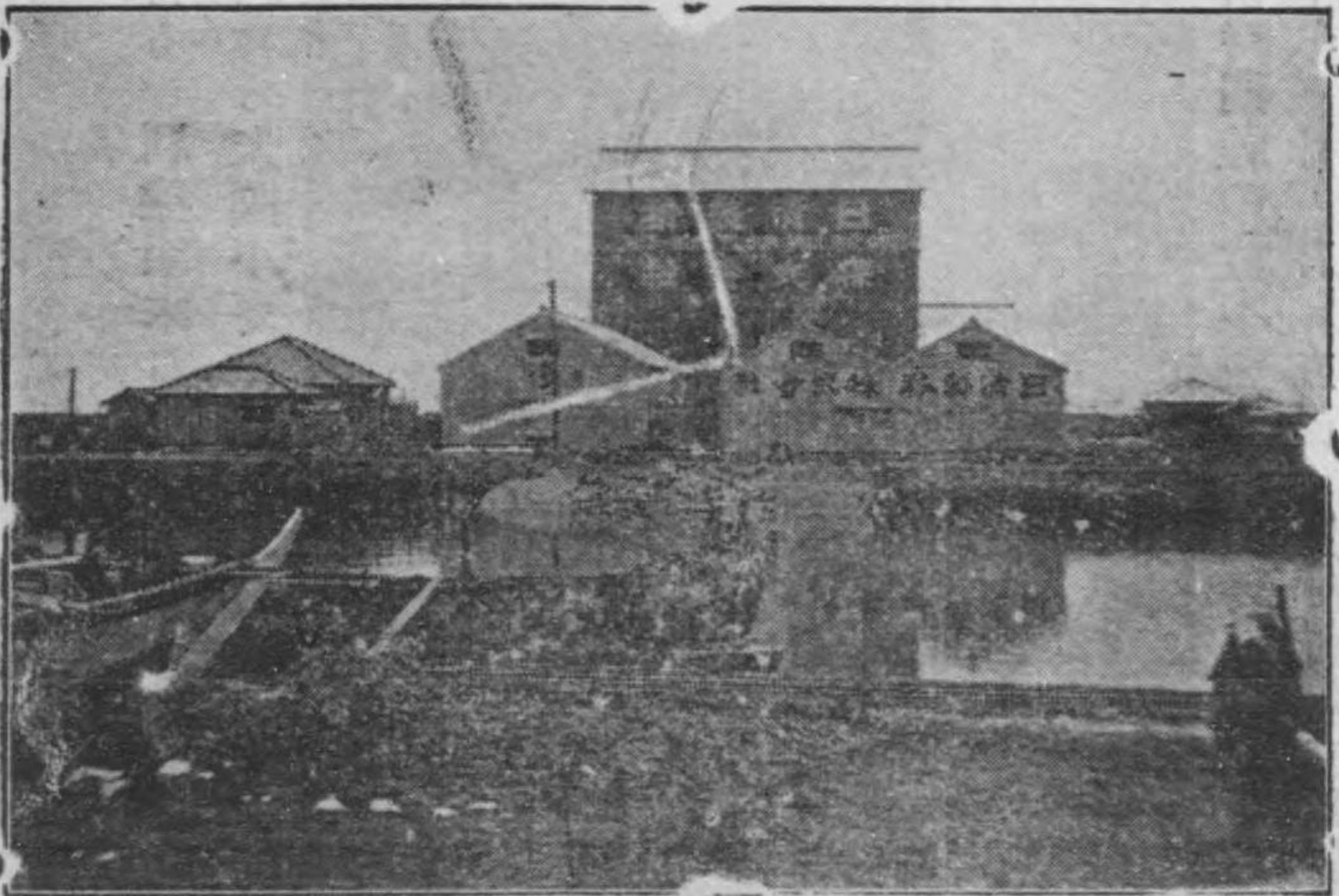
日清製粉株式會社專務取締役  
正 田 貞 一 郎 氏

會  
を  
開  
會  
し  
て  
、  
役  
員  
の  
選  
任  
を  
行  
ひ  
、  
取  
締  
役  
社  
長  
に  
は  
加  
藤  
八  
郎  
右  
衛  
門  
氏  
を  
舉  
げ  
、  
取  
締  
役  
に  
田  
口  
禮  
五  
郎  
、  
村  
禮  
五  
郎  
、  
井  
三  
吉  
、  
久  
治  
郎  
、  
平  
之  
助  
、  
猪  
之  
助  
、  
查  
役  
に  
伊  
東  
與  
右  
衛  
門  
、  
喜  
八  
、  
石  
井  
直  
の  
各  
氏  
就  
任  
し  
たり  
、  
然  
る  
に  
此  
時  
は  
、  
同  
社  
の  
工  
場  
地  
に  
選  
定  
せ  
る  
神  
奈  
川  
町  
地  
先  
海  
面  
埋  
立  
地  
は  
、  
未  
だ  
工  
事  
中  
な  
り  
し  
を  
以  
て、

日清製粉株式會社



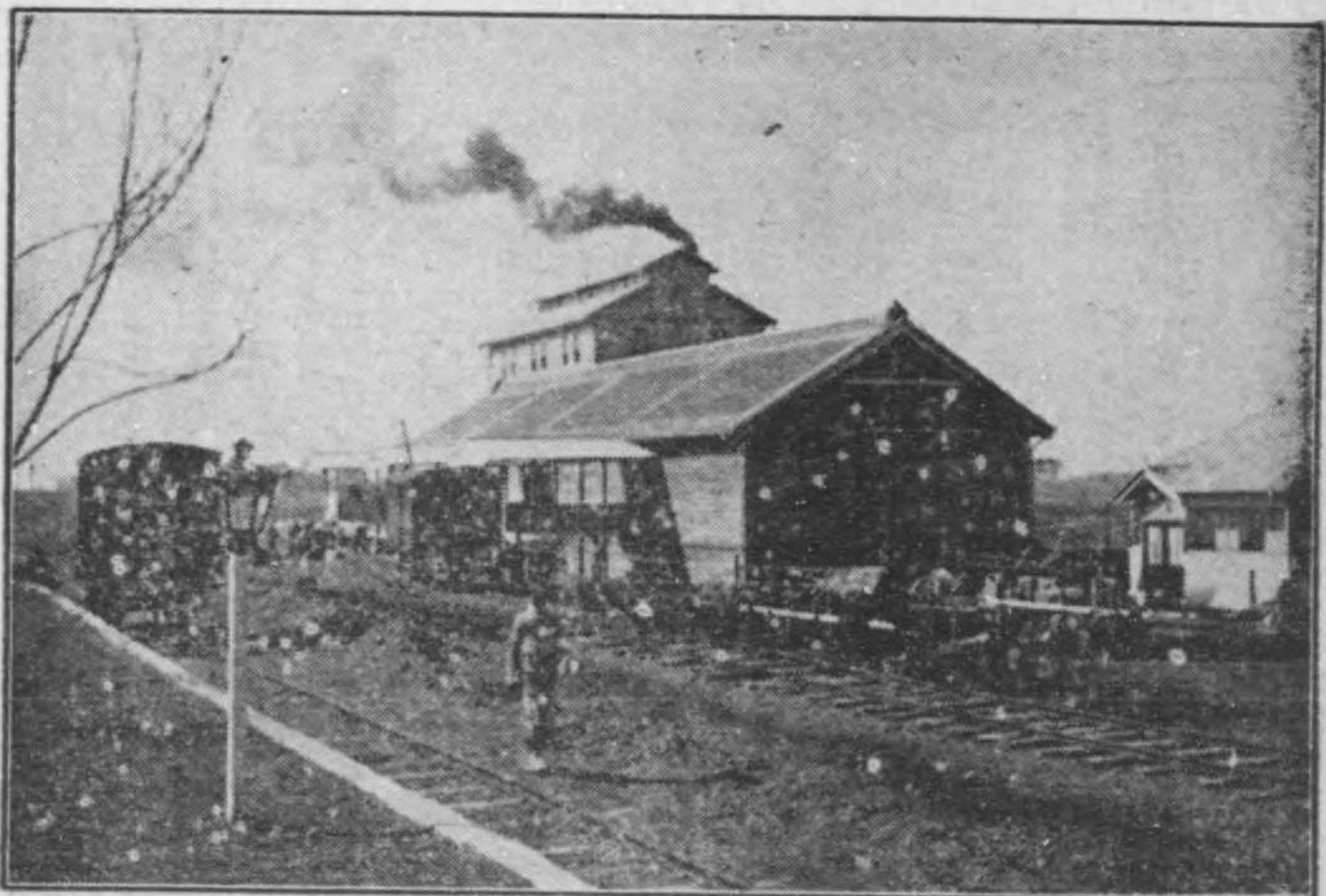
假りに本社を横濱市青木町三千五百八十一番地に設置し、着々業務を進捗せしめたるが、同年七月に至り、工場豫定地の埋立工事大半竣功し、且つ新築中なりし事務所も、亦落成を告げたるに依り同年八月一日、青木町の本社を同處に移轉したるが、工場倉庫其他は尙ほ建築中に屬し、當事者は銳意其竣成を急ぎたり、是より先き、同社は横濱共同電燈株式會社より總



日清製粉株式會社横濱工場

ての製粉機械を運轉するの原動力として、電力の供給を受くる事を約したるが、此電気原動力の使用は、我が製粉界に於ては、儘に他に數歩を抜ける最新の設計にして、實に斯業に對し電力利用の模範を示せるものなり、如上横濱工場の建築中に際し、更に同社事業の大發展を爲すべき機運は到達し、即ち明治四十年十月を以て、館林製粉株式會社（所在地：群馬縣

邑樂郡館林町）を同社に併合するの契約成立し、之を館林工場と稱し、横濱工場の成るに先んじて此工場の製品に同社製品の名を冠して、市場に出すに至れり、元來館林製粉株式會社は、明治三十四年五月、同地方有力者の創設に係るものにして當初の資本金は僅に參萬圓に過ぎざりしが、爾來時運に伴ふて漸次發展し同三十九年十一月に到つては、實に資本金を六拾



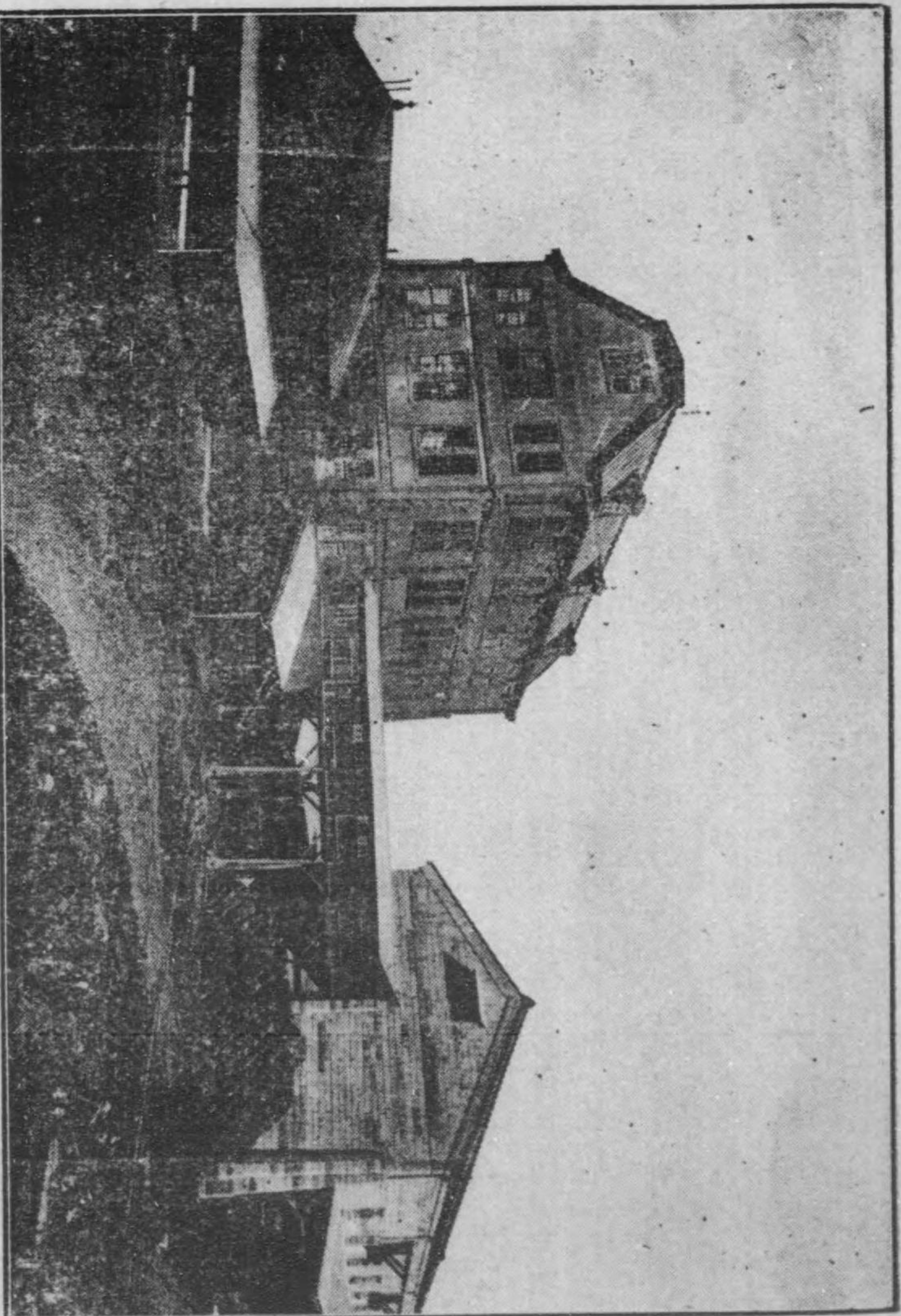
日清製粉株式會社館林工場

萬圓に増額するの大飛躍を實現し、之と同時に、舊來の工場以外に、運輸交通の至便なる館林町の一部（東武鐵道線館林驛隣地）に新工場敷地を相し、同四十年一月、其工事に着手し、尙ほ館林驛より同工場構内に鐵道引込線を敷設したる等、規模の壯大と完整とを極めたる一大製粉所を出現せんとするに際し、日清製粉との併合は遂行せられたるなり、續いて右併合



の結果、同四十年十一月中旬臨時株主總會を開き、加藤社長、木村、松井、吉田の三取締役及び伊東、石井の兩監査役の辭任に對する補缺選舉を執行し、取締役に正田貞一郎、石島爲三郎、長柄徳次郎、監査役に吉田平之助、茂木啓三郎の諸氏各當選就任し、更に取締役の互選を以て、正田貞一郎氏を専務取締役に舉げ、尙ほ根津嘉一郎、加藤八郎右衛門の兩氏を相談役に推薦したり、越へて同四十一年一月中旬、横濱工場の建築工事完く落成を告げ、直ちに製粉機械の据附を爲し、更に翌二月、社務の敏活を期せんが爲めに、從來横濱市神奈川町字浦島に設置せる本社を東京市日本橋區小網町貳丁目拾壹番地に移轉したり、其後間も無く、館林町の新工場亦竣成したる

を以て、横濱工場と相俟つて、精良なる製品の製出に力のたるが、同社は此二工場の製造能力を以て未だ足れりとせず、遂に巨手を伸ばして、同四十三年九月、大日本製粉株式会社（所在地川字都宮市今泉町字大王）を買収したり斯く、館林字都宮の二社を併せたる結果、同社の資本金總額は、實に壹百七拾萬圓に膨脹し、而も前途益々社業の統一と擴張を企てるの必要あるを以て、曩に相談役に推薦したる根津嘉一郎氏を更めて取締役社長に舉げ、此重任に當らしむる事となり、而して同社の製造能力は、資本金の増額に伴ふて大を加へ横濱工場に在つては壹晝夜四百バール、館林工場同壹千バール、宇都宮工場同四百バール、合計壹千八百バールに達し、加ふ



日清製粉株式会社

日清製粉株式會社宇都宮工場



るに其製品の聲價は、到る處の市場に頗る好  
 良にして、同社製品の名は、斯業界に於ける  
 一種の權威として、迎へらるゝの盛況を呈せ  
 り、次いで近く大正元年八月三十一日を以て  
 日本橋區小網町の本社を豫ねて建築中なりし  
 同區末廣河岸第拾六號地の新築建物に移轉し  
 左の如し。

たるが、其建物の壯麗にして、頗る衆目を惹  
 くは、恰も其社業の愈々進歩發達する祥兆と  
 も觀らる可く、同社の未來は洵に祝福に満て  
 りと謂ふ可きなり。

尚ほ同社の所在地其他の内容を表示すれば、

▲所在地

本社 東京市日本橋區末廣河岸第拾六號地  
 横濱工場 横濱市神奈川町字浦島二丁目一番地  
 館林工場 群馬縣邑樂郡館林町(東武鐵道線館林驛隣地)  
 宇都宮工場 宇都宮市今泉町字天王

▲資本金額 金壹百七拾萬圓

▲拂込済資本金額 金壹百四萬四千圓

▲株式數及株の金額 株數參萬四千株(内舊株壹千貳百株、新株參萬貳千八百株)壹株金五拾圓

▲各種積立金 金拾九萬六千圓

▲製造力

横濱工場 一日四百バール  
 館林工場 一日壹千バール  
 宇都宮工場 一日四百バール  
 (併工場一日壹百バール、新工場同參百バール)

合計一日壹千八百バール

▲敷地及建物坪數

横濱工場 敷地坪數五千坪 建物坪數八百坪  
 館林工場 同 壹萬貳千坪 同 貳千五百坪  
 宇都宮工場 同 六千坪 同 七百坪

米國ノードーク・マーン會社製

▲機械の種類

横濱工場 同 ウルフ會社製及同アリス・チャーマン會社製  
 館林工場 (舊工場同アリス・チャーマン會社製  
 新工場同ウルフ會社製)

横濱工場 カメラヤ印、蟬印(青、赤、黄、黒)蜂印(同上)青日清印、牛印(青、赤、黒)マス印(同上)

▲製品の種類

館林工場 旭印、鶴印、龜印、ヴァイオレット印、蝦印、鴛鴦印、金魚印、赤菱印、馬印、鶏印

宇都宮工場 月印、雪印、花印、鶏印、蜂印

東京府根津嘉一郎一、二〇株、神奈川縣加藤八郎右衛門七二〇株、群馬縣若旅喜一郎六九六株、東京府正田貞一郎六五〇株、千葉縣茂木七郎



▲大株主氏名  
及所有株數

右衛門六五〇株、東京府石島爲三郎六三八株、栃木縣青木仁平六三四株  
同手塚五郎平五〇〇株、神奈川縣櫻井八重吉五〇〇株、同木村仲二郎五  
〇〇株、東京府木村源兵衛五〇〇株、栃木縣齋藤太兵衛四二六株、神奈  
川縣木村庫之助四〇〇株、栃木縣小野鶴吉三六〇株、東京府郷隆三郎三  
六〇株、同岩崎清七三五〇株、同鈴木榮次郎三五〇株、山梨縣村松甚藏  
三四〇株、栃木縣長柄德次郎三〇一株、群馬縣千金樂喜一郎三〇〇株、  
神奈川縣太田佐兵衛三〇〇株、同松下久治郎三〇〇株、同松井三吉三〇  
〇株、東京府小池國三三〇〇株

▲社長以下役員  
技師長及技師

取締役社長根津嘉一郎、專務取締役正田貞一郎、取締役木村庫之助、同  
松下久治郎、同長柄德次郎、同石島爲三郎  
監查役茂木啓三郎、同郷隆三郎、同青木仁平  
技師長相浦貫一、館林工場主任星野唯三、技師生明丑之助、同梅宮清松  
同奥田道正、同小寺又雄、同塚田與太郎、同栗谷川國忠、同四戸才次郎  
宇都宮工場商務課長恩賀太一郎

増田 増藏 東京支店(東京市日本橋區小網町二丁目) 殿木市太郎(全區小舟町一丁目)平  
野商店東京支店(全區小網町二丁目)三井物産合名會社(全區駿河町)原甚藏(同本所  
區吉田町十七番地)増田増藏本店(横濱市本町四丁目)二川宗兵衛(水戸市下市本三丁目)

▲特約販賣店

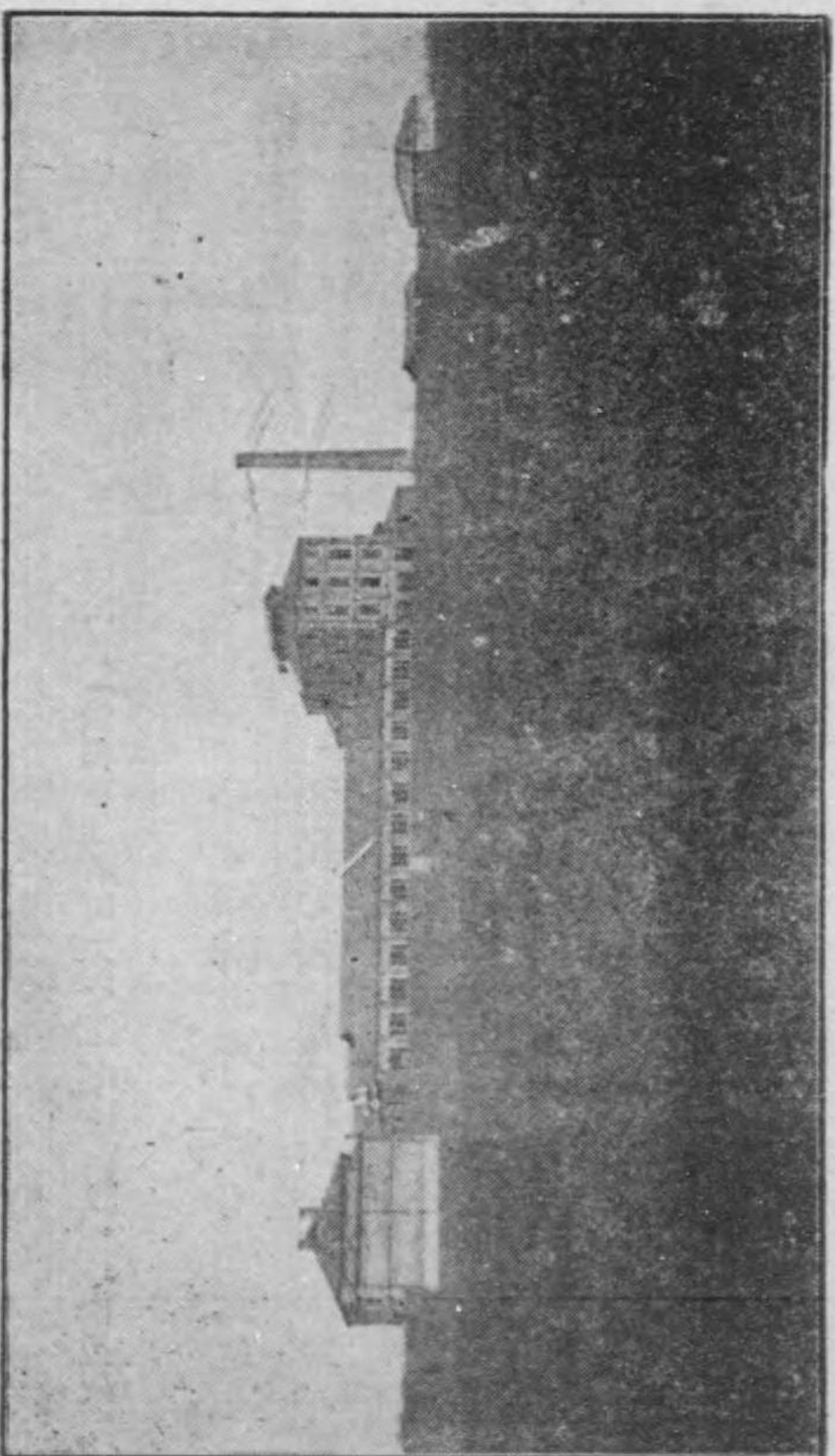
小林竹次郎(宇都宮市池上町)諸貫半之助(武藏國行田町)鈴木宗次郎(下總國結城町)  
村松甚藏(甲府市柳町)高田利八(前橋市堅町)安樂岡善平(上野國館林町)平井所店  
(岐阜市神田八丁目)福谷藤七(豐橋市堂町)澤藤彌四郎(陸中國黒澤尻町)岡本市郎兵  
衛(駿河國沼津町)三浦傳六(秋田市上肴町)白土七太郎(磐城國平町)柴田文介(釧路、  
横濱市住吉町二丁目)

(ハ) 東亞製粉株式會社

過ぐる明治三十八年の秋季、日露媾和條約の  
締結を了し、平和の全く克復するや、我が國  
民は、所謂波濤條約に據りて獲得せる帝國利  
權の伸張に伴ひ、商工業をして中外に活動發  
展せしめんと欲し、各種の施設を試みるに銳  
意したるが、殊に商工業家の多數は、滿韓の  
地域に對して、最重の注意を拂ひ、或は韓國  
の興業殖産を企劃し、或は滿洲に於ける利源  
の開拓に腐心し、要するに、戦後事業の大部

分を滿韓の野に於て經營せんとし、他に無撓  
國民が驥足を伸ぶるの餘地、殆ど之れ有らざ  
るが如き形勢を招致したり、斯時に方り、我  
が製粉業の如きも、亦他の事業の振興と共に  
創設新營のもの續出し、内地に滿洲に、其數  
據指仍は足らざるの昌況を呈せりと雖も、惜  
む可し、其目論見多くは狭小に失し、然らざ  
るものは、地の利を選擇するの明を缺くに似  
たり、然るに我が實業界裡錚々たる一部の人  
士は、其着眼道に時流に超越し、一般人の舉





東亞製粉株式會社漢口支店工場

て滿韓經營に焦慮しつゝあるに拘らず、平然  
我不關焉の態度を持し、而も最も秘密に各般  
の調査に従ひ、結局製粉業の有利多望なるを  
斷案するや、直に一大斯業會社の創設計畫を  
發表し、而して其事業地を本邦（東京）及び  
中清（漢口）の兩地に卜し、北の方滿韓の開  
拓と共に、南支那の方面に於ても、亦戦後經  
營の實を擧げん事を期せるもの、即ち東亞製  
粉株式會社は是れなり。  
斯く帝國實業の勃興時代に當り、至大の抱負  
を以て生れたる同社は、東京には本社及び工  
場を置き、主として製粉業を營み、漢口には  
支店及び工場を設け、製粉業と倉庫業とを併  
營するを目的と爲し、明治三十九年十月、資  
本金參百萬圓に對する第壹回株金拂込を了る

や、直に役員の選舉を行ひ、取締役會長に大橋  
新太郎、常務取締役に諸井四郎、池田寅治郎  
取締役に渡邊福三郎、柿沼谷藏、村井眞雄、  
菊池長四郎、監査役に村井吉兵衛、鈴木梅四  
郎、若尾幾造の諸氏當選就任し、尙ほ相談役  
に男爵澁澤榮一氏を推舉し、次いで東京本社  
は、東京府南葛飾郡大島町大字下大島（小名  
木川通）に、漢口支店は、清國漢口佛租界滸  
瀾里第壹號地に、各規模壯大なる工場並に事  
務所等の建築に着手したり、而して東京本社  
の建築工事は、同四十年五月の交、殆ど竣功  
を告げ、續いて瀛罐、瀛機及び製粉機械の据  
附に着手し、同年十月、一切の設備を完成し  
て、營業を開始するに到りたるが、一方漢口  
支店の工場も、亦同年末落成し、同時に開業



の運びとなれり、斯くて東京工場は壹晝夜七 會を開き、金貳百五拾萬圓に減資する事に決  
 百パーセント、漢口工場は同六百パーセントの各 定し、内は益々社業の基礎を鞏固にし、外は  
 製造力を發揮し 其製品は續々日 清兩國の市場に  
 上るの盛運を來 たせり、然かく  
 同社の事業は、 悉く豫定通りに 進行せりと雖も  
 翻つて其業績に 鑑むるに、當初 定めたる資本金  
 參百萬圓は、寧ろ多きに過ぐるの點有るを認 生ずるの止むを得ざる事件突發したり、即ち  
 めたるを以て、同四十一年七月、臨時株主總 同年十月十日夜、清國武昌に滅滿興漢を標榜



東亞製粉株式會社取締役會長  
 大橋新太郎氏

する革命の動亂起り、其勢ひ頗る猖獗を極め たり、然れども幸ひにして製粉機械は、別段  
 次いで漢口を攻陥するや、同社漢口支店は、 の損傷無く、事務所並に製品貯藏庫等亦使用  
 此動亂の中心と 爲りたるを以て  
 同月二十日より 操業を休止した  
 るが、越へて十 一月十九日午前  
 三時、革命軍と 清國政府の發せ  
 る討伐軍とが、 同工場を隔て、  
 對戦するに至り 場内の建築物は其十字砲火に罹り、遂に原料 爲めに損害を蒙りたる倉庫其他の復舊工事に  
 倉庫貳棟及び其在庫原料とも、皆灰燼に歸し 着手し、大正元年九月十日、同工事完く竣成



東亞製粉株式會社專務取締役  
 諸井四郎氏



して、茲に舊に倍するの盛觀を呈せり、斯の三社鼎立の姿態を持し、以て斯業界に覇を唱  
如くにして、同工場は東京工場と相俟つて、しつゝあり。  
愈々優良品の製出に力を盡し、日本、日清と尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲所在地 本社(工場を併有す) 東京府南葛飾郡大島町大字下大島  
支社(同) 上) 支那漢口佛租界濼瀾里第壹號地

▲資本 金 金貳百五十拾萬圓

▲拂込資本金額 壹百萬圓

▲株式數及一株の金額 株數五萬株、壹株金五十拾圓

▲各種積立金 金貳萬圓

▲製造力 本社工場(大島町) 一日七百バーレル 合計一日壹千參百バーレル  
支店工場(漢口) 一日六百バーレル

▲敷地及建物坪數 本社(工場を包含す) 敷地坪數壹萬貳千坪、建物坪數壹千九百八拾坪  
支店(同) 上) 壹萬壹千五百參拾壹坪、同 壹千貳百四拾六坪

▲機械の種類 本社工場(大島町) 米國ウルフ會社製  
支店工場(漢口) 同上

▲製品の種類

高砂印、辨天印、福祿印、翁印、ハート印、クラブ印、秋津洲印、地球印

山梨縣若尾民造六、四五〇株、東京府村井吉兵衛三、〇〇〇株、同大橋新  
太郎二、三〇〇株、神奈川縣渡邊福三郎一、五〇〇株、岐阜縣渡邊甚吉一  
二〇〇株、東京府岡野伊三郎一、一九五株、同柿沼谷藏一、〇〇〇株、同  
前田利爲一、〇〇〇株、同菊池長四郎一、〇〇〇株、同池田寅治郎九〇〇  
株、同岡本長三郎八八〇株、同伊藤松五郎八〇〇株、山梨縣若尾惠以八  
〇〇株、東京府村井貞之助七〇〇株、同關谷兵助七〇〇株、同岩永省一  
五〇〇株、同大橋省吾五〇〇株、同大倉喜八郎五〇〇株、同小倉久兵衛  
五〇〇株、同佐竹作太郎五〇〇株、同日比谷平左衛門五〇〇株、同諸井  
四郎五〇〇株、栃木縣津久居彦七五〇株、滋賀縣村田孫五衛門五〇〇  
株、大阪府田附政次郎五〇〇株、東京府川島茂平四九〇株、同上原勝右  
衛門四九〇株、同飯田義一四五〇株、同澁澤榮一四五〇株、神奈川縣若  
尾幾造四五〇株、東京府澤邊四郎四〇〇株、同村井コウ三五〇株、同植  
村澄三郎三五〇株、同大野重三郎三〇〇株、同中野武管三〇〇株、同安  
田善三郎三〇〇株、同馬越恭平三〇〇株、同鈴木梅四郎三〇〇株、神奈  
川縣成毛金次郎三〇〇株、大阪府中橋德五郎三〇〇株

▲大株主氏名及所有株數



▲社長以下役員  
技師長及技師

取締役會長大橋新太郎、專務取締役諸井四郎(本社常勤)常務取締役田村秀光(漢口在勤)取締役池田寅治郎、同柿沼谷藏、同菊池長四郎  
監査役村井吉兵衛、同若尾幾造、同鈴木梅四郎  
技師長永井當清

▲特約販賣店

伊藤芳次郎(東京市日本橋區小網町一丁目)藤井常吉(同區伊勢町)岡野伊三郎(同區通三丁目)増田増藏(東京支店)同區小網町二丁目)田村商會(東京支店)同區西河原)北田仁兵衛(同神田區裏神保町)上原勝右衛門(同區柳原河岸第七號地)八木牧三郎(同芝區通新町)下田惣吉(同四谷區鹽町一丁目)瀧半兵衛(同小石川區餌差町)西山庄治郎(同淺草區材木町)和田木勘七(同本所區松代町)川島茂平(同深川區常盤町一丁目)柴田文介(同横濱市住吉町二丁目)

(三) 株式會社增田製粉所

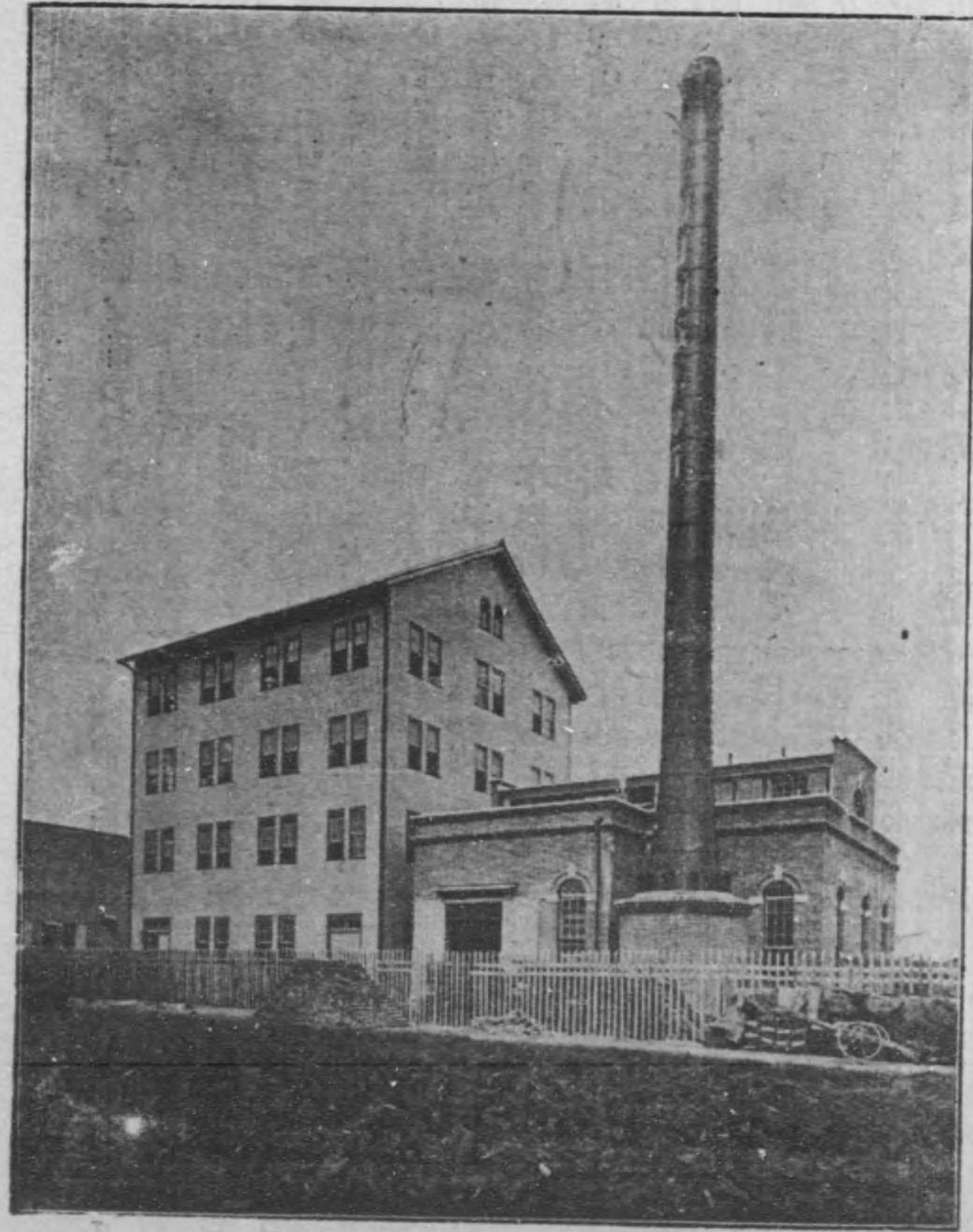
憶ひ起す後醍醐の朝、官賊交戦、貔貅馳突の巷となり、忠烈楠氏の終に芳骨を横たへたる兵庫の地は、爾後幾百の星霜を閲するの間、滄海桑田の變も嘗ならず、當年瀕海の一寒邑は、今や商工連檐の市區に化し、而も接壤の

神戸港と相俟つて、海運至便、且つ鐵路東西に通じて、陸輸快速の利を占むるのみならず、商工業の大都たる大阪市の咽喉として、常に内外百貨を吞吐し、其偉大なる集散力は、關西一帯は勿論、中國四國九州より、遠く朝鮮臺灣及び支那方面を包擁し、加ふるに其市勢

は、歳時を逐ふて、愈々殷盛を極めつゝあり、随つて我が製粉業に在つても、關西に於ける其原料並に製品の集散地として、此地が最も樞要なる地位を占むるの至當なるを認めざるを得ず、宜なる哉、去る明治四十年、三大製粉所の相次いで此處に創設せられ、而も今に及んで、恰も三者鼎足の觀を以て、各其業況の隆旺を極むる事や、即ち其一は日本製粉株式會社兵庫支店、其二は日本精米製粉株式會社、残れる一は、實に爰に記せんとする株式會社增田製粉所にして、彼の兵庫停車場を距る僅に數町程、兵庫運河の竭くる處、是れぞ其所在地たり。

て機會を捉ふるに慧敏なる横濱の巨商増田増藏氏は、將來製粉業の有利事業たる可きを達觀するや、從來糖業界其他に對して、幾百萬圓の大資本を放下し、更に之を運用するに、所謂増田屋一流の巧妙なる商籌を以てし、殆ど縦横調歩の概を持って、各方面に至大の勢力を揮ひ來りしが如く、我が製粉界に於ても、亦其豊富なる資財に依りて、得意の活動を試みんとし、獨力是れが經營を發意したるものに屬す、而して氏は、素常氏の帷幄に參して、敏腕活識、克く各般の劃策を樹案し、世人の目して増田王國の副王と爲せる令弟中村房次郎氏に謀るに、復此事を以てし、起業地の選定其他必要なる諸項に關して、相俱に精調審議の結果、神戸市兵庫を其最適地なりと認定





株式會社增田製粉所

し、直ちに創業準備に着手するに決せり、斯く計畫の確立すると共に、副王中村氏は、同創業事務主宰の重任に當る事となり、先づ其第一着手段として、

工場敷地に豫選したる兵庫東尻池村(兵庫運河掘留)



株式會社增田製粉所取締役長 中村房次郎氏

が、爾來工事並に機械据附等に拾有餘月を費し、翌四十年七月に到り、漸く豫定の設備を成了し、同

の地所買収を開始し、最も秘密に地主と折衝を試み、遂に案外の低價を以て、能く其目的を完ふし、次いで躬自ら米國に渡航して、製粉機械の購入に從事する等、非常の努力を傾注して、専ら準備の進捗に鋭意したり、一方工場の建築は、明治三十九年五月を以て起工せられたる年八月一日始めて製品を發售するの運びとなり、斯の如く壹個年餘の長日子を要し、加ふるに擔任技師が、幾多苦心の餘に成れる建



築物は、流石に増田屋の事業たるに背かず、總て米國製粉所の最新型に則り、殊に其主要部なる製粉工場の如きは、木造五層樓の大建築にして、其設計構造より建築用材に至るまで、悉く米國式に従ひ、例せば極めて短小なる一柱材と雖も、一切米國材を使用したるに見て、亦如何に其建築の堅牢、嶄新及び美觀を期するに於て、用意の周到なるかを察知するに難からず、是れ實に同工場の一大特長にして、獨り同製粉所の誇りとするに足る可きのみならず、理想的製粉工場として、本邦斯業界に於ける夫れの首位を占むるものと謂ふも、恐らく過褒に非ざる可し、又其倉庫は、規模頗る宏大なる二層樓にして、同じく米國式建築法を用ひ、階下には原料を納入し、階上

には製品を貯蔵す可く、尙ほ倉庫出入貨物の爲めに、兵庫停車場構内より鐵道線を引込み、倉庫二階に接続するプラットホームを特設し且つエレベーターの作用を假りて、自在に貨車中に貨物を昇降せしめ、以て其揚陸搬出に便にする等、殆ど設備の完全を盡せり、加之其製粉機械は、中村氏が態々米國に赴き、各製粉會社に就て比較研究の末、直接購買し來りし最新最良のものなるが故に、多くの長所を具有するは勿論、更に是れが運轉操縦を完からしめんが爲めには、斯道に精通せる米國人を技術員に任用し、機械力と人力との調和を圖り、熱心操業に力めたるを以て、其効果空しからず、全所の製品は、米國粉と殆ど同品質の優等品として、市場の聲名を博するに至り

たるが、同四十一年五月に及び、時勢に省慮して、大々の業務の擴張を企圖し、同時に之が適切なる實行方法として、從來増田氏の個人經營なりし同所の組織に變革を加へ、之を内外人協同の株式會社と爲すに決定し、其法定の手續は直ちに運ばれ、茲に資本金五拾萬圓拂込濟の株式會社増田製粉所は成立し、又役員には取締役社長に中村房次郎、取締役に増田増藏、増田與一、マンリー、ハーシユマン、河野啓二、又監査役に増田源次郎の諸氏當選就



株式會社増田製粉所常務取締役河野啓二氏

任し、双互戮力社業に盡瘁したるが、越へて同四十二年三月、外人側は其所有株式の全部を増田系の人士に讓渡し、同社との關係を一切斷絶したり、是に於てか、同社の實權完く増田王國の掌握する所となり、續いて株主總會を開き、役員の改選を行ひ、前取締役河野啓二氏を新に常務取締役に擧げ、着々社務の改善刷新を行ふと共に壹晝夜壹千バーレル製造の全能力を發揮し、製品の供給に餘力を殆さゝりしを以て、爾來業況頓に舊に倍するの盛觀を呈し、毎期利益



配當率の如き亦頗る好良なるが、而も同社は更に發展の歩みを進めつゝあり。決して現在に満足するの態無く、歩武堂々、尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲所在地 本社 社(工場を併有す) 神戸市兵庫東尻池村(兵庫運河留)

▲資本金額 金五拾萬圓

▲拂込済資本金額 金五拾萬圓

▲株式數及一株の金額 株數五千株、壹株金壹百圓

▲各種積立金 金七萬圓

▲製造力 一日 壹千バレル

▲敷地及建物坪數 敷地坪數(工場を包含す)壹萬五千坪 建物坪數(同上)七百坪

▲機械の種類 米國ウルフ會社製

▲製品の種類 **ベスト印、青ベスト印、三エム印、青エム印、ゴールド印、二エム印、寶袋印**

▲大株主氏名 神奈川縣增田増藏二、〇一〇株、同中村房次郎七、一〇〇株、同原富太郎五〇〇株、兵庫縣湯淺竹之助五〇〇株、神奈川縣茂木保平五〇〇株、同邊信藏三〇〇株

▲社長以下役員 取締役社長中村房次郎、常務取締役河野啓二、取締役大濱忠三郎、同増田増藏、同増田與一  
技師長及技師 監查役渡邊文七、同湯淺竹之助  
技師長ストロング

▲特約販賣店 增田増藏大阪支店(大阪市南區安堂寺橋通二丁目界筋) 同神戸支店(神戸市榮町四丁目) 湯淺竹之助(同市同町三丁目)

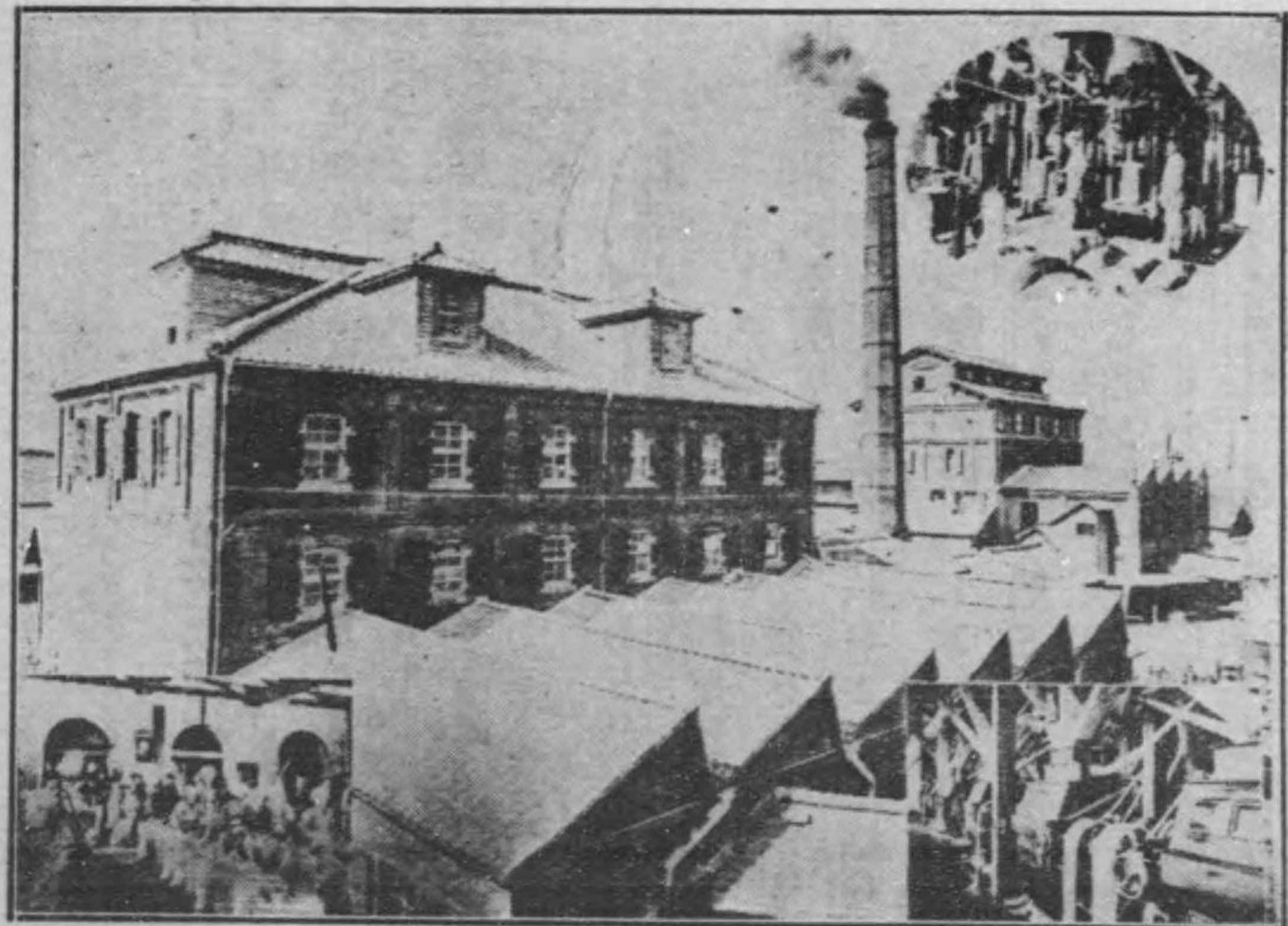
(ホ) 日本製粉株式會社

凡そ有利多望なる製産事業の一として、機械製粉業を擧ぐるの一般に異論非ざる所なると共に、斯業を經營して常に優良なる業績を獲んと欲せば、事業の性質上、個人と會社との孰れに論無く、之を專業として經營するの至當なるは、殆ど斯業界に於ける定論なるが、殊に我國の如きは、製粉主一の原料たる小麦の産額豊富ならず、其品質亦精良を缺くの憾

みあるを以て、或は内地産小麦の聚收に頗る困難を感じ、或は外國産小麦の輸入に多大の勞費を要する等、絶へず原料難を懸ふ可き實狀有るの地域なるに觀て、此定論を一層的確に承認せざるを得ず、故に我が機械製粉所は、始ご其全數を通じて、皆專業經營の方針を執りて創業し、爾來全力を傾けて之に従ひ、今猶ほ方針を渝へず、益々精勉努力しつゝ在り、勿論一二除外例の存する在りて、倉庫業等を



兼營するもの有りと雖も、是等は寧ろ言議に値ひするに足らざるなり、斯の如く、現在各機械製粉所の絶對的專業なる中に在りて、獨り日本精米製粉株式會社のみは、超然として其圏外に立ち、舊來經營し來りし精米事業に兼ぬるに、新に製粉業を開始し、以て斯業界に一新異例を提供し、而も兩業孰れも成績良好にして、恰も雙壁光り



日本精米製粉株式會社

燦たるが如き現状なるに到つては、洵に上叙定論の範圍外に逸せる奇蹟的成功と謂ふ可し。抑も同社は、過ぐる明治十九年の交、精米業を專營するの目的を以て、神戸市兵庫今在家町參番地に創設せられ、當時社名を單に日本精米株式會社と稱したるが、其規模の壯大に加ふるに經營の宜しきに適ひたるを以て、同社精白米の聲聞は、早くも海の内外に馳せ、内

地販賣額の多大なるは勿論、年々歐米各國への輸出高を増進し、更に明治二十七八年及び三十七八年の兩戰役を好機會として、長足の發展を遂げ、晝夜の精白高貳千石を超へ、所屬倉庫の收容力亦七萬石の多きを有し、實に本邦精米業者中の頭位を占めたり、然るに同社の當事者は、日露國交克復後に於ける帝國の形勢に鑑み、精米業を專營するよりも、寧ろ製粉事業と之を兼營するの有利なるを認め、直ちに其計畫に着手し、續いて明治三十九年の春、愈々從來精米業に投下せる資本金四拾萬圓を貳拾萬圓に半減し、其一半即ち金貳拾萬圓を斯業の元資に轉用するに決するや、時を移さず米國最新式の製粉機械購入の手續を運び、又其工場には精米工場の一部を充用し、

同四十年五月中旬、晝夜貳百五拾バーレルの製造力を以て製造を開始し、良質の製品を發賣するに至りたるが、其後一層製品の改善に意を用ひたるの結果、販路大いに擴まり、業況漸次熾盛の域に入りたり、同社が新奇破格の兼營法に出でたるにも拘らず、斯る好成绩を挙げ得たるは、畢竟當時經營の任に當れる永見吉明、町野良直、武岡豊太、巽市郎諸氏の功に歸す可し、越へて同四十三年四月株主總會を開き、社業の刷新發展策として(一)精米製粉兼營の事實を具體的に表明せんが爲めに社名を日本精米製粉株式會社と改稱する事(二)工場原動力及び製造能力を増加する事の二件を議決すると同時に、斯業界の人傑として、將又海外貿易業者として、財力名望兼備





日本精米製粉株式會社取締役社長  
田村新吉氏

せる田村新吉氏を取締役社長に推薦したり、此總會の結果、同社長に就任せる田村氏は、些の躊躇無く、其雄偉なる手腕を揮ふ可く決意し、先づ從來の資本金（貳拾萬圓）を拾五萬圓に減額し、續いて社業に大なる改革を加へたるを以て、其面目頓に一新せると俱に、製産竝に販賣の實權、二つながら氏の掌裡に

歸したるが、尙ほ氏と同時に、取締役に就任したる秋山斧助氏は社長を補佐して、拮据經營に努めたるに因り、社運隆々乎として向上し、遂に倉庫業をも開始するに到れり、從つて前期の如きは、多額の利益を贏得し、更に前途多望の觀あるは、洵に兩氏の功績と謂ふ可し。尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲所在地 本社 社（工場を併有す）神戸市兵庫今在家町參番地

▲資本金 額 金拾五萬圓

▲拂込濟資本金額 金拾五萬圓

▲株式數 及 株數參千株 壹株金五拾圓

▲製造力 一日 四百石

▲敷地及建物坪數 敷地坪數（精米製粉工場を包含す）六千坪 建物坪數（同上）貳千壹百五拾壹坪



▲機械の種類 米國ウルフ會社製

▲製品の種類 青矢印、赤矢印、コマ印、青玉印、赤玉印、三玉印、赤四ツ目印、青王冠印、赤王冠印

▲大株主氏名 兵庫縣田村新吉一、〇〇〇株、大阪府志方勢七五〇〇株、兵庫縣町野良及所有株數 直四九二株、同永見吉明三九八株、同秋山斧助三〇〇株、同麥少彭三〇〇株

▲社長以下役員 取締役社長田村新吉、取締役秋山斧助、同町野良直

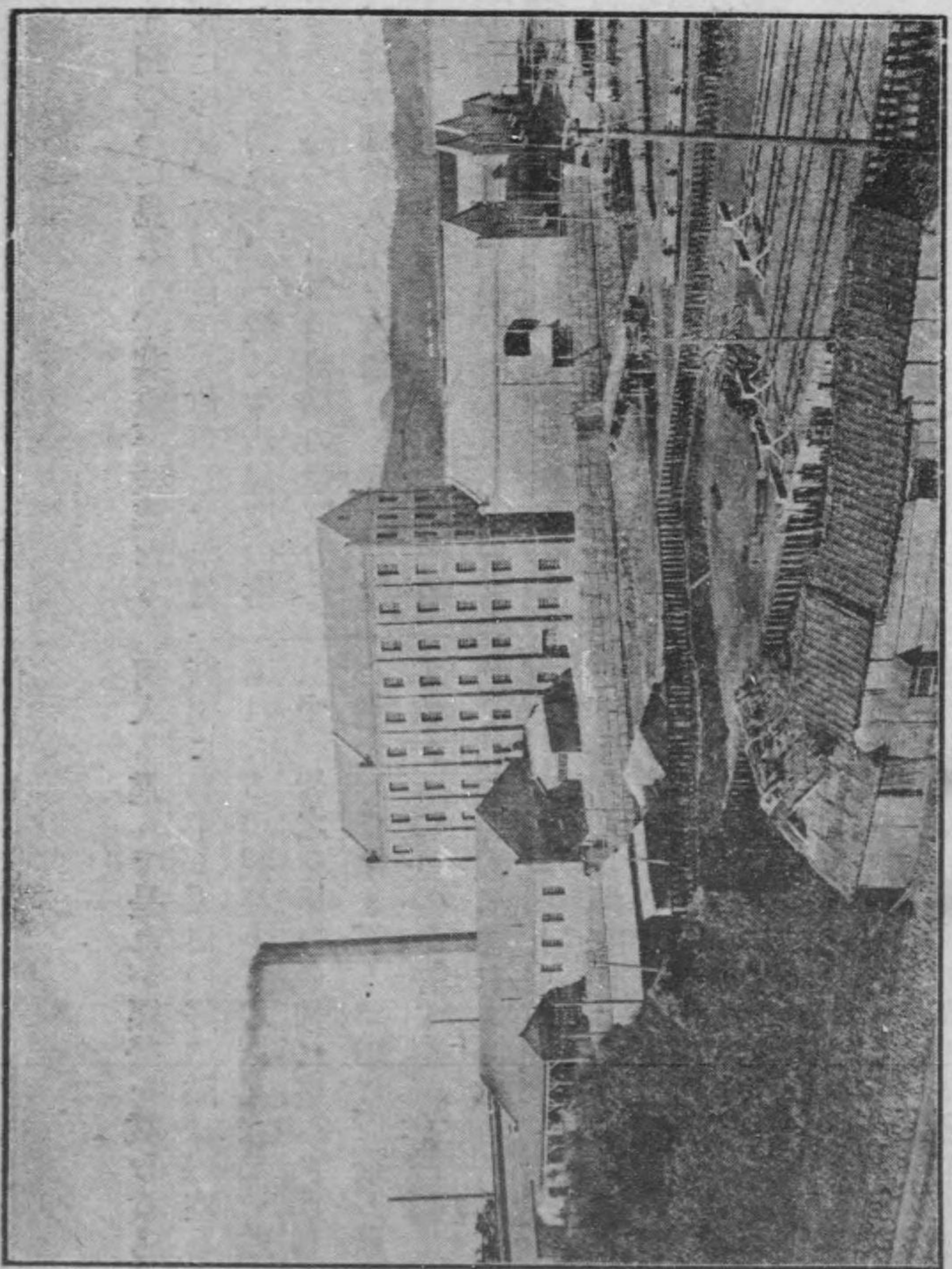
▲特約販賣店 田村商會(神戸市榮町三丁目)同商會東京支店(東京市日本橋區西河岸第十三號地)同濱支店(横濱市港町一丁目)

(へ) 株式會社大里製粉所

我が九州の地勢は、山嶽平野相錯綜し、全土を擧げて農作地と言ふ能はざるも、地味概ね膏腴にして、到る處沃土に乏しからざるを以て、耕耘の業頗る發達し、各種の農産物に富めり、殊に小麥の如きは、其品質頗る佳良の名あるのみならず、産額亦地積に比して饒多なるが故に、若し小麥を原料とする製産業を此地に起すに於ては、比較的廉價を以て、容易に多量の原料を收得し、作業經濟上鮮少なからざる利益を得可く、又製品の販路としては、

單に之を九州のみに見るも、其重要産業たる鑛業の殷盛に伴ひ、富力自から伸殖し、土着人と外來者とを問はず、一般に生活程度の裕かなる者多く、随つて日常消費品の購買力に到つては、寧ろ都會人士を凌駕せん底に昂進し居れるを以て、顧客を此處に需めて、常に多大の供給を爲すの極めて易々たる可し、況んや、四面環海、門司、長崎、博多等數多の良港灣を有し、内外の船舶四時輻湊するを以て、或は原料の缺乏其他の事情に因り、之を他地方よりの輸入に仰ぎ、或は製品を各地に輸出するの場合に際し、運漕至便なるの特長有るに於てをや、然れば上叙の理由に基き、此地には夙に大規模なる機械製粉業の起る可くして、而も未だ機運の熟せざりしに由つてか、何人も進んで是れが經營を試むるもの無く、斯業に對する天與の好地點は、空しく委棄せられたるの觀在りて、斯業家と一般人とを頗たす、皆之を惜むの情に堪へざりしが、刻々に進歩して歇まざる時勢は、斯る状態の決して久しきに亘るを許す事無く、**糖**て一大製粉所を門司港頭に生れしめたり、**株式會社大里製粉所**即ち是なり。抑も多年の輿望に添ふ可く、希望に滿ちたる九州の天地に、呱呱の聲を揚げたる同社は、神戸の大賈**鈴木商店**が、時代の趨勢を察し、自から主腦者と成りて、之を創設したるものに屬す、元來同店は衆の知るが如く、曩に大里製糖所を經營して、忽ち糖業界に盛名を馳せ、爾後更に臺灣に於ける製糖事業に巨資を





株式會社大里製粉所

放下し、而も單り其富力に於て、多數實業家の群を援けるのみならず、或る特種の勢力を財界に扶植し、且つ高級店員に活眼辣腕の士を有する等の點に於て、最も有力なる企業家の資格を具備せり、従つて他に先んじて、九州に製粉業の新營を企圖するが如きは、蓋し適者が適業を適地に營むものと謂ふ可し、却説同店に於ては、愈々斯業經營の計畫熟すると共に、株式會社を組織して、之を實行するに決し、其株式の大多數は、勿論自家にて引受け、其他の株主には、同店直系の人士を充つる事とし、即ち形式は株式會社なりと雖も、其實質に到つては、同店一個の事業と殆ど何の異なる所無きの方法を執り、遂に資本金六拾萬圓拂込濟の株式會社大里製粉所を設立したり

時維れ明治四十三年末なりしが、越へて同十四年の春、豫ねて本社並に工場敷地に選定せる福岡縣企救郡大里町參千九百貳拾八番地(司門市外)に、工場其他建造物の工事を起し力めて工程を急ぎたるを以て、同年秋季大半落成し、續いて壹晝夜壹千六百バレルの製造能力を有する製粉機械の据附に着手したるが、翌四十五年一月、全く一切の設施を了し、直ちに優秀なる製品を製出し、其發賣披露の爲めに、同年二月下旬、下關春帆樓に盛宴を張り、武者振り勇ましく、斯業界に初陣を布きたり、爾後同社は、新進氣鋭の態度を以て、九州一帯は言ふに及ばず、海運自在の地の利に乗じ、本州各地より臺灣並に朝鮮等に到るまで、販路の開擴に全力を傾注したるを以て、



着々堅實なる地盤を占有し、爲めに創業日尙  
は淺きに關せず、製品の賣行頗る多額に達し、  
今や大里製粉の名聲は、到る處に喧傳せられ、  
前途の發展亦容易に窺測し難きの盛況を呈し  
つゝあり。  
尙ほ同社の内容を擧ぐれば左の如し。

▲所 在 地 本 社(工場を併有す)福岡縣企救郡大里町參千九百貳拾八番地(門司市外)

▲資 本 金 額 金六拾萬圓

▲拂込濟資本金額 金六拾萬圓

▲株式數及 株數六千株、壹株金壹百圓

▲製 造 力 一日 壹千六百バール

▲敷地及建物坪數 敷地坪數(工場を包含す)五千坪 建物坪數(同上)貳千七百坪

▲機 械 種 類 米國ウルフ會社製

▲製品の種類 赤ダイヤ印、二重橋印、綠ダイヤ印、日の出印、黃ダイヤ印、日本橋印  
こま印

▲大株主氏名 鈴木岩次郎、金子直吉、柳田富士松、西川文藏、谷治之助、西岡貞太郎  
宮本政次郎、森衆郎、小松道彌

▲社長以下役員  
技師長及技師

專務取締役谷治之助、取締役柳田富士松、同宮本政次郎、同森衆郎  
監査役西岡貞太郎、同小松道彌  
支配人淺田泉次郎

技師長米田龍平、技師野村貞、同山田孫一郎、同吉岡豊

▲特約販賣店

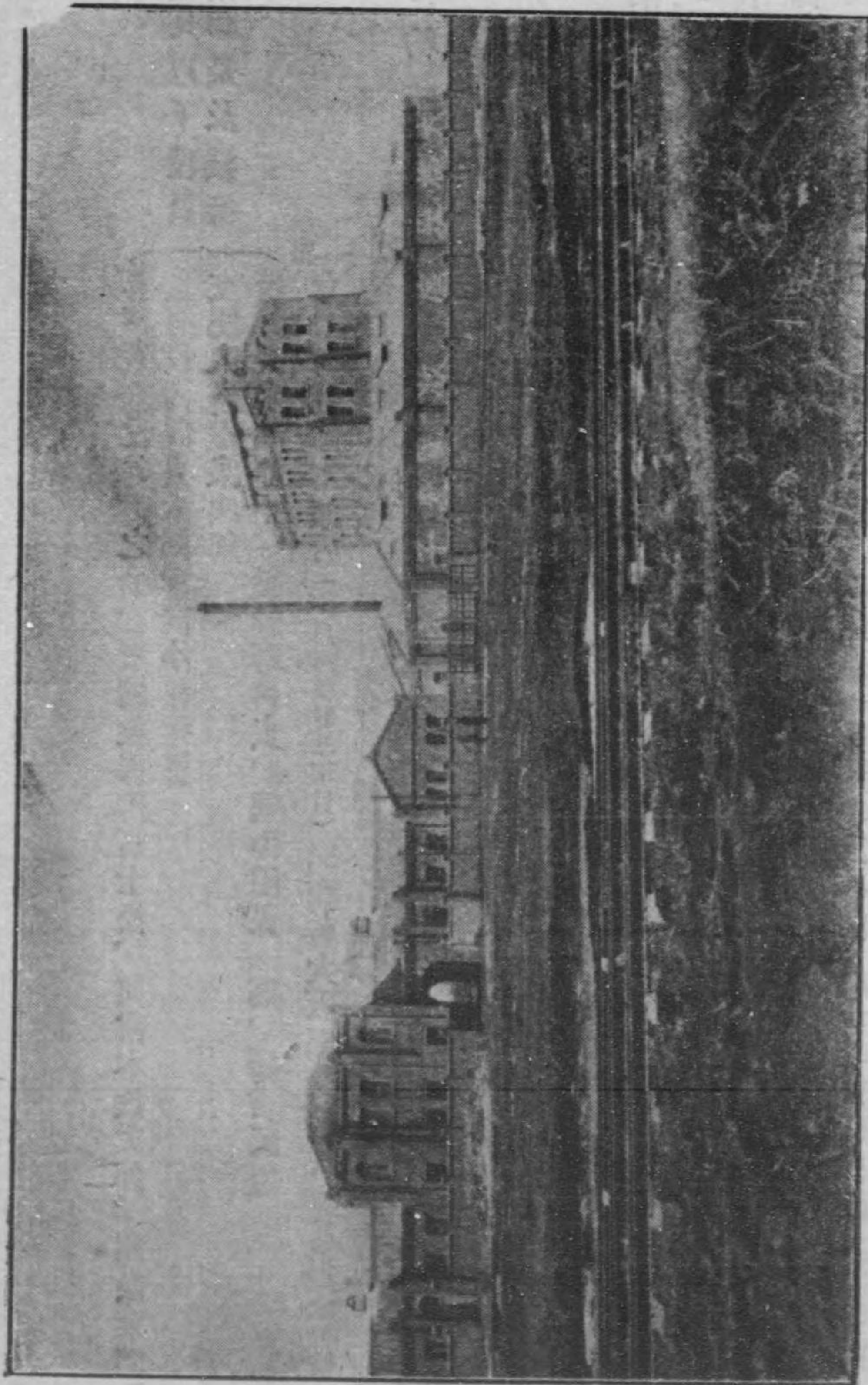
合名會社鈴木商店(神戸市榮町三丁目)同商店大阪出張所(大阪市南區末吉橋通二丁  
目)同東京出張所(東京市日本橋區小網町二丁目)同名古屋出張所(名古屋市中區町二丁  
目)同小樽支店(北海道小樽區堺町廿番地)同函館支店(同函館區大町一丁目)同門司支  
店(門司市外大里町)同臺南出張所(臺灣臺南內新街一七六四)同上海支店(支那上海廣  
東路第十五號)同香港支店(同香港)同大連支店(同大連市紀伊町)

(ト) 滿洲製粉株式會社

明治三十七八年戰役後、意氣鬱勃たる我が國  
民が、戰捷の餘威に乘じ、支那大陸に向つて  
發展を試み、或は各種の利權を獲得し、或は  
富源の開發を目的として、諸般の事業を經營  
したるもの頗る多く、現に我が製粉業の如き  
も、亦其例に漏れずして、一は支那本部に、一

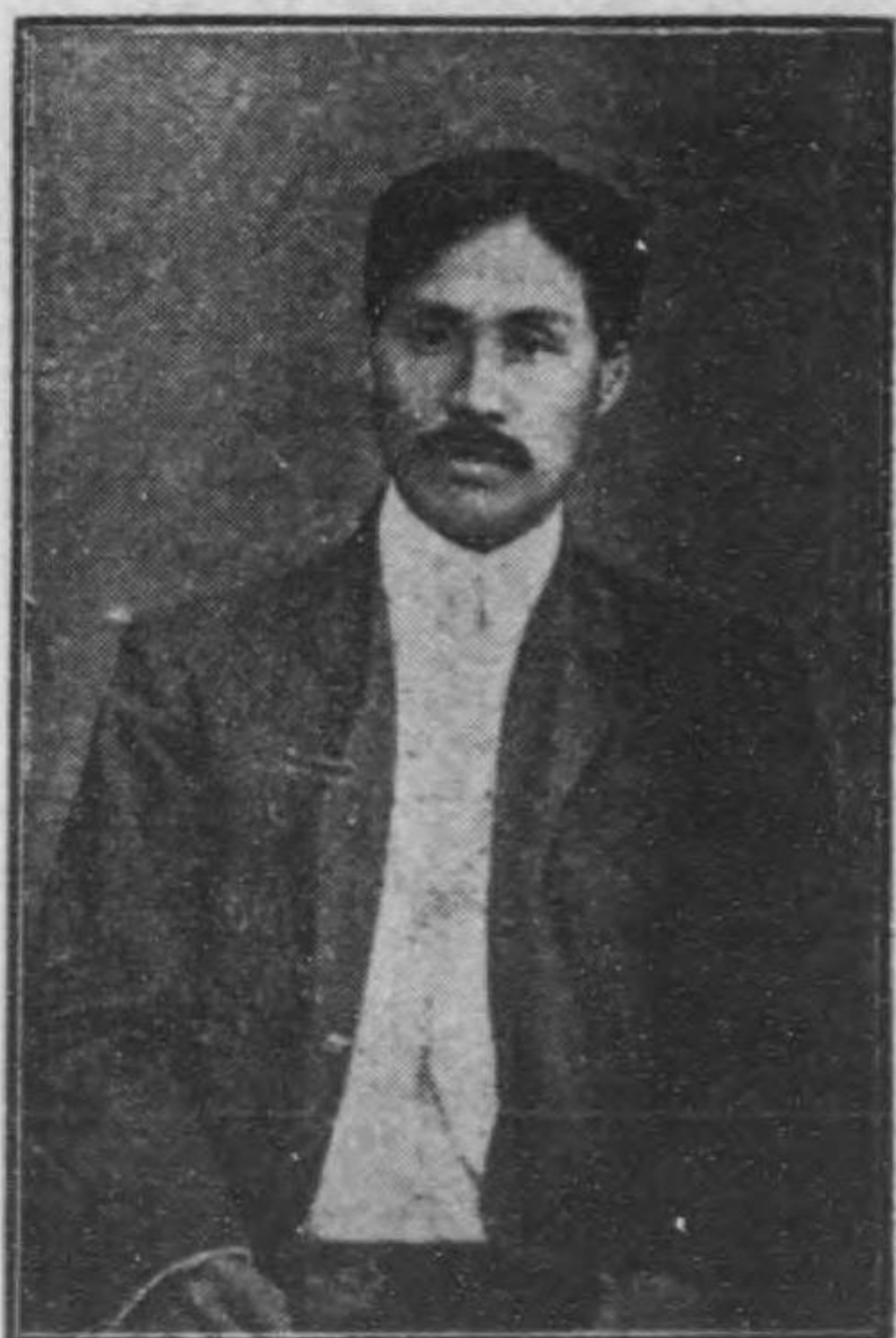
は滿洲に起りたるが、他の事業の成功せるも  
の少きに反し、獨り斯業のみは、兩者俱に毫も  
蹉跌失敗の跡無く、歲月を趁ふて業況愈々隆  
昌を來たし、邦人の大陸的能力を遺憾無く發  
揮し、優に少數成功者の班に入れるは、洵に斯  
業界の爲めに、萬丈の光輝を放つものにして、  
其偉績深く賞讃す可し、則ち前者は東亞製粉





株式會社漢口支店にして、後者は鐵嶺に於ける滿洲製粉株式會社たり、而も東亞に就ては既に詳悉したるを以て、茲には専ら後者に關して、録する所有らんとす。

抑も同社は、去る明治三十九年、戰後經營の叫聲、恰も天來の福音の如く、全國を風靡しつつあるの際、京濱兩地の有力なる實業家が深謀凝議の結果、資本金壹百萬圓を以て、之を創始するに決し、先づ其四分の一に相當する貳拾五萬圓の株金拂込を了ると同時に、役員



滿洲製粉株式會社常務取締役 中井國太郎氏

取締役に中井國太郎、取締役に佐久間福太郎、濱政弘、安部幸之助、染谷濱七、又監査役に岩崎清七、淡中孝八郎の諸氏當選就任し、會社の全く成立を告げたるに依り直ちに事業を進行する事と成り、同四十年七月中旬、鐵嶺工場の工事を起し、同年十二月下旬其工を終り、續いて製粉機械の据附に着手したるが、越へて同四十一年五月に到り、悉く豫定の設備を完成し、壹晝夜四百バーレルの製造力を以て製造を開始し、從來米國小麥粉若くは哈爾濱附近に於て製出せらるゝ露國式小麥粉の勢力範圍に對して、侵襲



的態度を以て、盛んに品質良美なる製品の供給を試み、努力到らざる處無かりしを以て、販路日に月に増大し、當初の資本金を以てしては、到底充分なる活動を爲すの不可能なるを感じたるに因り、株主總會に諮りて、更に第貳回の株金(貳拾萬圓)拂込を決定して、資力を増加すると共に、役員の改選を行ひ、吉村鐵之助氏を取締役社長に擧げたるが、其後間もなく、工場を擴張し、併せて長春市東五條街に出張所を新設し、益々事業を發展したるの結果、現今に於ては、其製造力壹晝夜八百パーレル

に増進したるが、同社は尙ほ之に甘んずるの色無く、長春の出張所に支工場を設立するに決し、既に其工事に着手し、遅くも大正三年初春には、竣功す可き豫定なれば、其成ると共に製造力は、今に倍蓰するの盛觀を呈すべきは必然にして、従つて滿洲の地より他國粉を全く驅逐し去り、南滿鐵道沿線地に於ける邦人の事業として、最も優勢なる位置を占め、更に其聲譽を高むるの日、亦決して遠き將來に非ざる可し。

尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

- ▲所在地 本社(工場を併有す)支那鐵嶺(南滿洲鐵道株式會社附屬地) 出張所 東京市京橋區銀座三丁目 支那長春市東五條街
- ▲資本金額 金壹百萬圓

▲拂込資本金額 金四拾五萬圓

▲株式數及一株の金額 株數貳萬株、壹株金五拾圓

▲各種積立金 金七萬圓

▲製造力 一日 八百パーレル

▲敷地及建物坪數 本社(工場を包含す)敷地五千坪 建物坪數(同上)八百參拾坪

▲機械の種類 米國ウルフ會社製

▲製品の種類 一等黃龍印、二等紅龍印、三等黑龍印、四等青龍印

▲大株主氏名及所有株數

神奈川縣安部幸兵衛一、六六三株、支那天津加藤定吉一、一〇〇株、東京府岩崎清七九五五株、同中井國太郎八〇〇株、同吉村鐵之助六〇〇株、兵庫縣吳錦堂五〇〇株、神奈川縣安部幸之助五〇〇株、東京府佐久間イキ五〇〇株、神川奈縣エフ・ジェー・ライアス四五〇株、東京府佐久間心一郎四三八株、神奈川縣神山喜一郎四〇〇株、新潟縣齊藤合資會社齊藤喜十郎四〇〇株、東京府佐久間梅雄四〇〇株、茨城縣岩崎龜次郎三二六株、東京府鈴木安兵衛三〇〇株、新潟縣川村隆太郎三〇〇株、東京府染谷濱七三〇〇株、神奈川縣山田駒吉三〇〇株



▲社長以下役員  
技師長及技師

取締役社長吉村鐵之助、常務取締役中井國太郎、取締役安部幸之助、同  
染谷濱七、同岩崎清七  
監査役淡中孝八郎、同田邊熊一  
相談役濱本義顯、同吳錦堂  
技師小澤武之助

▲特約販賣店 三井物産株式會社滿洲各支店

(チ) 朝日製粉株式會社

桓武帝の定都以來、明治維新に至るの間、王  
城の地たりし京都是、山紫水明、今猶ほ晴昔  
の美觀を更めず、四時の風光麗婉を極むるを  
以て、觀光行樂の名境として、眞に帝國一の稱  
有るに背かざるも、亦其一面に在つては、工業  
地たるに適するの要素を具ふるもの、如し、  
現に西陣織、加茂川染、清水燒等の諸産業の  
旺盛なるに徴して、其然る所以を諒知するに

足る可く、而も是等の諸工業が、漸次手工的境  
遇を脱し、機械的工作に進歩するの形勢に想  
到せば、京都に於て製産事業を起すの太だ好  
適なるを認めざるを得ざる可し、然れば此地  
に、朝日製粉株式會社の起りたる、豈に夫れ  
偶然ならんや。  
抑も同社は、過ぐる明治三十九年八月、鳥越  
貞敏、熊田源太郎、原吉徳、鳥越密三郎諸氏  
が發企人と成り、資本金五拾萬圓を以て、株

式の募集を發表したるものなるが、時恰も財  
界の不振に陥りたるが爲めに、其企劃亦意の  
如く進捗せざ  
りしも、遂に  
同四十一年四  
月、株金の第  
壹回拂込(拾  
貳萬五千圓)  
を了し、同時  
に役員の選舉  
を行ひ、鳥越  
貞敏氏取締役  
社長の任に就  
くに決し、全く其設立を告ぐるに到れり、而し  
て同社は、工場敷地を京都府葛野郡大内村大



朝日製粉株式會社取締役社長  
鳥越貞敏氏

字大内(京都市七條千本東に入る)に遷し、直  
ちに工場の建築に着手し、其成ると共に、製粉  
機械を据附け、  
壹晝夜壹百パー  
セントの製造力を  
以て製造を開始  
し、業務豫期の  
如く進行したる  
が、爾後役員間  
に一二の匪違者  
を生じ、一時社  
業の頓挫を見る  
の止むを得ざる  
に至りたるも、頓て之を一掃し去りたるに由  
り、雨降つて地固まるこの俚語の如く、之が



爲めに却つて同社の基礎を堅ふし、次いで株金の第貳回以下の拂込を續行したるを以て、今や資本金拂込済總額參拾七萬五千圓に達し壹晝夜貳百五拾石の製造力を發揮し得るの盛況を現示せるが、尙ほ同社に就て特記す可きは、社長鳥越貞敏氏の同社株式の壹萬株に對して、五千四百六十五株を所有し、實に絶對

過半数を占むるの一事にして、即ち形式は株式會社なりと雖も、其殺活の實權は、全く氏の手裡に屬し、之を氏一個の事業と謂ふも、強ち失當の評に非ざる可く、隨つて將來同社の發展は、一に氏の努力に俟たざる可からざるなり。

尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

- ▲所 在 地 本 社(工場を併有す)京都府葛野郡大内村大字大内(京都市七條千本東に入る)
- ▲資 本 金 額 金五拾萬圓
- ▲拂込済資本金額 金參拾七萬五千圓
- ▲株式數及一株の金額 株數壹萬株、壹株金五拾圓
- ▲製 造 力 一日 貳百五十石
- ▲敷地及建物坪數 敷地坪數(工場を包含す)壹千六百坪 建物坪數(同上)四百五十坪
- ▲機械の種類 米國ウルフ會社製

▲製品の種類 騎兵印、水兵印、砲兵印、歩兵印

▲大株主氏名 福岡縣鳥越貞敏五、四六五株、石川縣熊田源太郎一、〇〇〇株、福岡縣國友重誼六七〇株、同鳥越寧六〇〇株、同原吉徳五〇〇株

▲社長以下役員 取締役社長鳥越貞敏、取締役鳥越密三郎、同國友重誼  
監查役原吉徳

▲特約販賣店 湯淺竹之助(神戸市榮町三丁目)

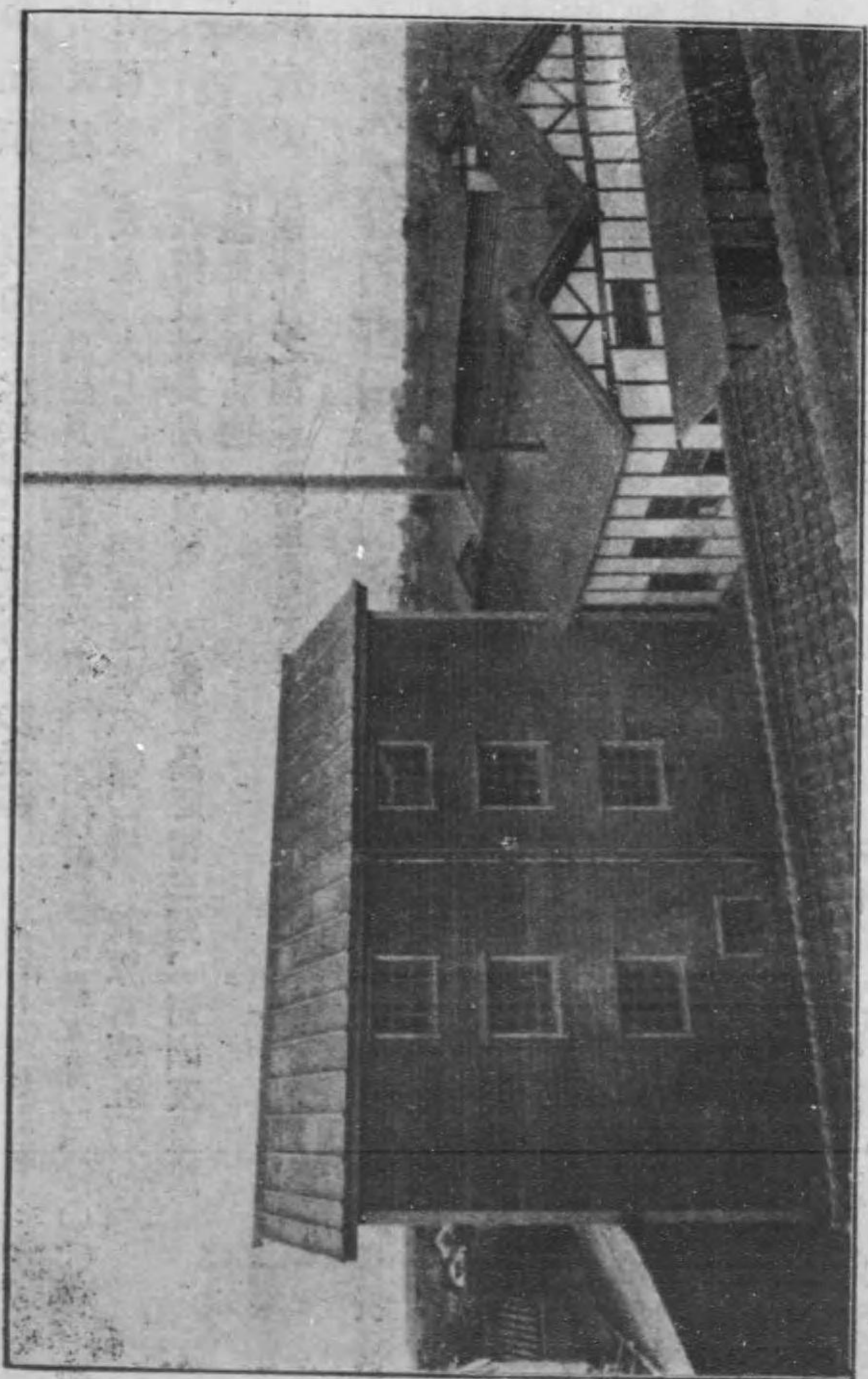
(リ) 株式會社名古屋製粉所

人情風俗の各地皆同じからざるが如く、南人の嗜好物、必ずしも北人の愛賞を博し難く、殊に飲食物の如き日常消費品に在つては、殊に然るの觀あるを以て、是等物質の製産並に販賣業を營むに當つては、此間の消息を精解して、製品供給の途に出づるの切要なるは、蓋し言を俟たざる所なる可し、従つて或る地方に於ける必需品を現に其地に製産して、直

ちに販賣するの至適にして、勞費の尠きに反し、多大の利益を收め得可きや必せり、此點に於て株式會社名古屋製粉所は、儘に成功せるものと言ふに憚らず。

抑も海道一の大市名古屋を中心とし、尾張地方は、古來麵類を愛喫するの習俗を存じ、殊に饅飩は、常食と間食とを問はず、其最も好める所なるを以て、是れが原料に使用する小麦粉の多額なるは、頗る驚く可きもの有るの





同製粉

同製粉

みならず、時運の進歩と人口の増殖とに伴ひ、其需要は益々増進するの傾向を示せり、是に於てか、機敏なる同市の有力家は、機械製粉業を起して、其製品を同地方に販售するの多利有望なるを認め、遂に資本金七萬五千圓を以て、株式會社名古屋製粉所を設立したるが、

其事業の土地に適したると經營の堅實なるとに由り、社業大いに發展したるが、而も同社は製品の改善を圖るに汲々たるを以て、前進幾層の進境を睹るに到る可きは、決して疑ひを容れざるなり。

▲所 在 地 本 社(工場を併有す)名古屋市西區鹽町貳丁目參番地ノ七號 尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲資 本 金 額 金七萬五千圓

▲拂込濟資本金額 金六萬七千五百圓

▲株式の數 及 株數壹千五百株、壹株金五拾圓

▲各種積立金 金四千圓

▲製 造 力 一日 壹百パーレル

▲敷地及建物坪數 敷地坪數(工場を包含す)六百六拾七坪 建物坪數(同上)貳百八拾六坪

▲機械の種類 米國アリス・チャーマン會社製

株式會社名古屋製粉所







業況益々好良に向ひ、製造力の不足を告げた。資本金拾萬圓拂込済の札幌製粉株式會社新に  
 成り、茲に該工場は、新舊併せて同社の買収  
 する所と成り、斯る事情の下に、同社は忽ち  
 にして斯業界に調歩し得る事と成り、續いて  
 翌五月には、豫ねて買収の際、工事中に屬した  
 る舊機械の移設を了り、愈々事業の進展に努  
 めたるの結果、業況頗る旺昌を呈し、資力の不  
 足を感じたるが故に、金拾五萬圓拂込の増資  
 を決行し、今や斯業界に於ける北方の雄鎮と  
 して、大いに勢力を揮ひつゝあり。

▲所 在 地 本 社(工場を併有す)北海道札幌區北六條西七丁目貳番地  
 ▲資 本 金 額 金貳拾五萬圓  
 ▲拂込済資本金額 金貳拾五萬圓

も、未だ其竣功せざる同年四月に當り、恰も 尙は同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲株式數及 株數貳千五百株、壹株金壹百圓  
 ▲一 株 の 金 額  
 ▲製 造 力 一日 貳百石  
 ▲敷地及建物坪數 敷地坪數(工場を包含す)貳千九百八拾七坪 建物坪數同上六百拾七坪  
 ▲機 械 の 種 類 米國ノイー會社製  
 ▲製 品 の 種 類 白星印、赤星印、國旗印  
 ▲大 株 主 氏 名 永田巖、谷七太郎、内藤兼備、金子元三郎、三村龜太郎、植村澄三郎、  
 鈴木元治  
 ▲社 長 以 下 役 員 取締役社長永田巖、取締役谷七太郎、同内藤兼備  
 監査役三村龜太郎、同鈴木元治  
 ▲特 約 販 賣 店 古谷辰四郎(北海道札幌區南一條西二丁目)目貫商店(同函館區末廣町)伊藤商店(同區  
 地蔵町)酒谷商店(同區西濱町)小瀧商店(同小樽區色内町)松川商店(同町)市村龜松  
 (同旭川町四條通八丁目)鈴木商店(同町一條通八丁目)橋本信吉(同町一條通九丁目)釧路  
 麥粉砂糖同盟組合(同釧路町)横内忠作(青森市濱町)宮本長吉(秋田市大工町)岡田  
 喜助(盛岡市肴町)五十嵐忠治(新潟市上大川町)



(ル) 松本製粉所

東京附近に於ける個人經營の機械製粉所として、夙に斯業界に聲名を博せるは、實に埼玉縣大里郡熊谷町字石原に在る松本製粉所なり。同所は同町の米穀肥料商松本平藏氏が、明治三十九年十二月、其豊裕なる資財の一部を割き、埼玉製粉合資會社を買収して、其事業を承継し、爾來米穀肥料の主要と共に、之を兼營せるものに屬し、買収後着々從來の規模に改善を加へ、業務



松本製粉所

の發達を圖りたるを以て今や壹晝夜貳百バーレル製造の全能力を傾け、製品の製出に努むれども、其主業の關係よりして、埼玉、群馬、長野、新潟の各縣を通じて、他の容易に推想し難き種々の方面に於て、廣大なる販路を有するが故に、常に供給足らざるの盛況を示し、前途の發展亦豫想するに難からざるなり。尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲所在地 埼玉縣大里郡熊谷町字石原

▲製造力 一日 貳百バーレル

▲機械の種類 米國ノーターク・マーモン會社製

▲製品の種類 鳥印、鹿印、象印、バラ印、櫻印

▲所主及従業員 所主松本平藏、業務主擔者松本眞平

▲特約販賣店

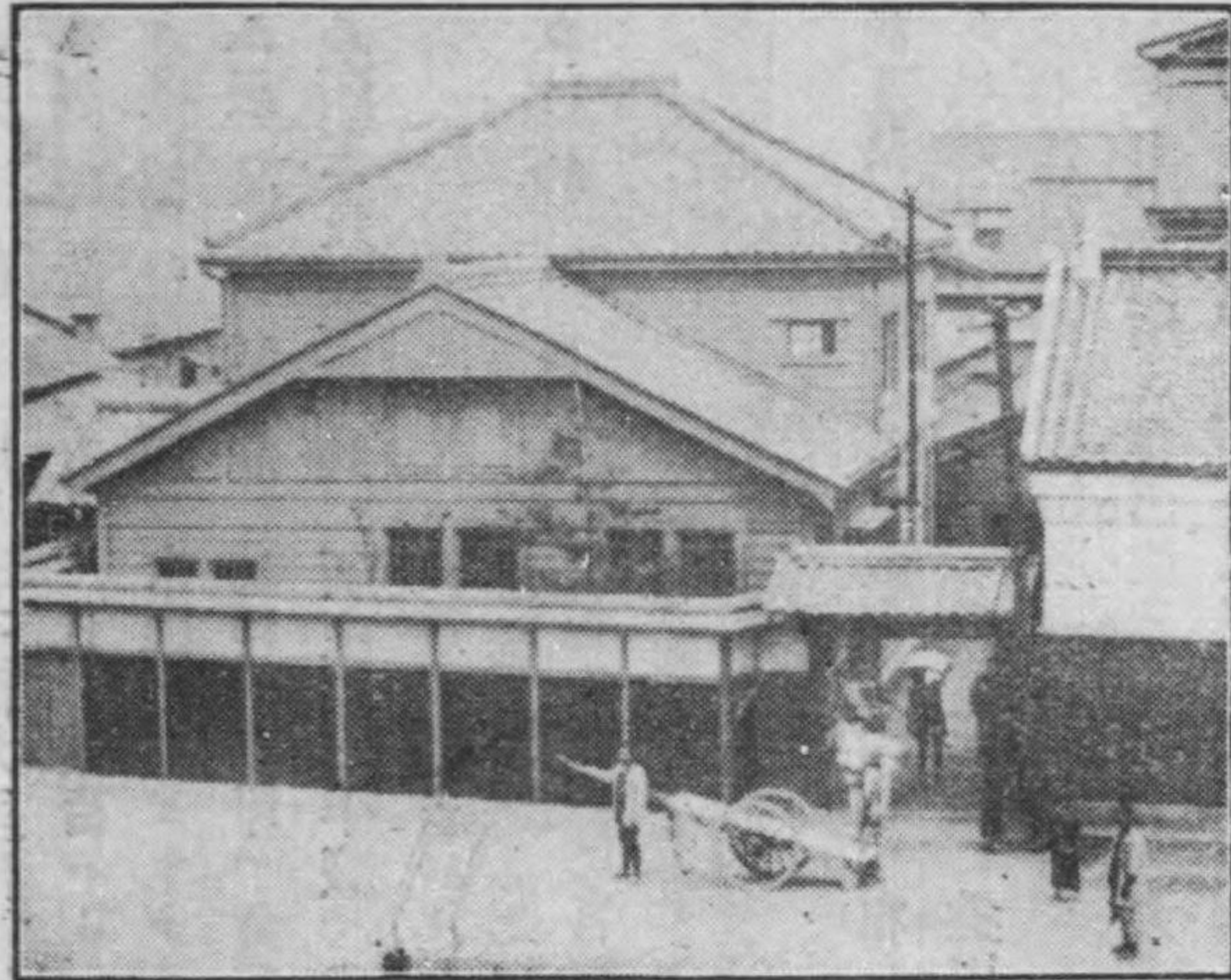
渡邊與吉(高崎市) 北村準之助(長野市) 諏訪部淺太郎(同) 松本富吉(同) 原八藏(同) 鈴木孫一郎(松本市) 酢重商店(長野縣小諸町) 若林恒太郎(同) 屋代町三九屋三代吉(同) 飯田町宮崎萬平(同) 篠ノ井驛府川衆次郎(埼玉縣桶川町) 宮崎長八(新潟縣直江津町) 寒川長吉(長岡市) 加藤調次(高田市)

(ヲ) 益田製粉所

商工業の都府たる大阪市に關し、苟くも多少の智識を有する人にして、此處に益田製粉所なる有力の機械製粉所の在るを知らざるは無かる可し、同所は益田信三郎氏の獨力經營に係り、當初同市西區薩摩堀西之町の同店内に工

場を設置し、一種の特色を有する良粉を製出したるが、爾來事業の盛大に赴くに伴ひ、明治三十一年を以て、更に西區岩崎町五番地に宏大なる工場を新設し、新舊兩工場力を一にして、益々優良品の製出に努めたるが故に、需要日に月に増大し、製造力に不足を生じた





益田製粉所

るに依り、同三十七年、岩崎町工場の擴築工事を行  
ひ、且つ最新型の米國式製粉機械を据附け、晝夜間  
斷無く、製造に勵み、一層業況の熾んなるに到りし  
と共に、所務の敏活ならん事を期し、薩摩堀西之町  
の本店を岩崎工場内に移し、愈々發展を圖りつゝ、  
現今に及べり。

尙ほ同社の内容を舉ぐれば左の如し。

- ▲所 在 地 大阪市西區岩崎町五番地
- ▲製 造 力 一日 參百石
- ▲機械の種類 米國ノードマーク・マーモン會社製
- ▲製品の種類 軍配印、みをつくし印、鳩印、  
金時印、達摩印
- ▲所 主 益田太三郎

(7) 盛田製粉所

愛知縣知多郡は、尾張國の南東に位し、伊勢  
灣に突出せる帶の如き半島なれども、其富力  
に於ては、同國第一の稱あり、随つて各種の  
製産業頗る盛んにして、殊に酒類醸造業の如  
きは、其最たるものに屬し、所謂知多酒の名  
は、夙に人口に膾炙せり、斯の如き地に、製  
粉業の起るの素より當然にして、現に之を経

營して、甚だ有利の業況を呈するは、同郡半  
田町に於ける盛田製粉所たり、同所は同町の  
新進商賈として知られたる數島屋盛田善平氏  
の事業なるが、創業以來の成績良好なるのみ  
ならず、製品の品質亦優れるを以て、市場に  
噴々の好評を博し、洵に多望なる前途を想望  
して、發展しつゝあり。  
尙ほ同所の内容を舉ぐれば、左の如し。

- ▲所 在 地 愛知縣知多郡半田町
- ▲製 造 力 一日 貳百五拾石
- ▲機械の種類 英國製石臼式及米國製ロール式
- ▲製品の種類 山櫻日印、山櫻月印、山櫻星印
- ▲所 主 盛田善平



(カ) 大阪製粉所

大阪に於ける機械製粉所として、益田製粉所と相競ふの状あるものは、米田庄吉氏の經營に係る大阪製粉所たり、同所は邦人の考案に成れる山越式製粉機を使用すと雖も、製品の

品質に到つては、米國製の機械を使用するものに計較して、何等の優劣を見ず、克く良質の製品を出して、日本型製粉機の爲めに、氣焔を吐きつゝあり。尙ほ同所の内容を擧ぐれば、左の如し。

- ▲所 在 地 大阪市西區西野田新家東ノ町壹千六百壹番地
- ▲製 造 力 一日 七拾五バール
- ▲機 械 の 種 類 山越式フロミネント製粉機
- ▲製 品 の 種 類 赤ミカド印、青ミカド印、赤辨慶印、青辨慶印、赤鐘旭印、青鐘旭印
- ▲所 主 米田庄吉

(コ) 白石興産合資會社

昔は東夷の國として、土民常に皇師に抗し、反亂歎む事無かりし東北の地も、今は時運の進歩に隨ひて、諸種の産業旺盛となり、單に之を

製粉業に觀るも、實力に富める白石興産合資會社の如きが起りて、其業況の昌んなるは、同地方の爲めに、大いに喜ぶ可きの事實たるのみならず、東北の斯業界に對し、亦實に偉大な

る實踐的教訓を垂れたるものと謂ふ可し。

尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

- ▲所 在 地 本社 社(工場を併有す)宮城縣刈田郡白石町  
支店(同) 上)仙臺市東三番町
- ▲資 本 金 額 金五萬圓
- ▲各 種 積 立 金 金壹萬壹千四百圓
- ▲製 造 力 一日 六拾石
- ▲敷地及建物坪數 本社 社(工場を包含す)敷地坪數四百貳拾坪 建物坪數(同上)壹百六拾六坪  
支店(同) 上)同 六 百 坪 同 壹百八拾坪
- ▲機 械 の 種 類 本社工場 英國ローバー商會製  
支店工場 米國ノーダーク・マーモン會社製
- ▲製 品 の 種 類 本社工場 別白印、白一印、白二印  
支店工場 天印、地印、仙印、人印
- ▲出 資 者 氏 名 宮城縣渡邊佐吉、同鈴木富太郎、同渡邊儀藏(外拾四名)
- ▲役 員 代表社員渡邊佐吉、専務理事鈴木富太郎、理事渡邊卯吉



(タ) 松田製粉名會社

名古屋と静岡との殆んど中央に位し、近時著しき發達を呈したるは、實に濱松市とす、随つて此地に於て機械製粉業を經營せる松田製粉名會社が、其市勢に隨伴して、業務を進伸

し、優質の製品を出すの決して偶然ならざる可く、而も同所は、海道一帶に跨る廣大の販路を有するを以て、今後幾層の發達を遂ぐ可きや必せり。尙ほ同社の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲所在地 濱松市新町七拾六番地

▲製造力 一日 五十石

▲機械の種類 米國製ロール式

▲製品の種類 山雪印、松印、虎印

▲出資者氏名 静岡縣松田榮吉、同松田ツネ

(レ) 小宮製粉所

伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ、と俗諺に唄はる、其津に程遠からざる三重縣安濃郡村

主村に於て、製粉業を經營するは、即ち小宮製粉所たり、同所は其製造力に於ては、未だ優勢なりと言ふを得ずと雖も、其所在地の深

流に富むを以て、製粉機械運轉の原動力に巧みに水力を使用するが故に、操業の費用を節約し得るの長所を有し、爲めに年々事業の發展を實現し、佳良の製品を各地に供給しつゝあり。尙ほ同所の内容を擧ぐれば、左の如し。

▲所在地 三重縣安濃郡村主村

▲製造力 一日 五拾バレル

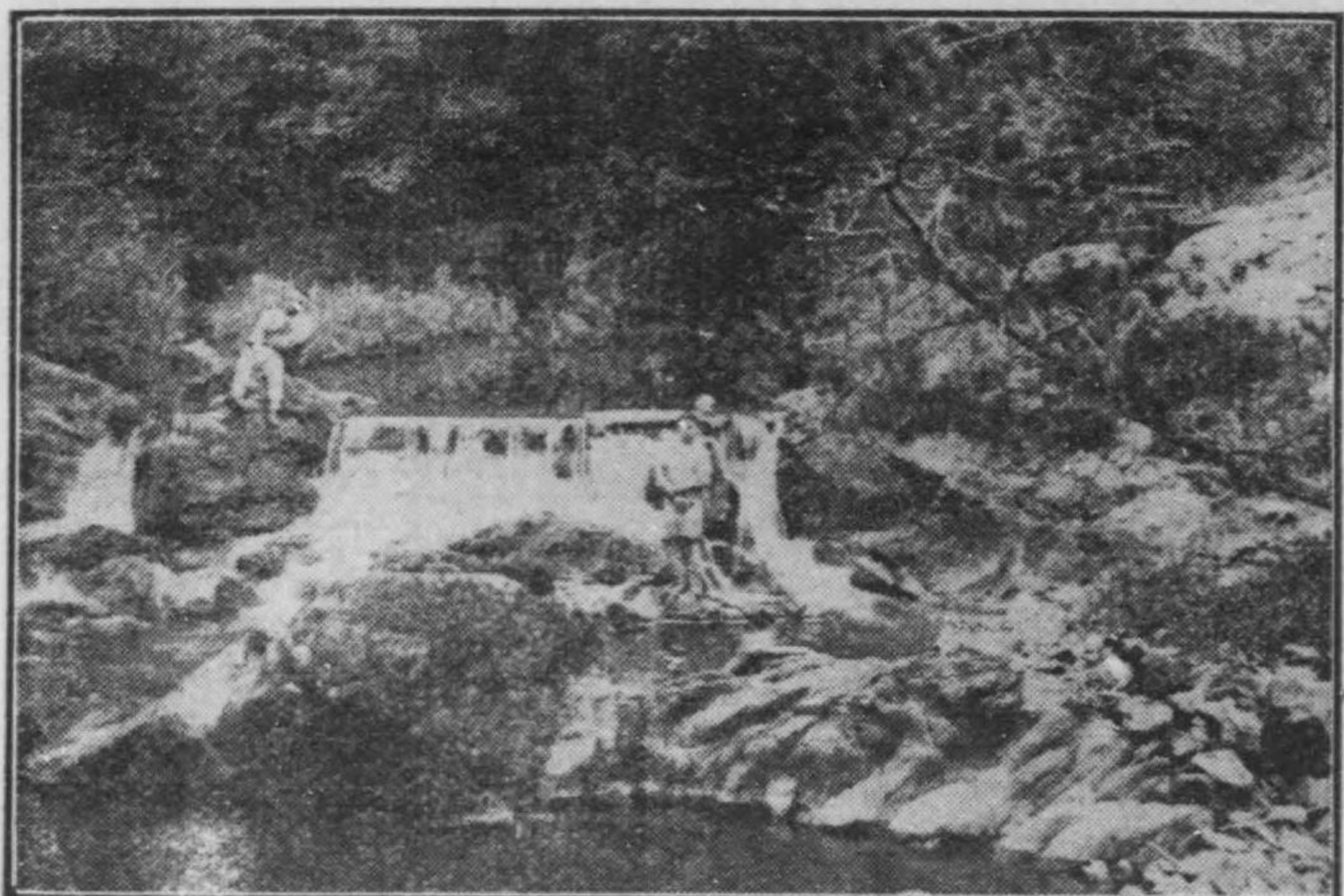
▲敷地及建物坪數 敷地坪數九百坪

建物坪數貳百八拾六坪

▲機械の種類 米國製ロール式

▲製品の種類 青寅印、赤寅印、藍龍印、赤龍印、王姫印、日の出印、青羊印、赤羊印

▲所主及従業員 所主小宮長藏、従業員拾貳名



小宮製粉所水源



(リ) 各製粉株式會社 收支計算

以上叙述したる所に依り、各製粉所の實狀は概ね盡きたりと信ずれども、尙ほ其主要なる各製粉株式會社の最近に於ける資産並に負債の狀態、損益計算及び利益金の處分等を數字を以て、一般に示すの必要なるを認め、即ち各社の決算報告に基き、之を左に表示する事とせり。

▲日本製粉株式會社

第參拾貳回(自明治四十五年六月一日) 決算報告(至大正元年十一月三十日)

貸借對照表

借方(資産之部)	
一 未拂込株金	二八五、〇〇〇、〇〇〇
一 預ケ金	九六、四三五、〇八〇

一 假出金	七九、九一九、六二〇
一 賣掛金	一六五、三〇三、三五〇
一 地所家屋	五〇八、三三三、二二七
一 機械	五五五、七六八、三八一
一 什器	一〇、三三〇、九六二
一 貯藏品	五三、四四六、六〇〇
一 國債證券	七四九、六〇〇
一 原料及商品	一、四八八、〇八五、七四〇
一 受取手形	二〇一、八八九、一五〇
一 金銀	二七、二六、七七八
合計	三、四四四、五五七、四七六
貸方(負債之部)	
一 株金	一、五五〇、〇〇〇、〇〇〇
一 準備積立金	一一一、〇〇〇、〇〇〇
一 機械建物消却積立金	一五五、〇〇〇、〇〇〇

一 別途積立金	一一〇、〇〇〇、〇〇〇
一 未拂配當金	一、一〇四、三〇〇
一 前期繰越金	三七、二八二、七〇八
一 社債金	五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一 未拂販賣手数料	三三、五二五、五〇五
一 預リ金	一〇四、七二〇、九八〇
一 契約保證金	一、五二〇、〇〇〇
一 社員職工積立金	一五、六四九、六〇〇
一 仕拂手形	六七八、四七六、八一〇
一 當期利益金	一五、九八七、五六五
合計	三、四三四、三三七、四七六
損益計算	
利益之部	
一 總益金	四六二、三九五、三三〇
一 內譯	

一 製品益金	四一七、〇四二、五九〇
一 雜收入	四五、三四一、六四〇
損失之部	
一 總損金	三三六、三九七、六六五
一 內譯	
一 工務費	三〇、一八八、五九〇
一 事務費	三五、七八八、二〇〇
一 運賃	二三、七六二、四九五
一 利子	一九、八四五、八五〇
一 諸税	一六、四七五、五六〇
一 保險及倉敷料	六、五一〇、〇二〇
一 諸損	一三、八六、九五〇
差引	
一 當期利益金	一二五、九八七、五六五
一 前期繰越金	三七、二八二、七〇八



各製粉株式會社取支計算

合計

一六三、二七〇、二七三

右利益金の分配左の如し

一 株主配當金(年壹割貳分)	七五、九〇〇、〇〇〇
一 準備積立金	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一 機械建物 一 什器減價	二〇、〇〇〇、〇〇〇
一 別途積立金	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一 役員賞與金	七、五〇〇、〇〇〇
一 後季繰越金	三九、八七〇、二七三
合計	一六三、二七〇、二七三

▲日清製粉株式會社

第拾貳回(自明治四十五年六月一日  
決算報告(至大正元年十一月三十日))

貸借對照表

借方(資産之部)	六五六、〇〇〇、〇〇〇
一 未拂込株金	

一〇八

一 地所家屋機械	九四四、八三八、五六一
一 什器	一一、一九一、五六〇
一 公債證書	二、八九三、〇〇〇
一 假拂金	三四、二〇九、三四〇
一 原料及製品	一、六二七、二八三、〇三〇
一 受取手形	四八、九九七、八二〇
一 賣掛金	一五九、六七七、三四〇
一 貯藏品	一三一、六〇五、二一〇
一 銀行預金	一三七、一九〇、八〇〇
一 現金	三、一四四、一六〇
合計	三、八〇八、〇一九、八四一
貸方(負債之部)	
一 株金	一、七〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一 法定積立金	二四、五〇〇、〇〇〇
一 準備積立金	一七、〇〇〇、〇〇〇

日清製粉株式會社取締役

石島爲三郎氏



各製粉株式會社取支計算

一 配當平均金	三〇、〇〇〇、〇〇〇
一 社員職工積立金	七、六九五、九三四
一 未拂配當金	九二九、四三三
一 假受金	一五三、一一〇
一 仕拂手形	一、三五六、八二七、五六〇
一 預り金	二九、〇六三、七一〇
一 未拂金	四〇三、四四一、一三七
一 前期繰越金	四一、一六六、三三八
一 当期純益金	八七、二四三、六三九
合計	三、八〇八、〇一九、八四一
損益計算	
利益之部	
一 總益金	三、四七、四四四、五三〇
一 内譯	一〇九



各製粉株式會社收支計算

一 製 品 益 金	三三六、〇〇一、八四〇
一 雜 收 入	一一、四二二、六九〇
損 失 之 部	
一 總 損 金	二六〇、二〇一、九〇一
內 譯	
一 製 造 費	一七六、三三九、七〇八
一 營 業 費	三三、二九七、九〇八
一 利 息	三三、四〇四、三三〇
一 諸 稅	三三、一〇七、一〇〇
一 運 賃 諸 掛	一、四六九、九二五
一 火 災 保 險 料	三、七六六、八〇〇
一 雜 損	一、九一六、二五〇
差 引	
一 當 期 利 益 金	八七、二四二、六二九
一 前 期 繰 越 金	四一、一六六、三三八

合 計

右利益金の分配左の如し

一 法 定 積 立 金	四、五〇〇、〇〇〇
一 準 備 積 立 金	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一 配 當 平 均 準 備 金	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一 賞 與 金	七、〇〇〇、〇〇〇
一 配 當 金 (年 壹 割)	五三、二〇〇、〇〇〇
一 後 期 繰 越 金	四四、七〇八、九五七
合 計	三八、四〇八、九五七

▲東亞製粉株式會社

第拾參回(自明治四十五年六月一日) 決算報告(至大正元年十一月三十日)

貸借對照表

借 方 (資産之部)	
一 未 拂 込 資 本 金	一、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇

一 興 業 費	四三六、七九〇、八三〇
一 漢 口 支 店 勘 定	六七四、〇四三、五七〇
一 原 料 品 勘 定	三八一、三二〇、六四五
一 製 品 勘 定	一六〇、三五四、三六〇
一 未 收 入 金	五、〇〇九、七四〇
一 販 賣 店 勘 定	一〇〇、〇三三、一六五
一 受 販 手 形 勘 定	一三七、八二四、五六〇
一 假 拂 金 勘 定	八、五三七、五六九
一 銀 行 勘 定	七六、八二八、一六〇
一 現 金 勘 定	八一、三四七
合 計	三、四八〇、七九三、九四六
貸 方 (負債之部)	
一 資 本 金	二、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一 法 定 積 立 金	一六、二〇〇、〇〇〇
一 預 り 金	三三、四九一、二六〇

各製粉株式會社收支計算

一 未 拂 金	四五、五四一、一七〇
一 販 賣 店 勘 定	四七、〇五四、三九〇
一 仕 拂 手 形 勘 定	六二、五八三、五一〇
一 假 受 金 勘 定	五、九四七、九九〇
一 銀 行 勘 定	一八、三八二、〇一〇
一 未 拂 配 當 金	三、六二〇、五〇〇
一 前 期 繰 越 金	二九、六三九、九四六
一 當 期 利 益 金	七〇、三三三、二六〇
合 計	三、四八〇、七九三、九四六
損 益 計 算	
一 總 利 益 之 部	
一 內 譯 金	二四二、二六、一七〇
一 製 品 益 金	三三六、二九六、七八〇
一 雜 收 入	一一、四二二、六九〇

一一一



各製粉株式會社收支計算

一 爲換差益	七、七二、二〇〇
一 總損失之部	
一 總損金	一七二、八八三、〇一〇
內 譯	
一 製造費	一六六、九八二、〇五〇
一 營業費	三三、七二五、二五〇
一 諸税金及保險料	七、一五〇、七九〇
一 運搬費	六、二五四、六四〇
一 利子	一八、七八〇、二八〇
差引	
一 當期利益金	七〇、三三三、一六〇
一 前期繰越金	二九、六三九、九四六
合計	九九、九七三、一〇六
右利益金の分配左の如し	
一 法定積立金	五、二〇〇、〇〇〇

一 固定財産償却金	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一 役員賞與金	三、〇〇〇、〇〇〇
一 株主配當金(年八分)	五〇、〇〇〇、〇〇〇
一 後期繰越金	四三、一七三、一〇六
合計	九九、九七三、一〇六

▲株式會社增田製粉所

第四回(自明治四十五年五月一日) 決算報告(自全四十五年四月三十日)

貸借對照表

一 地所建物及機械	二九〇、六七四、四一〇
一 原料商品及貯藏品	五七七、〇八三、一六〇
一 賣掛勘定	五五、七五〇、五五〇
一 受取手形	一八一、四二一、八〇〇

借方(資産之部)

一 銀行勘定	二天、二六〇
一 雜勘定	一一、四八一、八一〇
一 假出金	七、三九〇、三三〇
一 金銀	二四三、八七〇
合計	一、二四、〇七二、〇九〇

貸方(負債之部)

一 株金	五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一 積立金	二〇、〇〇〇、〇〇〇
一 配當準備積立金	二五、〇〇〇、〇〇〇
一 前期繰越金	一六、九九三、四九〇
一 仕拂手形	三七六、七六六、八〇〇
一 假受金	四、六五二、八三〇
一 仕入先勘定	七、八三三、六五〇
一 未拂販賣手数料	四一、〇八四、五七〇
一 當期利益金	八五、七〇〇、七五〇

各製粉株式會社收支計算

合計

一 總利益計算	一、二四、〇七二、〇九〇
一 總利益之部	
一 總利益金	四六〇、二六七、三〇〇
內 譯	
一 製品益金	四四九、九三三、九四〇
一 雜收入	一〇、三六三、三六〇
損失之部	
一 總損金	三七四、五九六、五五〇
內 譯	
一 製造費及營業費	三五、七六〇、九五〇
一 運搬費	一八、一三五、八〇〇
一 利子及保險料	五〇、九七三、六八〇
一 倉敷料	一三、六一五、八四〇
一 諸稅	一一、八五五、〇八〇



一 建物機械償却金	五〇,〇〇〇,〇〇〇
一 恩給扶助基金	五,〇〇〇,〇〇〇
一 雜損	二四五,二〇〇
差引	
一 當期利益金	八五,七〇〇,七五〇
一 前期繰越金	一六,九九三,四九〇
合計	一〇二,六九四,二四〇

右利益金の分配左の如し

一 株主配當金(年壹割)	五〇,〇〇〇,〇〇〇
一 特別配當金(年貳分)	一〇,〇〇〇,〇〇〇
一 積立金	一〇,〇〇〇,〇〇〇
一 配當準備積立金	一五,〇〇〇,〇〇〇
一 後期繰越金	一七,六九四,二四〇
合計	一〇二,六九四,二四〇

▲滿洲製粉株式會社

第拾貳回(自明治四十五年六月一日) 決算報告(至大正元年十一月三十日)

貸借對照表

借方(資産之部)	
一 未拂込株金	五五〇,〇〇〇,〇〇〇
一 建造物	三二六,九二八,九三〇
一 機械	二〇九,三五三,七三〇
一 什器	九,二九五,五三〇
一 什取手	一,〇〇〇,〇〇〇
一 受取金	三三,五五七,七八〇
一 金出	六四,六八二,九三〇
一 假借	九〇,四八七,七六〇
一 未引收	四六,二五〇,一〇〇
一 取引先	二五,四〇〇,一三〇

一 積送品	一五四,九四四,二五〇
一 貯藏品	三三,三〇六,八〇〇
一 原料	一七五,三一九,三三〇
一 製品	二五,七八六,八〇〇
合計	一,六二五,一五六,〇一〇
貸方(負債之部)	
一 株金	一,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇
一 法定積立金	七,〇〇〇,〇〇〇
一 別途積立金	一六,〇〇〇,〇〇〇
一 固定償却準備金	三五,〇〇〇,〇〇〇
一 社員積立金	四,四五九,九六〇
一 仕拂手形	一八七,一八〇,〇〇〇
一 借入金	一四五,九三三,九二〇
一 假受金	一九,四三九,七五〇
一 未拂金	八五,九九六,七五〇

一 三井洋行	八三,三五五,八三〇
一 前期繰越金	九,四三七,七二〇
一 當期利益金	三一,三九三,一三〇
合計	一,六二五,一五六,〇一〇

損益計算	
利益之部	
一 總内譯	一一,二四一,〇六〇
一 製品利益	一一〇,五三六,一七〇
一 雜收入	七〇四,八九〇
一 總損失之部	七九,八四七,九五〇
一 内譯	七九,八四七,九五〇
一 利息	一一,六七二,五二〇
一 手續料	一一,七五四,一三〇



一運賃	一九、三五、二七〇
一雜損金	三、〇六六、九一〇
一報酬	三、〇九六、九九〇
一給料	九、〇七六、〇八〇
一慰勞手當金	八、一四五、二六〇
一借地料及家賃	三九一、五八〇
一廣告料	五三三、二三〇
一保險料	一、一〇一、〇三〇
一印刷費	一六二、四〇〇
一通信費	五五六、九二〇
一旅費	一、九八七、三八〇
一文具費	一三六、四〇〇
一薪炭費	二九三、三七〇
一修繕費	四、一七四、一九〇
一小器具費	三三三、九七〇

一社交臨時費	七四九、五五〇
一消耗費	九八五、一五〇
一雜引	一、五三六、五〇〇
一當期利益金	三二、三九三、一一〇
一前期繰越金	九、四三七、七一〇
合計	四〇、八三〇、八二〇
右利益金の分配左の如し	
一法定積立金	二、〇〇〇、〇〇〇
一別途積立金	二、〇〇〇、〇〇〇
一固定償却準備金	八、〇〇〇、〇〇〇
一重役賞與金	三、〇〇〇、〇〇〇
一株主配當金(壹株に付金七拾五錢約一割)	一五、〇〇〇、〇〇〇
一後期繰越金	一〇、八三〇、八二〇
合計	四〇、八三〇、八二〇

### (四) 小麥、小麥粉に關する統計

#### (1) 明治四十四年度内地

#### 小麥作付反別(地方別)

府縣道別	田作付反別	畑作付反別	合計
北海道	—	一〇、三三〇、九	一〇、三三〇、九
東京	三三〇、一	八、七三五、九	九、〇六六、〇
京都	二、〇七三、一	七二〇、八	二、七九三、九
大阪	一、五二四、一	七四、五	二、二九八、六
神奈川	七四九、〇	一五、五八二、四	一六、三三一、四
兵庫	一八、一三五、七	三、二〇、五	二一、三三六、二
長崎	三、〇五一、二	五、八三九、一	八、八九〇、三
新潟	—	七、一九一、四	七、一九一、四
埼玉	—	四、三七七、七	四、三七七、七
群馬	—	六、三九八、七	六、三九八、七
千葉	—	六、一七、七	六、一七、七
茨城	—	四八九、七	四八九、七
栃木	—	三、三三三、二	三、三三三、二
奈良	—	四、七四五、〇	四、七四五、〇
三重	—	二、一八、四	二、一八、四
愛知	—	八、九〇〇、三	八、九〇〇、三
静岡	—	二、一六二、四	二、一六二、四
山梨	—	二、八五三、〇	二、八五三、〇
滋賀	—	七四、三	七四、三
岐阜	—	四、〇九二、三	四、〇九二、三
埼玉	—	一七、三六五、〇	一七、三六五、〇
群馬	—	二二、八二四、五	二二、八二四、五
千葉	—	一六、〇七二、二	一六、〇七二、二
茨城	—	三五、五四四、九	三五、五四四、九
栃木	—	一九、六九五、七	一九、六九五、七
奈良	—	九七七、四	九七七、四
三重	—	五、七二、四	五、七二、四
愛知	—	三、一一一、五	三、一一一、五
静岡	—	八、四四〇、三	八、四四〇、三
山梨	—	六、二五四、四	六、二五四、四
山梨	—	五、八三八、五	五、八三八、五
滋賀	—	四三四、六	四三四、六
岐阜	—	四、三九八、五	四、三九八、五
合計	—	—	一、一八九、九

小麥、小麥粉に關する統計



小麥、小麥粉に関する統計

長野	三、〇二二	一五、一四一	一八、一六三
宮城	—	三、七三三	三、七三三
福島	五、七	五、〇五四	五、〇五九
巖手	—	九、七四八	九、七四八
青森	—	二、二五〇	二、二五〇
山形	〇、五	二、〇九二	二、〇九三
秋田	—	二、六三三	二、一六三
福井	三六〇、七	七五九、五	一、一〇〇
石川	九、四	一、五一九	一、五二九
富山	四二、一	八八三、二	一、二九五
鳥取	五二七、六	九四二、八	一、四七〇
島根	二四六、三	一、九四三	二、一九〇
岡山	一五、六七三	六、一五四	二、一八二
広島	三、一〇六	三、六〇八	六、七一九
山口	二、五七三	四、二九九	六、八七三

統一

和歌山	二、三三三	七三三	三、〇六六
徳島	一、二七〇	三、一〇〇	四、三七〇
香川	一三、〇八九	二、五五五	一五、六四四
愛媛	二、二一九	三、六〇八	五、八二七
高知	—	—	—
福岡	二、二二二	一、四八三	一、七〇六
大分	三三、〇〇五	六、三二〇	三九、三二六
佐賀	九、一三二	一一、五四五	二〇、六七八
熊本	一五、〇七五	五、〇六八	二〇、一四四
宮崎	一〇、八一〇	一五、四四六	二六、二五六
鹿児島	七九三、六	四、五二五	五、三一九
沖繩	六、二三〇	一〇、一三三	一六、三六三
計	一七六、二四七	三三三、九五七	四九九、二〇四

(口) 明治四十四年度内地 小麥生産高 (地方別)

府縣道別	田作生産高	畑作生産高	合計
北海道	—	一八四、三三〇	一八四、三三〇
東京	三、六八八	八五、七五六	八九、四四四
京都	二三、四七二	五、八九四	二八、三六五
大阪	二五、五二二	六、七三三	三二、二五五
神奈川	七、八二六	一四四、八一八	一五二、六四四
兵庫	一三〇、六二八	一九、二二五	一五〇、八五三
長崎	三四、二一九	四九、四三七	八三、五五六
新潟	—	四九、七六〇	四九、七六〇
埼玉	四五、八六四	二二、七九八	六八、六六二
群馬	七六、八八八	一六八、四〇八	二四五、二九六
千葉	八〇〇	一八七、七五二	一八八、五五二

小麥、小麥粉に関する統計

茨城	五、五五〇	三五四、四四二	三五九、九九二
栃木	四〇、六一三	二〇六、一四五	二四六、七五八
奈良	六二、六五三	九、九六九	七二、六二二
三重	二二、七九九	二七、六四六	五〇、四四五
愛知	八二、五八六	一一九、一八五	二〇一、七七一
静岡	二二、五五四	六一、七四〇	八四、二九四
山梨	三五、六五二	五九、六二四	九五、二七六
滋賀	八、六二四	四、一六五	一二、七八〇
岐阜	四五、〇八六	四七、五〇二	九二、五八八
長野	三六、四一四	二一、〇一九	五七、四四三
宮城	—	四七、六九六	四七、六九六
福島	—	四三、六〇三	四三、六〇三
巖手	—	—	—
青森	—	—	—
山形	—	—	—
計	—	—	—

統一



小麥、小麥粉に關する統計

秋田	—	10,177	10,177
福井	3,053	5,870	8,923
石川	106	2,222	2,328
富山	5,225	6,999	12,224
鳥取	4,978	9,261	14,239
島根	2,011	15,624	17,635
岡山	177,549	67,369	244,918
廣島	35,134	45,487	80,621
山口	24,101	31,503	55,605
和歌山	28,966	7,336	36,302
徳島	14,846	36,971	51,817
香川	172,746	27,592	200,338
愛媛	23,628	30,850	54,478
高知	2,404	13,647	16,051
福岡	110,011	50,410	160,421

統四

大分	87,638	90,748	178,386
佐賀	164,155	41,246	205,401
熊本	100,083	23,428	123,511
宮崎	6,073	30,964	37,037
鹿兒島	48,766	62,000	110,766
沖繩	—	5,093	5,093
計	1,973,160	3,036,680	5,009,840

(八) 明治四十四年度内地小麥一反歩當平均收穫高

府縣道別	作付反別	收穫高	一反歩當り平均收穫高
北海道	20,430,9	184,230	0,903
東京	9,046,0	89,444	0,980
京都	2,782,9	28,365	1,020

小麥、小麥粉に關する統計

大阪	2,286	33,334	1,440
神奈川	16,331	152,644	0,930
兵庫	3,336	259,843	7,703
長崎	8,890	83,596	0,947
新潟	7,292	49,760	0,689
埼玉	21,765	264,662	1,219
群馬	22,815	245,296	1,075
千葉	16,071	188,552	1,177
茨城	36,034	359,992	0,997
栃木	23,028	246,758	1,072
奈良	5,732	72,622	1,277
三重	5,230	50,445	0,964
愛知	17,340	101,771	1,166
静岡	8,416	85,294	1,014
山梨	8,691	95,276	1,063

滋賀	1,198	12,785	1,074
岐阜	8,490	92,588	1,090
長野	18,163	157,443	0,864
宮城	3,731	37,696	1,010
福島	5,059	43,660	0,864
岩手	9,748	53,840	0,552
青森	2,250	19,840	0,880
山形	2,093	14,743	0,754
秋田	2,163	20,177	0,471
福井	1,110	8,923	0,796
石川	1,529	12,318	0,810
富山	1,295	12,214	0,992
鳥取	1,470	14,239	0,900
島根	2,190	17,645	0,805
岡山	22,827	244,918	1,133

統五



小麥、小麥粉に関する統計

年次	田作付反別	加作付反別	合計
明治三十一年	二九、八三五、三	三三五、七七二、六	四六五、六〇七、九
同 三十二年	二八、六五七、七	三三六、六七四、二	四六五、三三二、九
同 三十三年	三五、七二〇、五	三三二、七四七、七	四六八、四六八、二
同 三十四年	四二、七九三、八	三四四、五三三、四	四八七、三二七、二
廣島	六、七二四、九	一、二〇一	〇、八七〇
山口	六、八七三、三	〇、八三三	一、〇一〇
和歌山	三、〇六五、一	二〇、一四四、〇	二〇五、四〇一
徳島	四、三七〇、六	二六、二五六、五	〇、八五三
香川	一五、六四四、四	五、三二九、二	三七、〇三七
愛媛	五、八二七、八	一六、三三三、五	〇、六七九
高知	一、七〇六、六	〇、九三六	〇、四一〇
福岡	二九、三二六、〇	一、九四四	一、五五五
大分	二〇、六七八、三	三三二、九五七、二	五、〇〇九、八四〇
佐賀	二〇、一四四、〇	一、二四三、六	五、〇九三
熊本	二六、二五六、五	一、二四三、六	五、〇九三
宮崎	五、三二九、二	一、二四三、六	五、〇九三
鹿兒島	一六、三三三、五	一、二四三、六	五、〇九三
沖繩	一、二四三、六	一、二四三、六	五、〇九三
計	三三二、九五七、二	五、〇〇九、八四〇	一、五五五

統六

(三) 内地小麥作付反別累年比較表

年次	田作付反別	加作付反別	合計
明治三十一年	一五九、六九九、二	三三四、四七七、一	四八四、一七六、三
以上五箇年平均	一三九、三四一、三	三三四、八三七、〇	四七四、一七八、三
明治三十六年	一四三、五六四、三	三二六、三四二、六	四六九、九〇六、九
同 三十七年	一三七、七七二、六	三〇、八七〇、六	四五八、六四三、二
同 三十八年	一四〇、五五九、一	三二二、九一七、九	四五三、四七七、〇
同 三十九年	一四一、七二〇、四	三〇一、四六六、八	四四三、一八七、二
同 四十年	一四五、一〇〇、六	二九九、〇一五、六	四四四、一一六、二
以上五箇年平均	一四一、七四三、四	三二二、一三三、七	四五三、八六六、一
明治四十一年	一四八、二〇一、三	三〇一、三七七、一	四四九、五七八、四
同 四十二年	一五一、五〇四、四	三〇〇、五八〇、二	四五二、〇八四、六
同 四十三年	一六七、一九九、三	三〇八、二五九、二	四七五、四五八、五
同 四十四年	一七六、二四七、三	三三三、九五七、二	四九九、二〇四、五
自四十二年 至四十四年 三箇年平均	一六四、九八三、七	三一〇、五九八、九	四七五、五八二、五
自四十年 至四十四年 五箇年平均	一五七、六五〇、六	三〇六、四三七、九	四六四、〇八八、四

小麥、小麥粉に関する統計

統七



(ホ) 内地小麥收穫高  
累年比較

年次	産額	作付反別	一反歩産額
明治三十一年	四、一八一、八八八	四六五、六〇八	九〇〇
同 三十二年	四、一四一、〇六一	四六五、三五二	八九〇
同 三十三年	四、二五五、六二八	四六八、五四七	九〇〇
同 三十四年	四、三七五、三七六	四八七、三〇六	九〇〇
同 三十五年	三、九五四、四九七	四八四、一七六	八二〇
同 三十六年	一、八七五、三八八	四六九、九〇七	四〇〇
同 三十七年	三、八五八、九九一	四五六、六四三	八四〇
同 三十八年	三、六〇一、五三三	四五三、四七七	七九〇
同 三十九年	三、九六二、二六五	四四三、一八七	八九〇
同 四十年	四、四七九、七二六	四四四、〇一六	一、〇二〇

同 四十一年 四、四二二、四四五 四四九、五七八、〇、九八〇  
 同 四十二年 四、四九四、九三六 四五二、〇八四、〇、九九〇  
 同 四十三年 四、七八三、四七六 四七五、四五八、五、〇〇六  
 同 四十四年 五、〇〇九、八四〇 四九九、二〇四、五、〇〇三  
 作付反別は明治三十四年までは漸次増加し來りしも三十五年以降は減退の勢を示せしが最近に至り再び増加の傾向を呈し來れり  
 産額は作付反別と同じく明治三十四年までは漸次増加し來りしも三十五年以降減少し(三十六年は非常の凶作に遇ひたり)三十九年以降は又増加し四十年には前十年中最多の産額あり更に四十一年に於ては少しく減少の氣味を示し四十二年よりは再び増加し四十四年四十四年の如きは非常なる増加を示し殊に昨年の如きは之れを前年に比較するときは二十二

萬六千三百六十四石の増收にして前々年に比較して實に五十一萬四千九百十四石の増加を示すに至れり一反歩の産額は麥け收穫時季に於ける天候の影響を感ずること大なるが故に耕作技術進歩するも收量の増加を見ざることをあるは勿論なり統計の示す所に依れば從來減少の傾向ありしも茲五六年以前より年々に増加を見殊に四十四年の如きは前十四箇年中最多の收量を示せり

(ハ) 内地小麥一反歩當  
收穫高累年比較表

年次	作付反別	收穫高	一反歩當平均收穫高
明治三十一年	四六五、六〇七、九	四、一八一、八八八	〇九八
同 三十二年	四六五、六〇八	四、一四一、〇六一	九〇〇
同 三十三年	四六八、五四七	四、二五五、六二八	九〇〇
同 三十四年	四八七、三〇六	四、三七五、三七六	九〇〇
同 三十五年	四八四、一七六	三、九五四、四九七	八二〇
同 三十六年	四六九、九〇七	一、八七五、三八八	四〇〇
同 三十七年	四五三、四七七	三、八五八、九九一	八四〇
同 三十八年	四五三、四七七	三、六〇一、五三三	七九〇
同 三十九年	四四三、一八七	三、九六二、二六五	八九〇
同 四十年	四四四、〇一六	四、四七九、七二六	一、〇二〇
以上五箇年平均	四五三、八六六、一	三、五五〇、三四八	七八〇
明治四十一年	四四九、五七八、四	四、四二二、四四五	九七八
同 四十二年	四五二、〇八四、〇	四、四八六、三四八	九九二
同 四十三年	四七五、四五八、五	四、六〇一、七五六	九六八
同 四十四年	四九九、二〇四、五	五、〇〇九、八四〇	一、〇〇三



小麥、小麥粉に關する統計

自四十三年至四十  
四年三箇年平均 四七五、五八二、五 四、六九九、三二五、九八八  
自四十年至四十四  
年五箇年平均 四六四、〇八八、四 四、五九二、六九一、九八九

統一〇

〇(ト)外國產小麥最近  
十箇年間輸入高

年次	輸入高	價額
明治三十五年	八六、五三四	二四〇、〇五〇
同 三十六年	一、二六五、六二九	四、七六七、八三八
計		六、七〇九、二五六

〇(チ)外國產小麥最近五箇年間輸入國別表

國別	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
清國	四、一三一	一九、〇〇八	二、一九五	二二八、九四二	四六三
關東洲	一、四四七	七、四五五	八、五九五	四九八、八〇四	一、三四五
其他	四九六	五、一六五	六九、三八三	一七、三二一	六六、三九二
計	一、九三二	一八、四二二	二七三、〇八八	七〇九、一四七	一、三四五

國別	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額	數量	價額								
朝鮮	圓擔	1011、172	圓擔	365、969	圓擔	599、590	圓擔	164、391	圓擔	236、505	圓擔	906、097	圓擔	344、492	圓擔	123、330	圓擔	443
佛領印度	圓擔		圓擔		圓擔	1、943	圓擔	6、917	圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔	
英領印度	圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔	
露領亞細亞	圓擔		圓擔		圓擔	7、177	圓擔	29、994	圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔	
北米合衆國	圓擔	六、五、七二二	圓擔	二、六二〇、三八九	圓擔	四九五、六八一	圓擔	二、二九、五九九	圓擔	四三、二四七	圓擔	一、四九八、五四九	圓擔	三五三、四九二	圓擔	八四〇、七二九	圓擔	三、四四八、二六一
濠太刺利	圓擔	一三八、二五九	圓擔	五五〇、一六〇	圓擔	三、〇五二	圓擔	一〇、七七九	圓擔	八二	圓擔	四三一、八三〇	圓擔	五〇、〇八七	圓擔	二二二、二五七	圓擔	
英領亞米利加	圓擔	四、九一八	圓擔	三三、〇三九	圓擔	三三、一七〇	圓擔	七三、一九八	圓擔		圓擔		圓擔		圓擔		圓擔	
其他諸國	圓擔	四九	圓擔	一九六	圓擔		圓擔		圓擔	二四	圓擔		圓擔		圓擔		圓擔	
計																		

小麥、小麥粉に關する統計

統一



(リ) 外國産小麥最近五箇年間平均輸入着港別

港 別	明治四十年		明治四十一年		明治四十二年		明治四十三年		明治四十四年	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額
横濱	二〇〇、三三八	三三、九六九	一五二、四七三	二九八、三五二	一五二、四七三	二九八、三五二	一五二、四七三	二九八、三五二	一五二、四七三	二九八、三五二
神戶	一、〇八八、八二六	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四	一、三三九、三七四
門司	五七二、八三〇	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六	二六、三三六
大 阪	二四、八二八	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二
長 崎	六九、九三九	三、九一六	三、九一六	三、九一六	三、九一六	三、九一六	三、九一六	三、九一六	三、九一六	三、九一六
其他諸港	一三、七四六	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二	八二
合計	三、三〇七	二、一五八	二、一五八	二、一五八	二、一五八	二、一五八	二、一五八	二、一五八	二、一五八	二、一五八
關稅	九〇四、〇四九	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七	三、六六九、二七七

(ヌ) 外國産小麥最近五箇年間輸入状態

▲明治四十年

本年の輸入は九十萬四千〇四十九擔三百六十六萬九千二百七十七圓にして前年に比し五十四萬八千七百五十六擔二百二十九萬七千五百二十九圓の増加を示せり即ち左の如し

國 別	數量	價 額
濠太利刺	一三八、二五九	五五〇、一六〇
朝鮮	一〇一、一七一	三六五、九六九
北米合衆國	六五、七二二	二、六二〇、三八九
露領亞細亞	二八、三二一	九四、二四六
其他諸國	九、五九六	三八、六二三
計	九〇四、〇四九	三、六六九、二七七

小麥、小麥粉に関する統計

統一三

現今本邦小麥の需用は年々増加の一方なるに而も内地小麥の作付反別は歳々減少の傾きにして僅に小麥粉需用額の約六分方を充たし得るに過ぎず是近時本品輸入の終始絶へざるに至れる所以にして特に本年は新設製粉會社の更に事業を開始せるものありて之れが原料として本品の輸入は層一層激増し來れり前額の入超は畢竟之が爲なりとす

朝鮮小麥は從來専ら醫油、鉄の製造原料とするに過ぎざりしが近時製粉の原料にも使用せらるることとなり本邦在東京の一製粉會社の如きも直接鎮南浦より移入したることもありたり而して本年移入されたる同品は八分方鎮南浦品にして仁川品は二分に足ざりしが如し



▲明治四十一年

本年の輸入は五十九萬三千七百八十六擔、二百五十萬九千七百四十五圓にして前年に比し三十一萬二百六十三擔、百十五萬九千五百三十二圓を減少せり即ち左の如し

國別	數量	價額
清國	一九、〇八	七、四五五
關東洲	五、一六五	一八、四二二
朝鮮	三九、五九〇	一六四、三九二
露領亞細亞	七、一七七	二九、九九四
北米合衆國	四九五、六一	二、二九、五九九
英領亞米利加	三、一七〇	七三、一九八
濠太刺利	三、〇五二	一〇、七九七
其他諸國	一、九四三	六、九二七
計	五九三、七六六	二、五〇九、七四五

近時内地製粉事業の勃興、小麥需用の激増せし結果本年上半期に於ける小麥値段は前年に引續き尙ほ高値を保ちたりしも偶々本年に於ける麥作は前年の大豊作に次ぐ收穫を得（農商務省の調査に據れば本年の麥實收高は二百五十二萬三千九百四十三石にして前年に比すれば六十四萬三千五百五十三石即ち三分を減少せるも平年に比すれば百九十五萬八千四百六十六石即ち一割の増收なりしと云ふ）同時に麥粉の不況に伴れ製粉事業者の其製造力に制限を加ふるあり旁々下半期に入り頓みに低落を告ぐるに至れり  
一方米國小麥は之れに反し上半期に於て安く下半期は本年に於る新收穫の不良なるより却て高かりしか故に上半期にありてコン前年同

期に譲らざる輸入を視たりしも下半期の輸入は著しき減退を免がれず而して加奈陀品及浦鹽經由の北滿洲品の輸入も亦上半期本邦に於ける麥價の高價なる際のみ止まり下半期は全く杜絶に歸し更に濠洲品及朝鮮品の兩者は各本國不作の結果、前者に在りては價格痛く騰貴し後者は品質劣惡殆ど製粉用に供するに足らず上下兩期共に少額の輸入ありたるに過ぎざりき前顯入減は則ち之が爲なりとす因に加奈陀品には其品質に於て種々の等級あるべきも大體米國品と格別の相違なく北滿洲品は米國品に比し品質非常に劣等にして終始百斤に付一圓方格安なるを常とす  
抑も本邦小麥は彈力を備へ風味頗る良好なるに拘らず色相の點に於て缺ける處あり其結果

製粉の純白を期する上に於て必ずや外國小麥の混用を要すると共に其輸入の年々増進し來れる所以にして偶々本年は一般經濟界の不振に伴れ麥粉亦不況を免がれざりしに依り本品の商勢も兎角頓挫の姿を脱する能はず結局年末には京濱間に四千噸、神戸方面に三千噸の持越しを生ずるに至りたり而も市價は不作の影響として却て上進し上半期中最低四圓九五錢なりし米國品は下半期に入り最高五圓八十五錢と云ふ高値を唱ふるに至れり

▲明治四十一年

本年の輸入は三十五萬三百三十六擔、百三十七萬五千七百八十二圓にして前年に比し二十四萬三千四百五十擔、百十三萬三千九百六十三圓を減少せり即ち左の如し



國別	數量	價額
清國	二、一九五	八、五九五
關東洲	六九、三八三	二七、〇八八
朝鮮	二二六、五〇五	九、六〇九七
北米合衆國	四三、二四七	一八、九七三
濠太刺利	二	八
其他諸國	四	三
計	三五〇、三三六	一、三五、六二二

元來本品は重に内地製粉會社に於て製粉原料として輸入するものなるが前年米國に於ける作柄不良にして本年は原價の昂騰せるに加へ百斤五十七錢の關稅を課せられたるため之を本邦に輸入するときは内地小麥よりも割高となるため輸入不引合となり製粉會社は主として内地産若くは朝鮮産小麥を使用するに至り

隨て米國小麥の需要を減することとなり加之本品相場暴騰したる結果本品を輸入するよりも寧ろ製粉を輸入する方割安なるの變態を來たし是れ亦本品輸入を減少するの一因となれり蓋し米國にては製粉の際に生ずる穀が家畜の飼料として需要多きに連れ値段も高く賣行ため製粉の値段は其れ丈け割安に取引せられ得るを以てなり

米國小麥にて輸入するはブリウステム、ワラ／＼の二種にしてワラ／＼は其値段の安き爲輸入も亦多しとす  
値段は春來次第に騰貴の一方にて年末には最高相場を出したり元來本品の新物は九月に出づるを以て十月頃は輸入最も多く隨て相場も其頃は年々低落するを例とし前年はワラ／＼

にて百斤五圓二三十錢なりしが本年は六圓二三十錢となりブリウステムは品質も上等ゆるワラ／＼よりも高きを常とし本年も十五錢方上値を唱へたり

近時内地製粉業者の勃興を見るや爾來同業者は其製造原料として内國各地産の小麥を買占むる爲に百方手段を講じ居れば勿論内國に於ける耕作反別は増加し居るに相違なきも然も供給需要を満たすこと能はず外國産を輸入し之を補充せざるを得ざる状態なるを以て動もすれば内地小麥の騰貴は必然免れ難き處にて本年も新小麥の出初期たる七月に於て十一圓を唱へたるもの十一、十二月の交に於ては既に十二圓を唱へ醬油醸造者の如きは小麥を以て之に代用するに至れり然れば小麥の相場に

して出合はんには製粉業者は米國小麥を使用するに躊躇せざれど奈何せん本年は米國産の値段高くして出合はず内地産一石(四十貫)十一圓の相場を唱ふる時に於て米國産は百斤五圓二十錢を唱へしかば商談成立の見込なく終に此れが代用として朝鮮産を輸入せざるを得ざるに至れり之れ本年朝鮮産の多數に輸入せられたる所以なり

▲明治四十二年

本年の輸入は八十一萬八千二百三擔、三百三十三萬八千二百四十三圓にして前年に比し四十六萬七千八百六十七擔、百九十六萬二千四百六十一圓を増加せり即ち左の如し

國別	數量	價額
清國	一三八、八四三	四九八、八〇四



關東洲	一八九、七八	七八、四二七
朝鮮	三四、四九二	二五、七〇四
露領亞細亞	一五、八四七	六四、九二四
北米合衆國	三五三、四九二	一、四九八、五四九
濠太刺利	九五、七四一	四三、八三〇
其他諸國	一	五
計	八八、二〇三	三、三三八、二四三

にして是れ前年は本品の相場世界的に一般に高く本邦は比較的低廉にて殊に米國小麥は一昨年不作の結果として相場も非常に暴騰せしかば輸入不引合となりしのみならず本品値段の暴騰したるために却て外國製粉を輸入するの割安なるに如かざる變態を來たし旁々以て輸入を減じたれど本年は相場の低落に連れ此れが輸入を促すに至りしものにて一月より五

月頃迄は滿洲物主として輸入されたれど九月以後新物に至り米國物の豊作にて割安なりし爲め滿洲物は減じて米國物の輸入を増すに至りたり  
由來本品は本邦内地に於ける製粉工場の原料として輸入するものなるが本邦産小麥にて製せし粉の麵麩にも餛飩にも使用せらるゝに反し外國製小麥にて製せし粉は其色白くして外見美なれど其味前者を凌駕する程の事にも非ざれば其性質用途に於ても麵麩とか餛飩素麩とかの一方に偏し居る爲め内地製粉會社に於ても或程度迄は是非其本邦産小麥を先として買入れに着手し居れど尙且つ原料に不足を生ずるが爲め勢ひ外國産を輸入せざるを得ざる譯なり而して前年内地麥は不作を來たせし爲

本年上半期間は割安なる滿洲物を輸入し此れが補足に充てしも本年の内地作は平年以上にて七月新物の出初には一石十圓に始まり出荷の増すに連れて九圓三十錢に迄引下げしに八月上旬の水害にて米價と共に暴騰し八月下旬には一躍十一圓の相場を出し此の高位のため製粉會社は外國産麥粉との競争上内地小麥を使用すること困難となり己むを得ずして米國小麥の輸入を計るに至りたり而して米國物は當時四圓九十錢位を唱へ居り甚だ格安なりしを以て本邦よりの買付けも多きに上りたりしが其後年末迄四圓六七十錢の間を小往來するに止まりたり  
滿洲物は本年春季には百斤四圓八十錢を唱へ五月頃には最低四圓三十錢となり當時米國物

に比し約一圓方の相異ありしも本年新物に至り値段を引上げ輸入不引合となりしかば輸入の杜絶を見るに至りたり滿洲物にて輸入するは主に長春附近に産するものなるが近來にては鐵嶺方面にて産出するもの少なからざるより自然此の方面の品も輸入せらるゝに至れり而して滿洲産は其色黒く性質亦内地産と大に類似する處ありと云ふ、米國産にて輸入するはブリューステム、ワラノの二種にて前年は値段の低きためワラノの輸入多かりしが本年は此の二種殆ど甲乙なく輸入せられたり

▲明治四十四年

本年度の輸入は九十萬八千六百二十四擔、三百七十二萬八千八百二十九圓にして前年に比し九萬四百二十一擔、三十九萬五百八十六圓



小麥、小麥粉に関する統計

の増加を見たり即ち左の如し

國別	數量	價額
清國	四六三	一、三四五
關東洲	一七、三三二	六、三九二
露領亞細亞	—	—
北米合衆國	八四〇、七九元	三、四八、二六二
濠太刺利	五〇、〇八七	二二、二五七
其他諸國	一三四	五七四
計	九〇八、六二四	三、七六、八二九

本年は前年に降雨多く天候不順なりし爲め内地の麥作不良なりしかば本年春季に於て内地小麥の相場高く九升一合位を唱へたるに當時米國小麥は九升三四合に當る勘定にて相場割安なりしかば之を買付けたるもの多く之に加へて本年は七月より改正關稅の實施せられし

統二〇

爲め之を見越して注文せしものありしこと本年入増の主因なり

本年輸入の米國小麥はワヲ／＼を重としブリユウステムも少數輸入せり而してワヲ／＼の中にもレットホワイトの二種あり後者は前者よりも幾分値段高けれど大概兩者込にて輸入せられたり

濠洲物は値段高くして輸入引合はざる爲め下半年期には輸入なく滿洲物も清國動亂の爲めに打撃を受けしため出廻りを減じたり

毎年二三月頃と七八月頃とに於て製粉の賣行き多きに連れ需要最も多きを例とし殊に本年は内地製粉工場の製造力増大したるを以て使用額も増加したれば本年の如き輸入の多きに拘らず順次賣行毫も溢滞を來さざりしと云ふ

(ル) 明治四十三年度内地小麥粉生産額 (地方別)

道府縣別	製造戸數	原料		計	麥粉生産額
		内國產	外國產		
北海道	三五	三〇、一七	—	三〇、一七	五、二八五、一五六
東 京	一〇六	四七三、二七三	—	四七三、二七三	一、〇、六四八、六九七
東 都	四〇	七、九七七	—	七、九七七	一、四四五、一三四
大 阪	一七	二二、六九〇	—	二二、六九〇	六、二七三、六三六
神 奈 川	一七	一〇九、九六三	—	一〇九、九六三	三、三五六、九九三
兵 庫	一九〇	三六四、〇八一	—	三六四、〇八一	九〇、八八三、〇六二
長 崎	一七	二六、七六	—	二六、七六	四、二七四、七〇〇
新 潟	三〇	二、五七七	—	二、五七七	三九七、二二〇
埼 玉	二五	九六、一七一	—	九六、一七一	一八、二二九、九七三
群 馬	二、四〇二	一八一、二四七	—	一八一、二四七	二九、七六二、一八〇
千 葉	一九	五、二三四	—	五、二三四	七、七四、二一八
計		一、〇、一七	—	一、〇、一七	五、二八五、一五六

小麥、小麥粉に関する統計

統二一







小麥、小麥粉に關する統計

佐賀	六九三	五五、二六	五五、二六	九、七四、三一
熊本	一、一〇九	四一、三四	四一、三四	六、一七、一五三
宮崎	一五一	一、四一七	一、四一七	三三、八〇〇
鹿兒島	六	一、九七四	一、九七四	三〇八、九〇〇
計	二、五六四	一、九四五、八五三	三五六、六二八	三九三、二五六、九八五

統二四

(ヲ) 内地小麥粉生産額累年比較

年次	製造月數	原料小麥使用高		同上價格	數	量	價	額
		内國產	外國產					
明治三十八年	一四、七八八	八〇九、三三〇	一九五、二三二	一、〇〇四、六五三	八、七三、七九一	一七五、三五、一八六	一〇、二八六、九七七	
同三十九年	一三、九三三	九六〇、六三七	一九五、五三九	一、一五六、一七六	一〇、〇九五、一四八	一九三、六九六、二八四	一一、四三五、二七八	
同四十年	一四、四四八	一〇七八、二八九	四一〇、〇七三	一、四八八、三六二	一三、六一四、八〇二	二五四、六九五、三七六	一五、一九四、一一三	
同四十一年	一三、七二二	一、五五五、二四七	三二、二七一	一、六六六、五二八	一五、九七七、三三二	二七七、六九七、九五二	一七、五八三、一六七	
同四十二年	一四、三三七	一、八九八、二六四	三五〇、〇九〇	二、一四八、三五四	二二、九五六、一三〇	三六六、一九四、七八八	二三、九四〇、七四二	
同四十三年	一一、五六四	一、九四五、八四五	三五六、六二八	二、三〇一、四八三	二三、三六四、四三二	三九三、二五六、九八五	二五、三九六、二〇五	
同四十四年	一三、三九四	一、四八九、六五六	二六六、七二八	一、七五六、三七五	一七、〇〇一、五六九	二九七、一〇八、二七七	一八、七〇九、九〇一	

(ワ) 外國產小麥最近十箇年間輸入高

年次	輸入高	價	額
明治三十五年	七二、一〇四、七〇〇	三、二七八、三三四	同三十八年
同三十六年	二〇九、一五九、一九九	一〇、三三四、四二〇	同三十九年
同三十七年	一九一、四一九、五三三	九、六二五、三九九	同四十年
計		九四〇、六三九、一八三	同四十一年
			同四十二年
			同四十三年
			同四十四年

(カ) 外國產小麥粉最近五箇年間輸入國別表

國別	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
清國	數量 三、〇〇七 價額 一四、七七四	數量 一、〇二七 價額 五、七〇八	數量 三、五七四 價額 一九、二三四	數量 二六 價額 一〇八	數量 二〇〇 價額 七三〇
英領印度	數量 〇 價額 〇	數量 〇 價額 〇	數量 〇 價額 〇	數量 二四 價額 一〇八	數量 六四六 價額 六四六

小麥、小麥粉に關する統計

統二五







其他諸港	數量	價額	計	數量	價額	關稅	價額
其他諸港	一、三〇、九九二	一、三〇、九九二	計	一、三三、八〇五	五二八、二三元	關稅	一、七四〇、九三三
	一、一九六、四六四	一、一九六、四六四		六、二二二、三三六	二、八二九、二七六		七四六、六四二
	一、三二、〇七四	一、三二、〇七四		二、五三、〇八二	一、四三三、二三七		三六六、八九七
	七四三、六一〇	七四三、六一〇		一、四三三、二三七	一、七三九、二三八		四二七、八二九
	一八、六九九	一八、六九九		二、九八、九〇六	一、七〇二、九六一		四三三、七五〇
	二九、三四五	二九、三四五		一、七三九、二三八	一、七〇二、九六一		
	一九七、九三二	一九七、九三二		四二七、八二九	四三三、七五〇		

### (夕) 外國產小麥粉最近五箇年間輸入狀態

#### ▲明治四十年

本年の輸入は百二十三萬二千八百〇三擔六百二十一萬二千二百三十八圓にして前年に比し三十五萬八千七百二十三擔百九十七萬八千七百四十四圓を減少せり即ち左の如し

國別	數量	價額
濠太刺利	七、七七〇	四三、五八

蓋昨秋來内地小麥の安値に伴れて内地製粉の格安なるありて輸入麥粉は頓に賣行不振に傾き京阪地方にては實に六七十萬袋の多額を次に持越すの不況に陥れる程なりしが故に爾來新規の注文は孰れも手控へられしが續いて今春に入り漸次持越品を捌き終り特に新注文

を發せんとするや當時米本國にては南清地方の大注文を引受け居り大平洋岸の各製粉所は非常の繁忙を極め晝夜機械を運轉して製造するも充分注文を充たすに足らざる底の盛況を呈し市價は頻々上進の狀況なりしに加へて北部鐵道は大降雨の爲め大破損を受け一時運轉を休止し原料小麥を始め石炭の搬出中絶に歸せしかば本邦よりの注文も一層満足に應給せらるゝに到らず旁々年初以來連月の本品輸入は前年に比し頗る減少を免がれざりき

#### ▲明治四十一年

本年の輸入は五十一萬八千二百二十九擔、二百八十二萬九千七百七十八圓にして前年に比し七十一萬四千五百七十四擔、三百三十八萬三

千六十圓を減少せり即ち左の如し

國別	數量	價額
清國	一、〇七三	五、七〇八
關東洲	二六八	一、四四七
香港	一、六九六	九、一四四
北米合衆國	四八、一七八	二、六三六、三四四
英領亞米利加	三三、六九	一、七三、六八〇
濠太刺利	一五	一〇三
其他諸國	三六	一、七八一
計	五八、三三九	二、八二九、一七八

日露戰後本邦製粉業の勃興するや關東方面には日本製粉(六千袋)東亞(三千袋)大日本(七八百袋)日清(千五百袋)帝國(三千袋)の各製粉會社ありて一日約一萬五千袋の多きを産出し、關西方面には日本製粉分工場(三千袋)増



田製粉(六千袋)日本精米(七八百袋)の各社のりて一日の製産力約一萬袋を算しつゝあり随て本品の供給は已に需用を超過し更に之を海外に仰ぐの必要な儘に今は僅にイーグルの如き七等品か若くは加奈陀粉の如き特殊の長所を備ふるもの(同品は他品に比し非常に粘力の強きが爲餛飩素麵の製造に適し又上等食麵の製造に賞用せらる)等が幸ふじて輸入の餘喘を維持せるに過ぎずして連月の輸入は前年に比し正に半減の己むなきに至れり前額の入減は素より其處を謂ふべし

されば輸入の各製品も漸次減少の傾きに本年其横濱港に輸入せられたるは米國粉にてセントニアル製粉會社のセントニアル、ベスト、ゴールドドロップ、ビニューセツトサウンド製

粉會社のライオン、ポートランド製粉會社のポートランド、其他ヤキマカイト、フチーアエース、ブリュノールボン等、加奈陀粉にてはベスト、プレミヤの兩品を主とし又神戸輸入の米國粉は上等品として塔印、ライオン、普通品として紙鷲、百合、東郷、菊水等、加奈陀粉にては赤ブイ、青ブイ、雪、四X等なり

本年の本品市況は春初早々不況の氣拂へにて低落を告げ爾後在荷の多からざる爲め僅に保合ひ三月に入り追々在荷薄を告げ來れる爲荷捌き漸く良好となり五月需用季に近づけることゝ一段好賣行なりしも内地製粉會社が原料仕入の商路上安賣を行ひたるより却て低落に傾き七月に入り幾分上向きしも今迄存外の

下落に手控へたる需用口一時に買進みたれば前途好望の兩狀を呈したり然るに八月に入るや内地小麦の出盛季にて内地製粉が安値にて賣出せる爲内地製品の荷捌き良好なる丈爾來輸入の本品は兎角市況の沈靜を免かれず而かも市價は本國の原料高と運賃の一弗高とに依り九月末五錢方を引上げ十月更に本國高の爲一層の上進を呈したれば荷動き殆ど杜絶に歸し唯十一月、十二月の交に至り内地製粉會社が米國小麥の高値なるより其使用を見合せ内地小麦のみにて製粉するに至れる結果米國粉同様の品は到底之を供給し得ざるに至れり爲此に輸入の本品は閑散ながら相應の賣行きあるを得たるのみなり

▲明治四十一年

本年の輸入は二十五萬三千八十二擔、百四十三萬千三百三十七圓にして前年に比し二十六萬五千四百四十七擔、百三十九萬八千四十一圓を減少せり即ち左の如し

國別	數量	價額
北米合衆國	三五、六七八	一、三六、一四〇
英領亞米利加	二〇、二八五	一、四、五〇四
濠洲刺利	三、五二六	二、一六〇
其他諸國	三、五九三	一九、三三三
計	二五、〇八二	一、四三、一三七

是れ内地製粉業の發達に連れ必然免れ難き處なりと雖も然も前年米國に於ける小麦の作柄亦不良なりしに加へアルゼンチン、濠洲等の作も亦不良なりし影響を受け本年春以來非常



に高かりしため一層需要を減するに至りし結果なり然れども米國に於ける本年の新麥は幸に豊作の豫想にて秋季に至り相場暴落し一時内地製粉よりも割安となりしため輸入約定の成立せしもの多く此れが爲め年末より次年にかけて多數の輸入を見るに至りたり

本年横濱に輸入したる米國粉はセンチニアルベスト、ゴールドドロツア、ライオンを初めとして其他ヤキマカイト、フチアエース、プリューリボン等にて前年まで波蘭製粉會社のポトランドは本年輸入されず、加奈陀粉にてはベスト、ブレミヤ等依然輸入せり又神戸港輸入のものは米國粉にてはライオン、ヤキマカイト依然多數を占め加奈陀粉にては青スワン、白鳥印、綠スワン、アルビナ、ベスト

等なるが就中スワンは最近の輸入に係り其輸入最高も多く前年輸入したる赤ブイ、青ブイの如きは本年輸入せられざりき

本品は前年不作の結果春來相場昂騰して内地品よりも五十封度に付き二十錢上に在り夏季も其儘經過したるが秋季に至り新麥の豊作にて三十五錢引下げ内地品と格別の差なきに至りしかば本邦より海外に向て買注文を發せしもの多く是れ纏て年末より明春にかけて増入を見るの基因となりしものなるが此の下落も僅に一時の事に止まり幾もなくして再び引上げ年末には内地品に比し二十五錢乃至三十錢高を唱ふるに至れり

▲明治四十三年

本年輸入の總額は二十九萬八千九百六擔、百

七十三萬九千二百三十八圓にして前年に比し四萬五千八百二十四擔、三十萬八千一百一圓を増加したり即ち左の如し

國別	數量	價格
北米合衆國	二七、〇八九	一、六四、三〇七
英領亞米利加	二、八〇四	七、七六六
濠洲刺利	六、〇八五	三、七二二
其他諸國	一、九二八	二、九〇三
計	二九、八〇六	一、七三、二二六

近時内地製粉業の發達に連れ漸次輸入の減退を免れざるべき趨勢なりと雖も本年は米國に於ける新麥豊作の結果値段が内地製粉に比して割安となりしのみならず従來米國航路の船舶は各汽船會社間に運賃の協定ありしに近頃同航路の不況にて此協定も實行せられず各會

社競争の姿にて運賃を引下げしかば輸入愈々引合ふこととなり終に秋季以後多數の輸入を見るに至りたり是れ本年米國品の輸入多くして前記増入を來せし主因なり、加奈陀物は其品質米國物よりも上等なれど値段も亦高く然も内地需用者は品質の上等よりは値段の低きを望むが故に輸入引合はずして減退を來したり、濠洲物も品質は米國よりも良しく隨て値段も高きを常とし只相場の時として出合ふ場合に於て輸入する位に過ぎず然れば其輸入額も至て少なく本年少量の入増を見たり未だ以て言ふに足らざるなり

米國粉にて本年輸入せしものはセンチニアル粉會社製造のセンチニアルベスト、ゴールドドロツア、ブゼットサウント製粉會社のヲ



イチン、ポートランド會社のエバレットを初めとして其他ヤキマカイト、フチーアエース、ブリューリボン、寶船等にて其中最も多く輸入したるはゴールドを第一としエバレット之に次ぎライチン第三に位せり加奈陀物にて輸入せしは青スワン、白鳥印、綠スワン、アルビナ、ベスト、四ツ目印等にて就中スワンは輸入最も多きを占め居れり

内地本年の賣行きは未だ以て好況と云ふべからず而して一方内地製粉の出廻り多く市場在荷の溢れたるに新麥の廉き豫想にて買入れを手控へしたため相場も常に低落勝なりしが秋季關東地方に水害の起るに及び一時引上げたれども米國の小麥豊作の影響を受け次第に引下げ年末に至り最近の相場を示すに至りたり

▲明治四十四年

本年の輸入は二十九萬四千四百四十三擔、百七十萬二千九百六十一圓にして前年に比し四千四百六十三擔、三萬六千二百七十七圓を減少せり即ち左の如し

國別	數量	價額
北米合衆國	二八〇、九三四	一、六五、八二三
英領亞米利加	七、一三九	四二、一六三
濠太刺利	五、九〇四	三三、三二二
其他諸國	四六六	二、七五三
計	二九四、四三三	一、七〇一、九六一

加奈陀及濠洲物の輸入減じて米國物の輸入増加せるは内地に於ける使用者の進歩に連れ加奈陀、濠洲物の如き高價の品を用ひざるも米國物の上等品にて代用し得るに至りしたためなり

り元來米國物は内地製粉業の發達と共に次第に輸入を減少しつつありしが然も尙内地工場は品質に於て米國物の二等品以下に匹敵すべき品を作るも一等品格のものは未だ之を製造するに至らず隨て此の二種のものとは總て外國品を仰ぐの必要あり加之二等以下の品にても内地需要者中外國品の使用に慣れしものは依然之を使用するが故に未だ全然減退を告ぐるに至らず而して本年は殊に關稅改正の關係もありしことゝて幾分買付けも多かりしかば自然入増を呈するに至りし次第なり

なり其中ベスト、ライオン、クインアンの如きは一等品にてゴールド、エバレット、トール、レットシル等は二等品なり而して普通取引に在てはゴールド、クインアンを以て標準品となす

(レ) 明治四十四年内地  
小麥國別輸出額







小麥、小麥粉に關する統計

年次	數量	價格	平均單價	產地
明治三十一年	三、三一八、〇五二	一八七、七五四	五、六六	同
同 三十二年	六九八、七五二	三五、二七二	五、〇五	同
同 三十三年	一、三三三、六三二	七三、〇七六	五、三三	同
同 三十四年	一八〇、六二七	九、二九〇	五、一四	同
同 三十五年	三二七、七三四	一六、五五八	五、二二	同
以上五箇年平均	一、二七七、七五九	六四、三九〇	五、二八	同
明治三十六年	一一〇、六四一	六、三六六	五、七五	露西亞
同 三十七年	九三、二二二	五、六三〇	六、〇五	佛蘭西
同 三十八年	五一、九五二	二、八四六	五、四八	奧國
同 三十九年	八四、七六七	五、四二九	六、四〇	伊太利
同 四十年	一九、三三八	一、三六二	七、〇八	西班牙
以上五箇年平均	七、九四四	四、三三七	六、一五	獨逸
明治四十一年	一一五、八六二	七、三三三	六、三三	羅馬尼
同 四十二年	三七六、五三二	一九、三三七	五、二一	英吉利

最近三箇年間世界各國小麥產額

產地	一九一一年	一九一〇年	一九〇九年
露西亞	一九一、一〇一	一九一、〇〇〇	一九〇、九〇〇
佛蘭西	六五、七〇〇	三七、一〇〇	八八、六〇〇
奧國	三〇、〇〇〇	三一、四〇〇	四四、九〇〇
伊太利	三三、〇〇〇	一九、〇〇〇	三三、三〇〇
西班牙	一八、五〇〇	一七、〇〇〇	一八、〇〇〇
獨逸	一七、〇〇〇	一七、七〇〇	一七、三〇〇
羅馬尼	一一、四〇〇	一三、四〇〇	六、八〇〇
英吉利	七、七〇〇	七、三〇〇	七、九〇〇

小麥、小麥粉に關する統計

年次	數量	價格	平均單價	產地
ブルガリヤ	七、〇〇〇	七、一〇〇	六、〇〇〇	北亞弗利加
土耳其	四、〇〇〇	三、九〇〇	一、五〇〇	智利
白耳義	一、九〇〇	一、五〇〇	一、九〇〇	計
セルヒヤ	一、五〇〇	一、六〇〇	一、九〇〇	(ラ) 内地小麥價格對照
葡萄牙	一、三〇〇	一、一〇〇	六〇〇	正味四十貫
瑞典	八〇〇	八八〇	八四〇	(一) 石ノ價格
丁抹	六五〇	五九〇	五〇〇	(二) 皆掛四十貫
希臘	六〇〇	三〇〇	六〇〇	(三) 正味三十貫
和蘭	六〇〇	五〇〇	五〇〇	(四) 皆掛四十貫
瑞西	五〇〇	四〇〇	四八〇	(五) 相掛
北米合衆國	八二、〇〇〇	八七、〇〇〇	九二、〇〇〇	百斤ノ價格
印度	四六、五〇〇	四五、一〇〇	三五、七〇〇	
加奈陀	二四、〇〇〇	二八、七〇〇	二二、〇〇〇	
亞爾然丁	二四、〇〇〇	一七、〇〇〇	一六、五〇〇	
濠洲	一三、〇〇〇	一三、五〇〇	一三、四〇〇	